翻　訳

クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘
―層序発掘区と第１仏教寺院―

山　内　和　也※
※　帝京大学文化財研究所

訳者前書き
第４章　西突厥可汗国の都－テュルク・ソグドの都市スイヤブ
１．アク・ベシム遺跡をスイヤブに比定する考古学的根拠
２．都市とその発掘調査
３．仏教寺院の発掘調査（第Ｉ号遺構）

訳者前書き

本翻訳は、Л.Р. Кызласов, *Цивилизация Центральной и Северной Азии, Исторические и археологические исследования*, Москва, Иэдательская Фирма, Восточная Литература, РАН, 2006［L.R. クズラソフ著『中央・北アジアの都市文明』モスクワ、東洋文学出版社、PAN、2006 年］の第４章（pp. 219-346）をなす “Глава 4. КАГАНАТАТюрко-согдийский город Суяб, столица Западнотюркского каганата［第４章　西突厥可汗国の都－テュルク・ソグドの都市スイヤブ］” の部分訳である。この章は、クズラソフが 1953 ～ 54 年に行ったアク・ベシム遺跡の発掘調査を扱ったものである。この第４章の構成は以下の通りである。

はじめに（pp. 219）
1. Археологические основания отождествления Ак-Бешима с Суябом［1. アク・ベシム遺跡をスイヤブに比定する考古学的根拠］（pp.219-225）
2. Город и его раскопки［2. 都市とその発掘調査］（pp. 226-235）
3. Раскопки буддийского храма（объект 1）［3. 仏教寺院の発掘調査（第Ｉ号遺構）］（pp. 235-314）
4. Манихейский погребальный комплекс（объект III）［4. マニ教の埋葬複合体（第 III 号遺構）］（pp. 314-322）
5. Христианская церковь и кладбище（объект IV）［5. キリスト教の教会と墓地（第 IV 号遺構）］（pp. 322-329）
6. Руины «башни молчания» VI-VII вв.［6. 6-7 世紀の「沈黙の塔」の廃墟］（pp.329-343）
7. Сакральное пространство города Суяба［都市スイヤブの神聖な空間］（pp. 343-346）

Приложение［補遺］Список монет по объектам Ак-Бешима［アク・ベシムの遺構別コインリスト］（pp. 347-350）

本翻訳は、「はじめに」から「3」までを訳出したものである。クズラソフは計５地点で発掘調査を行なっているが、調査地点という面からみれば、それぞれ「2. 都市とその発掘調査」は「AKB-2」、「3. 仏教寺院の発掘調査（第Ｉ号遺構）」は「AKB-1」、「4. マニ教の埋葬複合体（第 III 号遺構）」は「AKB-3」、「5. キリスト教の教会と墓地（第 IV 号遺構）」は「AKB-4」、「6. 6-7 世紀の「沈黙の塔」の廃墟」は「AKB-5」を扱っている。

クズラソフの発掘調査の報告としては、Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-1954 гг. // ТККАЭ. 1959, т. 11. С. 155-241（о составе отряда см. с. 157, примеч. 6）［「1953 ～ 1954 年度の都市遺跡アク・ベシム遺跡の考古学調査」『TKKAE（Труды Киргизской комплексной археолого-этнографической экспедиции キルギス考古学・民族誌学総合調査団報告）』1959, 11 巻 , pp.155-241 が知られている。同報告の構成は以下の通りである。

Введение［はじめに］（pp.155-160）
Раскопки буддийского храма（объект 1）［3. 仏教寺院の発掘調査（第 I 号遺構）］
1. Описание раскопох［発掘調査の内容］（pp.160-165）
2. Храм и находки［寺院と出土遺物］
   Относящиеся ко времени его существования［寺院の存続期間について］（pp.165-213）
3. Находки и сооружения
   относящнеся ко времени после разрушения храма［寺院の破壊後の時期に遡る出土遺物と建築］（pp.213-227）
   Раскопки на других объектах［別の遺構における発掘調査］
4. Объект II. Центр шахристана［第 2 号遺構. シャフリスタン中央部］（pp.227-229）
5. Объект III. Погребальный комплекс［第 3 号遺構. 墓域］（pp.230-231）
6. Объект IV. Христианская церковь и кладбище［第 4 号遺構. キリスト教教会と墓地］（pp. 231-233）
7. Объект V. Замок［砦］（pp. 233-235）

Заключение［おわりに］（pp. 235-237）
Приложения［補遺］ Список монет по объектам［遺構別コインリスト］（pp. 238-241）

この発掘報告では、発掘地点（AKB-1 ～ AKB-4）の番号順に記載されており、調査の内容が詳細に述べられている。2006 年に出版された同書では、発掘調査についてはすでに発表されている内容を全面的に踏襲するものであるが、その一方で、それ以降の研究成果を取り入れたクズラソフの考えが含まれている。それは遺構の名称にも現れており、AKB-3 は、当初「墓域」とのみ呼ばれていたが、2006 年の同書では「マニ教の埋葬複合体」とされ、また、「砦」と呼んでいた AKB-5 は「6-7 世紀の「沈黙の塔」の廃墟」とされている。また、「アク・ベシム遺跡をスイヤブに比定する考古学的根拠」も詳しく述べられており、さらには「3. 仏教寺院の発掘調査（第 I 号遺構）]」では大雲寺に関する項目も追加されている。このように、2006 年出版のものは、クズラソフによる都市遺跡アク・ベシム＝スイヤブ調査の集大成といえるものである。

他方、1959 年に出版された報告と比べると、図や写真の数も少なく、そのために記載の理解が多少難しくなっているのも事実であり、また、追加されたクズラソフの考えについても、議論の余地を残しているものも多い。とはいえ、クズラソフの発掘調査を知るには十分であり、また、キルギズの研究者がどのように都市遺跡アク・ベシムを考えているかを理解する手助けとなろう。

レオニード・ロマノヴィッチ・クズラソフ（Леонид Романович Кызласов、Leonid Romanovich Kyzlasov）は、1924年 3 月24日生まれで、2007年 7 月24日に83歳で亡くなった。ハカスのシニャヴィノ生まれ。ソ連邦、ロシアの考古学者、東洋学者。シベリアや中央アジアの歴史学、民族誌学の専門家で、300 を超える著作を残し、モスクワ大学教授、同大学名誉教授となった。

クズラソフがアク・ベシム遺跡の発掘調査を指揮したのは若干29歳のときのことであったようである。これについては第 4 章の冒頭に次のように記されている。

キルギズ［共和国］北部のチュー川の流域、トクマク市の南西 8km には大きな都市遺跡アク・ベシムが位置している。中央アジアにおける中世初期の典型的な平面プランを有する、かつて大きな都市であったこの遺跡は、1953～1954年、著者の指導の下にあったソ連科学アカデミー・キルギズ考古・民族誌学総合調査団のチュイ［考古学］調査隊による幅広い調査の対象となった。この調査隊はおもにモスクワ大学の研究員や学生からなり、隊長は 29 歳の考古学科の上級講師［クズラソフ］であった。

クズラソフは、発掘調査の対象が中央アジア史を解明するうえできわめて重要な遺跡であり、発掘とその成果が多大な貢献をするものだと自負していたようである。その一方で、長らくその成果がソ連邦、そしてロシアの考古学会で評価されなかったことに不満を感じていたようである。これに関し、本文中には次のように記されている。

早くも 1956 年、世界がゴータマ・ブッダの生誕2500周年を祝ったその年に、ソヴィエト連邦の中央アジアにおける最初の仏教寺院の研究に関する筆者の論文がジャワハルラール・ネルーに渡され、デリー

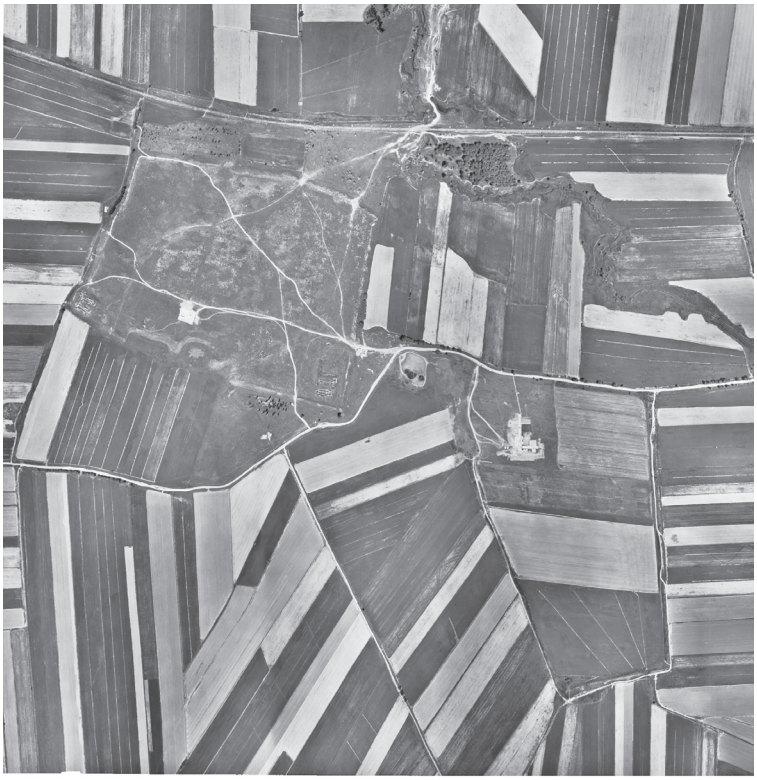
において、英語とインド国民のほかの12の言語で出版された。1960～1961年には、すぐさまイギリスとフランスの東洋学研究界がアク・ベシムの研究を高く評価し、詳細に報告した。数年後にはドイツとイタリアの学界も同じく高く評価した。今日に至るまで、私たちの活動の成果は中国および日本の学界において論じられている。とりわけ、仏教寺院の資料が注目されている。［その一方で］ロシアにおいては、評価に長い時間がかかった。

学会での評価はさておき、クズラソフの発掘は現在では考えられないほど大規模なものであり、その成果もまた驚くべきものである。2年という限られた時間のなかでこれほどの成果を挙げたことは、若きクズラソフの意気込みを感じさせるものである。それと同時に、クズラソフが力を注いだ発掘が然るべき評価を受けなかったことが、ソ連邦とロシアの考古学会に対して強い不満を抱くきっかけとなったのかもしれない。

クズラソフの発掘から60余年を経て、2016年から帝京大学がアク・ベシム遺跡で本格的かつ組織的な発掘調査を開始することとなった。クズラソフの発掘調査とその成果は帝京大学の調査・研究の基礎であり、いままさに再評価されるべきであろう。

クズラソフは数多くの著作については Леонид Романович Кызласов（1924-2007）, Биобиблиографический справочник, 2-е издание, исправленное и дополненное, Абакан, 2015 を参照願いたい。

さいごになるが、下翻訳はマリヤ・コビジャエヴァが行ない、山内が修正および加筆を行なった。小見出しの番号（3-1. など）は、山内が追加したものである。本文中の［　］は、補訳として山内が追加したもので、必要に応じて山内が訳註を付した。

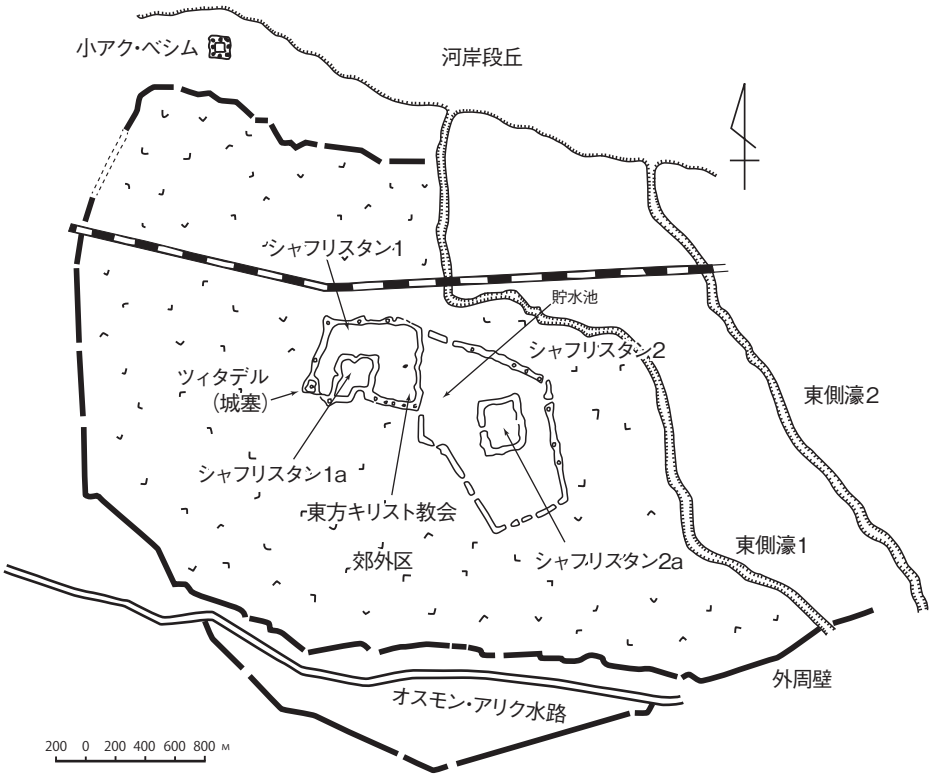


0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 m

補図１　アク・ベシム遺跡の中心部分（2019年）

0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 m

補図２　アク・ベシム遺跡の航空写真（1966年）



補図３　アク・ベシム遺跡全体図および呼称名

補図４　アク・ベシム遺跡の発掘地点番号

第４章　西突厥可汗国の都－テュルク・ソグドの都市スイヤブ

キルギズ［共和国］北部のチュー川の流域、トクマク市の南西 8km には大きな都市遺跡アク・ベシムが位置している。[1)・訳註1)] 中央アジアにおける中世初期の典型的な平面プランを有する、かつて大きな都市であったこの遺跡は、1953～1954年、著者の指導の下にあったソ連科学アカデミー・キルギズ考古・民族誌学総合調査団 Киргизской комплексной археолого-этнографической экспедицией АН СССР のチュイ［考古学］調査隊 Чуйского［археологического］отряда による幅広い調査の対象となった。この調査隊はおもにモスクワ大学の研究員や学生からなり、隊長は 29 歳の考古学科の上級講師［クズラソフ］であった。[註2)]

１．アク・ベシム遺跡をスイヤブに比定する考古学的根拠

都市遺跡アク・ベシムは、長い間、中央アジアの東洋学者や考古学者に知られていた。1894 年にこの遺跡を訪れたバルトルド B.B. Бартольд は、この都市遺跡を文献で知られている 11 ～ 12 世紀のカラハン朝の都であった中世都市バラサグンに比定することを提案した。しかしながら、同時にバルトルドは、「私たちは、バラサグン問題に関して最終的な決定をするための十分なデータをもっていない。現在利用可能な情報から判断すると、おそらくバラサグンは、東トルキスタンよりもチュー川流域に位置していた可能性が高いことを示したかっただけである。*もちろんバラサグンに関するより正確で新しい情報の発見が、この問題に関するまったく異なる解決へと私たちを導く可能性は高い*」と述べている（斜体は著者による）。[3)] 1927 年に遺跡を観察したマッソン M.E. Массон は概略図を作成した。[4)] 1929 年にチュー川流域において踏査を実施した考古学者テレノーシュキン A.И. Тереножкин は、遺跡を訪れ、アク・ベシム遺跡のトルトクル[訳註2)]について記述し、平面図を公表した。[5)] 1938 ～ 1939 年、ベルンシュタム A.H. Бернштам の指導の下にあった物質文化史研究所のセミレーチエ［考古学］調査隊 Семиреченская［археологическая］экспедиция ИИМК は、トレンチ調査およびシャフリスタン［シャフリスタン 1］の壁の外側［シャフリスタン 2］において小規模な発掘を実施した。[訳註3)] 調査中に得られたわずかな考古学資料に基づき、ベルンシュタムはバルトルドよりも断定的に、しかしながら、同じように間違って、都市遺跡アク・ベシムを古代のバラサグンに比定することに賛同した。[6)]

1953 年にチュー川の流域の調査を開始したとき、私たちは専門的な文献データしか持っていなかった。そのため前任の研究者たちと同じように、課題を解決するために選んだもっとも大きい都市遺跡アク・ベシム［こそ］がバラサグンの遺跡であるという可能性があるとみなした。[7)] しかしながら、発掘調査で出土した資料は異なる状況を示した（図 44）。

その当時の私たちのおもな結論の要旨は以下の通りである。調査の対象となったすべての遺構は、都市遺跡アク・ベシムの主要な地点に位置していたにもかかわらず（図 44）、10 世紀以降の住居建造物やそれに関係する［文化］層、焼成レンガで造られた住居は発見されなかった。とりわけ、この点は、シャフリスタンの中央に設けられた層位確認用のトレンチ調査の結果が示すとおりである。

以上のことから、都市は 5 ～ 10 世紀の間に存続し、その後、いくつかの理由により壁の内側［シャフリスタン 1］と外側は使用されなくなったと結論付けられる。11 ～ 12 世紀、カラハン朝時代には廃墟と化していたにもかかわらず、人がいなかったわけではなかった。おそらく都市の郊外区には農民が暮らしており、廃墟になった都市を訪れていたものと思われる。これに関連付けられるが、一部の遺構の上層で単独で発見されたカラハン朝のコイン、そしてとくに典型的と考えられる 76 個の一括出土コイン（第Ｉ号遺構［第 1 仏教寺院］の丘に意図的に掘られた穴のなかから、皮袋に入ったままの状態で発見された）、そして釉が掛けられたいくつかのカラハン朝時代の碗の破片などである。遺跡のおもないくつかの層からは［計］177 個のコインとその破片が発見されている。なかでもカラハン朝以前のテュルゲシュ・コインの数が多く、そのほかは同じくソグド語の銘を持つ同じくテュルゲシュ式・コイン[訳註4)]で、唐王朝のコインもいくつかあった。[8)] これらのコインによって、考古学資料によって提案される都市遺跡の遺構の年代が確定される。

ちなみに、テュルゲシュ・コインおよびほかの型式のテュルゲシュ式コインの銘は、ベルンシュタム

が想定したテュルク語ではなく、ソグド語で記されている。[9]スミルノヴァはこれらを研究および解読し、きわめて重要なこの事実をはじめて明らかにした。[10]

上述した点のすべてに基づけば、現在では、歴史的な都市バラサグンとアク・ベシム遺跡を同一視するバルトルド、およびそれを支持したベルンシュタムによる推定（それと同時に、1940年にラバドで発見したとされるカラキタイ［西遼］の遺構への言及）[11]は認められていない。11～12世紀のカラハン朝の光輝く都であり、文献によれば14世紀まで存在していた歴史的な都市バラサグンは別な地点に求められるべきである。アラブ人の著述家アル・サムアーニー［al-Sam' ānī］（12世紀）やアル・アスィール［al-Athīr］（12～13世紀）、アブー・アル・フィダー［Abū al-Fidā］（13～14世紀）は、都市バラサグンを「セイフン川［シル・ダリヤ川］を越えたカシュガルの近く」に位置付けている。[12]

ムフリソフ Ю. Мухлисов は、関連する文献を基づき、都市バラサグンをカシュガル市の南東50kmの場所に置いている。[13]

ここで、アク・ベシム遺跡の南東5km［7.5km］にある都市遺跡ブラナに言及する必要がある。この遺跡は、方形の焼成レンガで美しく構築された11世紀のカラハン朝時代のミナレット（「ブラナの塔」）に因んで名付けられた。1953～1954年に私たちが調査した大都市スイヤブの廃墟の近くに、カラハン朝のテュルク族によって建設されたこのカラハン朝時代の小規模な都市［ブラナ遺跡］には、モスクやいくつかの建物の廃墟があったが、おそらく［彼らは都市スイヤブの］破壊にも直接的に関わっていたようである。[14]しかしながら、この新しい都市の建設は、ほかの都市の例と異なり（たとえば、サマルカンドのアフラスィヤーブなど）、古い都市から別な都市への「移動」ということはできない。さらに、以下の理由で、ブラナ遺跡は新たな場所で復元されたバラサグンではあったはずもない。第1に、都市遺跡ブラナには13～14世紀の層がない。第2に、文献に記されている11～14世紀の巨大な都市バラサグンとしては小さ過ぎる。この証明となる1つの事実を挙げておく。1210年、16日間にわたってカラキタイ（契丹）の大軍は頑丈な城壁に囲まれたバラサグンを攻囲し、そののち町に侵入し、3日間略奪を行い、47000人に達するイスラーム教徒の住民を殺害した。[15]防御施設が脆弱で、小さく、また47000人以上の住民が生活していたとされる住居がないことから、都市遺跡ブラナをこのような事件に結び付けることは不可能である。[16]

したがって、都市遺跡アク・ベシムも都市遺跡ブラナも、歴史上のバラサグンに関連付けることはできない。[訳註5]

1953年の調査で得られた数多くの貴重な考古学資料の初期段階の調査によって、初期封建制度の都市、つまり現在、キルギズの名称であるアク・ベシムという名で知られている遺跡は、その当時、チュー川流域の交易や手工業、農業、文化の一大中心地であったと結論付けられた（図43）。（コインの銘文、印章、土器の種類、そしてそのほかの考古学資料に基けば）おそらく5世紀にソグド人の植民者によって建設され、さまざまな住民が住んでいた。ここにはソグド人だけではなく、テュルク人、ときにはシリア人、そして中国人さえ居住していた。この都市は、存在していた期間を通じて、シルクロードの重要な拠点であり、中央アジアの中心地域と東トルキスタンとの間の交易と文化を緊密に結び付け続けた。ここでは、異なる宗教、つまり仏教やキリスト教、中央アジアのゾロアスター教、テュルク人のマニ教の共同体が共存していた。中国の文献によれば、有名な中世の詩人である李白（701～762年）はスイヤブで生まれたとされる。

都市の領主は、テュルクの可汗に代わって（自分の名とタムガをともなう）自らのコインを発行した。[17]現在では、発掘調査の数年間［の結論］とは異なり、発行されたコインの銘がソグド語で記されているからといって、都市の領主がソグド人であったと考える理由はない。現在では、第1突厥可汗国（552～603年）、そしてそれに取って代わった西突厥可汗国（603～630年）と突騎施［テュルゲシュ］可汗国（699～766年）の公的な文字と書き言葉はソグド文字およびソグド語であったことが十分に確証されている。[18]都市遺跡アク・ベシムにおける私たちの発掘調査の成果、主として発見された一連のテュルゲシュ・コイン、そしてそのほかの型式のコイン、つまりテュルゲシュ式コインとそれらの分析が科学に貢献した点は、中世初期の中央アジアにおける政治システムの継続性と相互作用を示すという、歴史的かつ文化的に重要な事実を確定したということである。

著者が最初の出版物で表明した望み、つまり考古

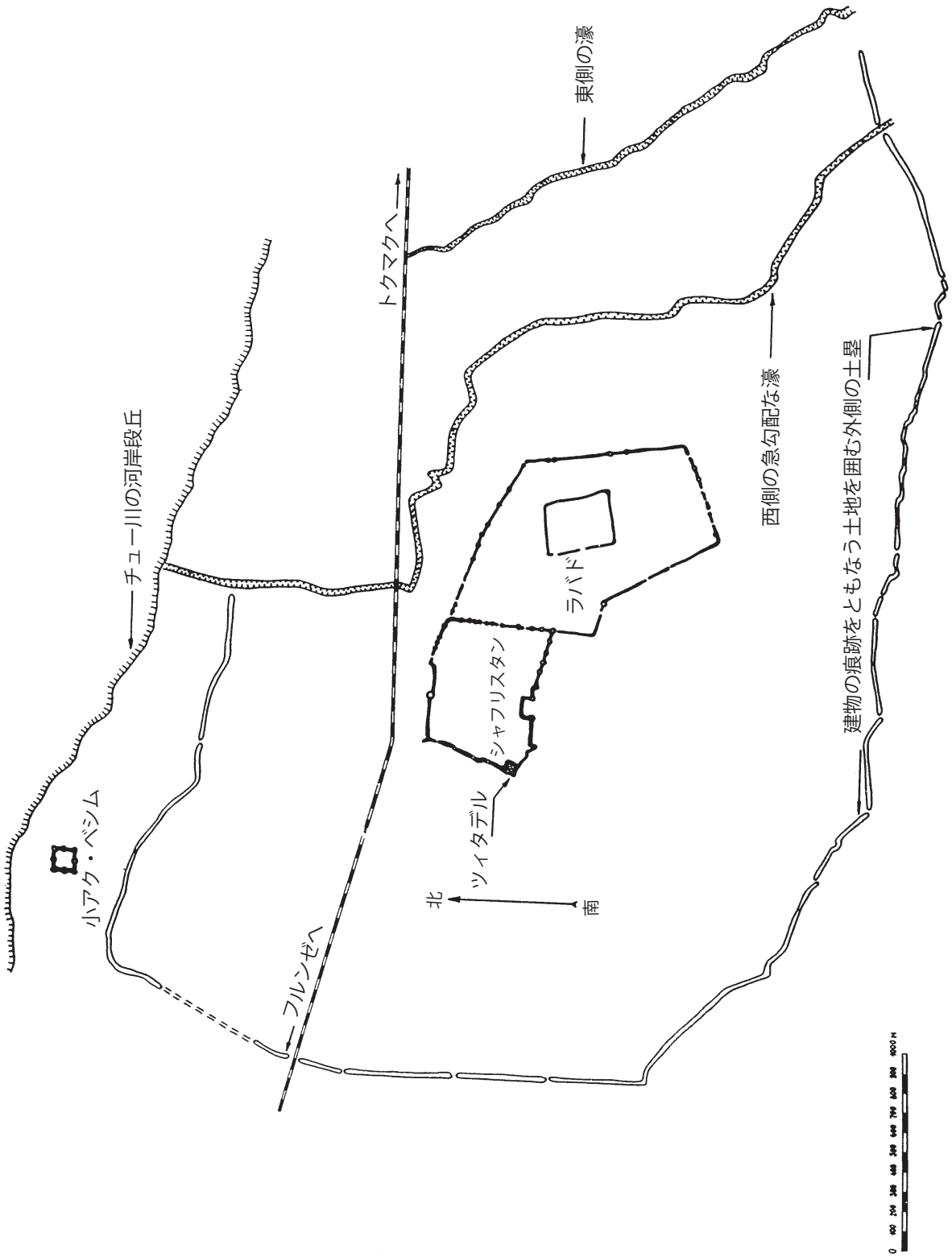


図43
アク・ベシム都市遺跡の概略平面図．カジミヤカによる簡易測量．

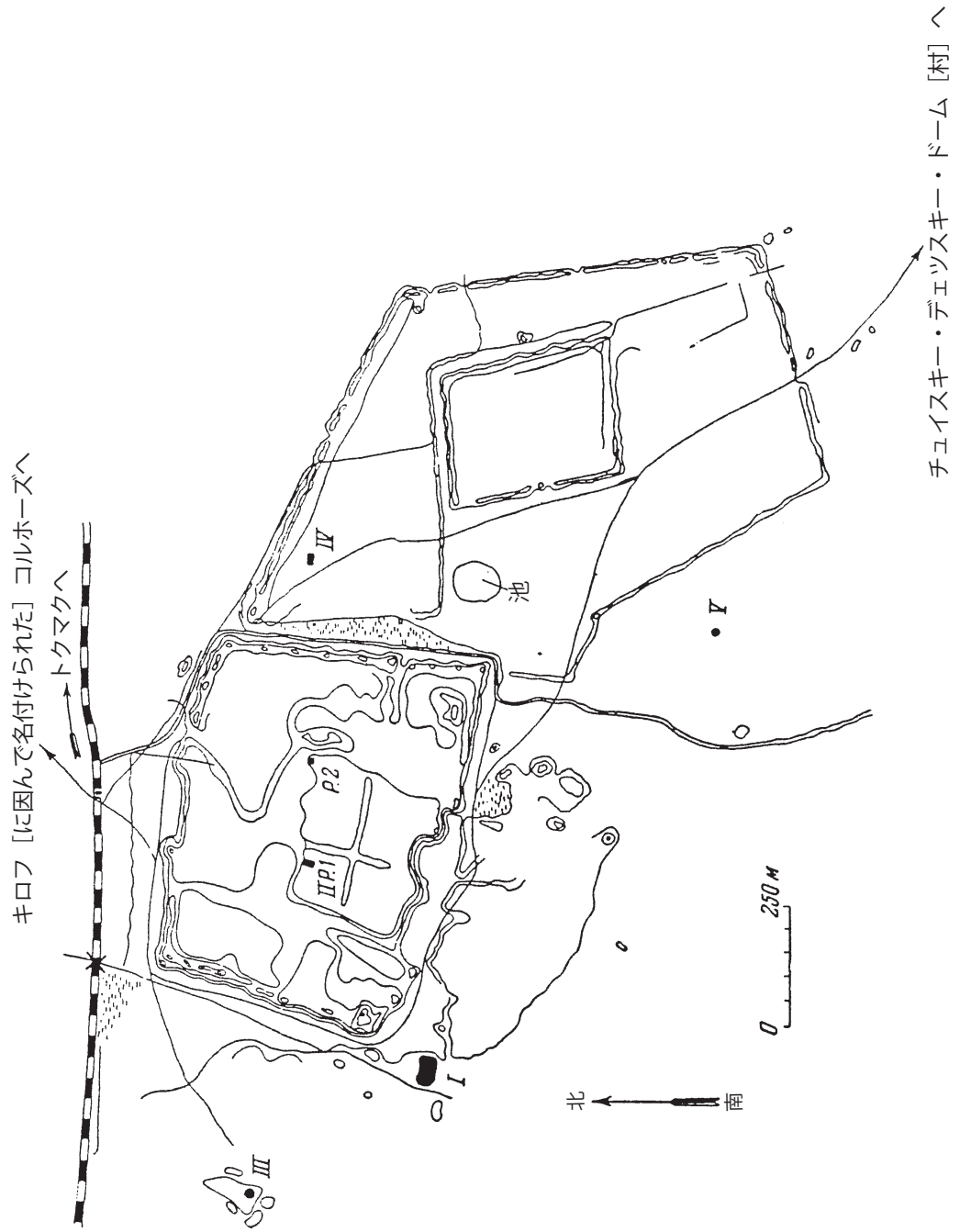


図44
アク・ベシム都市遺跡の概略図および1953～1954年に発掘された第Ⅰ～Ⅴ号遺構の位置

学発掘で得られたさまざまな貴重な資料を詳細に研究することによってこの都市の歴史の新しいページを開くという望みは、ほどなくして十分に正当なものと認められた。1960 年にはすでに、イギリスの東洋学者クローソン G. Clauson はその名称［スイヤブ］を比定し、モスクワで開かれた第 25 国際東洋学会議で発表した。[訳註6] シャヴァンヌ E. Chavannes は、1900 年に、テュルク族（突厥）に関連する文献の分析に基づいて、7 ～ 8 世紀の西突厥可汗国の都の位置を現代のトクマクの遺跡に置くことを発表したが、研究者［クローソン］はこの［シャヴァンヌの］推定に依拠していた。この古代の都市は、中国文献ではス - エ Cy-e［Su-yeh 素葉］もしくはスイ - エ Суй-е［Sui-yeh 砕葉］、またアラビア文献ではスヤブ Суяб（スイヤブ Суйаб）と呼ばれた。クローソンが論じたように、チュイ調査隊の発掘によって、大規模な都市遺跡アク・ベシムだけが、唯一、スイヤブの存続という時間的な枠のみならず、文献史料に示されている都市のおもな構成要素（たとえば、「大雲寺」に関係付けられる仏教寺院の存在）などに合致することが証明された。クローソンは「考古学者たちによって復元されたアク・ベシム遺跡の歴史は、まさに歴史学者たちによって記録されている有名な都市スイヤブの歴史であり、私の提案は、ごく簡単に言うと、アク・ベシム遺跡はスイヤブであるということである」と結論付けた。現在では、この比定は広く認められている。

このように、中世初期の文化を明らかにするためにチュー川流域におけるもっとも大きい都市遺跡の 1 つを選択したチュイ調査隊の考古学的な調査の戦略のおかげで、それまで知られていなかった西突厥可汗国の都の遺跡が発見された。都市スイヤブは、たんに古代の文献史料に言及された名称であったことに終わりを告げた。現在では、豊かな建築的な外観とともに、長期にわたる経済的、文化的な活動、社会、民族の発展という主たる特徴を考古学による分析の対象として利用することが可能となった。

2．都市とその発掘調査

都市遺跡アク･ベシムの発掘調査に先立ち、チュー川流域およびキルギズ［・アラトー］山脈の北部に沿って、さらに 1953 ～ 1954 年にはイッシク・クル湖の北岸を含めて踏査を行った。[20] まずは、左岸からチュー川に流れ込む渓流、つまりクズル・ス Кызыл-Су、シャムシー Шамси、ケゲティ Кегеты、イッシクアタ Иссыкката の河口および渓谷を調査した。地区の都市であるトクマクのソフホーズ管理･監視局[訳註7] の積極的な支援に受け、チュー川流域の左岸におけるもっとも［遺跡に］近い地区に水を供給する水収支の季節的な変動を明確にした。これによって、都市遺跡アク・ベシムおよびブラナ周辺の広大な地域における中世の土地利用の状況をかなり現実的に想定することが可能となった。

これらの作業を実施している際に、アク・ベシムの廃墟から西北西 1.5 ～ 2km の地点で、シャムシー谷を水源とし、チュー川の左岸にある池に勢いよく流入する澄んだ水の地下水流に着目した。この濾過された水が中世スイヤブの住民の基本的な水の供給源となっていた。現在の地下の水流は、明らかに、チュー川流域の農民によって建設され、かつて中世に人工的に造られたトンネル式水路［地下水路］（кяриз［キヤリーズ］[訳註8] システムの最終的な結果［現在まで残る痕跡］[訳註9] である。この状況は、都市の名称の由来を示すものであることから、おそらく、5 世紀頃、スイヤブの建設に先立つ時期に生じたことである。「ス su」はテュルク語で「水」、「ヤブ yab」はイラン－ソグド語で「水路」を意味することから、この地下水路の「キャリーズ」がテュルク－ソグド語の名前、つまりスイヤブという名を持っていた可能性は非常に高い。それに因んで、その水が供給され［新たに］出現した都市に同じ名称が付けられた。[訳註10] これに関しては、最近になってズエフ Ю.А. Зуев によってロシア語に訳され、編集されたスイヤブに関する中国の情報の新たな集成は非常に重要である。中国学－テュルク学の研究者によれば、数編の「スイヤブへの旅行記に基づいて、中国やアラブの著述家に「スイヤブ」として知られていたチュー川の流域にスイヤブが位置したと推定できる］。[21]

テュルク－ソグドの［共生］環境によって生じた 2 音節［複合語］の名称は一般的である。地理的に離れているが、次の例を挙げたいと思う。『世界の諸地域［Ḥudūd al- ʻĀlam］』（10 世紀）に記されたエニセイ川の上流に位置するケミジケット Кемиджкет「エネセイの都市」であるが、この名称ではテュルク語のケム「エニセイ」とソグド語のケット「都市」が結び付いている。[22]

確かに、長い年月にわたって、この土地の代々の

テュルク族の支配者はスイヤブの［地理的な］位置がもつ経済的な利益を正しく評価し、西突厥［可汗国］、そしてテュルゲシュ、そののちカルルクの都とした。[23] 知られているように、7～10世紀の中国王朝もまた、大シルクロードで栄えたこの都市の支配を求めた。

都市の中心は、全面に建物が建設されたシャフリスタン［シャフリスタン1］で、総面積約35ヘクタール、外側に突き出す防御の塔をともなう四角形の厚い城壁に囲まれていた（図44）。シャフリスタンの西南の隅にはツィタデルがあり、それぞれの隅には4つの大きな塔が残っている。

シャフリスタンの東側には、壁に囲まれた60ヘクタールを超える地区が隣接している。［ここは］ラバドの跡であるが（図43、44）、そこには独立した建物が分散しているだけで、封建時代のラバドにおいて一般的な連続する住居地区も、1つの文化層もなかった。[訳註11] 小さく、動物に水を飲ませる場所に適した池[訳註12]を内側に持つラバドが、大シルクロードのルートの拠点となり、隊商の宿場として使用されたのかもしれない。

上述した城壁で防御された都市の中心部の周囲には郊外区[訳註13]が位置し、その東側および南東側の境界の役割を果たしたのは、古代の深くて、比較的広い水路[訳註14]で、ほとんどいつも春の雪融け水や灌漑水路から流れ出した水で満たされていた。この水路は約3kmの長さで、現在のチュイスキー・デェツスキー・ドーム Чуйский детский дом［チュー孤児院］（1953～1960年）という小さな村の辺りから始まり、古く、高いテラス［河岸段丘］を横切ってチュー川の氾濫源に至る（図43）。チュー川左岸の氾濫原の古代の河岸段丘は、それ以前から河床が北へと後退していたことから、オアシス都市の北側を防御するしっかりとした自然の境界線として機能した。水路から1.5km、河岸段丘の崖の上には堅固なトルトクル（127 × 125 m）［小アク・ベシム］、つまり、疑いもなく、古代の要塞の遺跡が聳え立っており、その壁と塔からは、はっきりと遠くまでチュー川流域を見渡すことができる（図43）。郊外区の西側および南側の境界は、練り土［パフサ］や日干しレンガで構築された強固な防御壁からなっている。大きな弧（半径1.5km）をなす防御壁はシャフリスタンの周囲の広い地区を囲んでおり、防御用の要塞［小アク・ベシム］から現代のチュイスキー・デェツスキー・ドーム村まで伸びており、そこで上述の水路に突き当たる。防御壁に囲まれた郊外区全体は、現在では部分的に耕作されており、丘が不均一に点在している。おそらく、それらは古い、いくつかの農地の跡であり、そしてあまり多くはないが、都市の古代の埋葬に関する日干しレンガ造りの構造物の痕跡であろう（図44）。

ソ連科学アカデミー・キルギズ総合考古学・民族誌学調査隊およびその考古学部門は、直面した学術的な課題を解決するために、チュー川流域における大規模で重要な都市遺跡を選択するだけではなく、溶け出して形が崩れた数多くの丘のなかから、発掘の対象として中世都市の文化的な特徴をもっともよく確認できる遺跡を的確に選択することが求められた。同時に、調査を計画するにあたっては、調査隊の活動に与えられた2シーズンの野外調査だけを頼みとしなければならなかった。上述の事由に加えて、隊を構成する発掘区の担当者や実験室の助手たちなどの考古学および建築学科の学生に対して教育的な実技研修を計画するとともに、すべての発掘された多様な建造物の建築学的な特徴をより良く理解することを目的とした新たな発掘方法を開発し（結果的には、その後の復元用のデータを提供することとなった）、［それらが］きちんとした考古学資料となることが求められた。

同じく私たちの調査隊の隊員であるカジミヤカ П.Н. Кожемяко によって1953年5月に実施されたスレテンキー村 Сретенки の付近における発掘調査を除けば、キルギズの遺跡では、上述の対象を研究することを目的とした大規模な遺跡の発掘は行われなかったことに留意すべきである。[24]

居住用と宗教的な建物の部屋を1つ1つクリーニング［調査］する方法は、中央アジアと東トルキスタンの考古学者によって用いられたもので、［これは］19世紀に遡るが、おもに（建築的な）内装の跡や乾燥した気候で保存された文書の発見を目指したものである。私たちは、建物の調査の実践のために「スクリーンシステム」［断面観察方式］[訳註15]を導入した。つまり、調査の対象となるそれぞれの日干しレンガおよび練り土の遺構の縦方向と横方向の断面の組み合わせである。このようにすることで、経時的な層序の詳細な観察の条件が整った。結果として、それぞれの対象物［遺構］の出現、存続、再建、それに続く利用の特徴、そして破壊などの段階を正確

にたどることができるようになった。垂直の断面に反映される、発掘された遺構に残された歴史的なさまざまな状況を記録し、さらに機材を用いて、遺構が機能していたすべての時期の平面図を作成し、垂直の断面の記録と組み合わせた。これら［垂直の断面の記録と平面図］に発掘中に発見された遺物を詳細に関連付けることによって、人工的、もしくは自然の遺構の変化、連続する各段階について、正確かつ信頼できる年代を確定することができた。

十分に検討された方法と野外調査の組織化のおかげで、短時間で結果を把握し、1959年にはチュイ調査隊の最終報告書を出版することが可能となった[25]。報告書の出版後、中世の日干しレンガおよび練り土製の建物に関する私たちの発掘方法は標準となり、アジアにおける都市遺跡を研究するほかの考古学調査隊の研究的な実践に導入された。チュイ調査隊の調査によって、中央アジア東部の文化史に関する数多くの重要なデータが発見されることとなり、すぐに広く知られるようになった。

早くも1956年、世界がゴータマ・ブッダの生誕2500周年を祝ったその年に、ソヴィエト連邦の中央アジアにおける最初の仏教寺院の研究に関する筆者の論文がジャワハルラール・ネルーに渡され、デリーにおいて、英語とインド国民のほかの12の言語で出版された。1960～1961年には、すぐさまイギリスとフランスの東洋学研究界がアク・ベシムの研究を高く評価し、詳細に報告した。数年後にはドイツとイタリアの学界も同じく高く評価した。今日に至るまで、私たちの活動の成果は中国および日本の学界において論じられている[26]。とりわけ、仏教寺院の資料が注目されている。［その一方で］ロシアにおいては、評価に長い時間がかかった[27]。

1953～1954年にチュイ考古学調査隊は都市遺跡の複数の地点に位置する5つの遺構[訳註16]の調査を実施した（図44）。

1953年には2つの主となる調査対象が選択された（図44）。つまり、ツィタデルの南西、都市の中心部［シャフリスタン1］の壁の外側に位置する、広くて長い丘（第I号遺構）、そして都市遺跡の中心部、つまりシャフリスタン（第II遺構）である。これらの遺構の発掘調査は1954年にも継続された。さらに、その先の調査計画の達成に向けた2年目には、3か所で追加の発掘が行われた。第III遺構とシャフリスタンの城壁から東南にある第V号遺構とラバド内の第IV号遺構である（図44）。

結果として、2つの野外活動シーズンの間に、1つの方法を用いて、アク・ベシム遺跡において以下の遺構の調査が行なわれたこととなる。つまり、中央アジアで最初の仏教寺院と僧院（第I号遺構）［第1仏教寺院、AKB-1］、最古のキリスト教会（第IV遺構）［キリスト教会およびキリスト教徒墓地、AKB-4］、はじめて科学的に知られたナウス型の2つのマニ教の埋葬複合体［墓地］（第III遺構）［キリスト教徒墓地、AKB-3］、城のような塔（第V号遺構）［初期マニ教徒の沈黙の塔、AKB-5］である。古代都市の名称や存続期間、住民の宗教、そしてその民族性を確定することの現実的な必要性を考慮し、まずは、長い時間をかけてシャフリスタンに堆積した建築層をすべて［最下層まで］掘り下げることとした。1953～1954年には、シャフリスタンの中心部の高台［シャフリスタン1a］（第II号遺構）において、第1層序発掘区[訳註17]№1（14×6m）を調査した（図44）。発掘によって、都市遺跡の中心部の文化層の厚さは7.5mに達することが確定され、深さ8.5mで人の手が加えられていない地山［自然堆積層］に到達した。それと同時に、シャフリスタンは、ほかの中央アジアの中世初期の都市と同じように、数多くの住居が連なる地区、つまり大きな住居区からなっていたことが明らかになった。発掘区では、4つの建築層が発見され、人々は古い壁を基礎にして、日干しレンガで新しく厚い壁を構築していた（図45、46）。

第1建築層の壁だけが日干しレンガではなくて、完全に土造り[訳註18]であった。資料、おもに土器（図47～50）によれば、シャフリスタンの最初の建物（第1建築層）は5～6世紀に遡るものと判断される。最上層の建物の床では、769年［763～779年］に発行された唐王朝のコイン大暦元寶が発見されたことで、より正確に［シャフリスタンの］最終時期の年代が確定された。この状況に基づけば、もっとも重要なことは、シャフリスタンの上層（第1および第2［層序］発掘区）と第1仏教寺院（第I号遺構）[28]の第2「カルルク」建築層の住居から出土した土器はまったく同じであることから、この都市の最終の建物が存在した年代を紀元後9～10世紀と確定することができるという点である（図50）。シャフリスタンと第I号遺構は同時に終焉を迎えており、おそらく、10世紀中頃のチュー川流域への「野

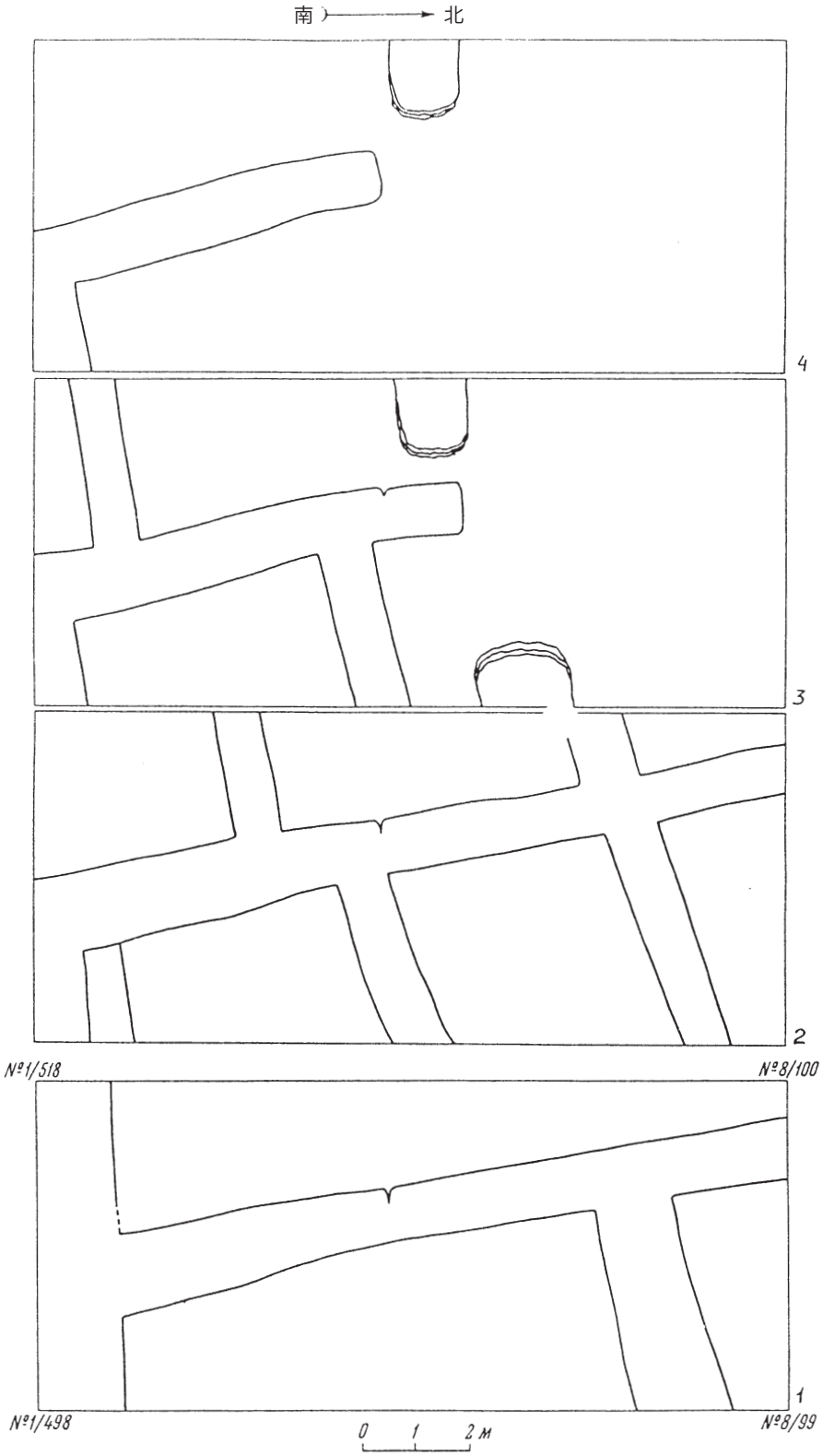


図45
第２号遺構：シャフリスタンにおける層序発掘区．住居の４つの建築層の平面図．
図版上の番号は建築層の番号に対応する（下から上に）

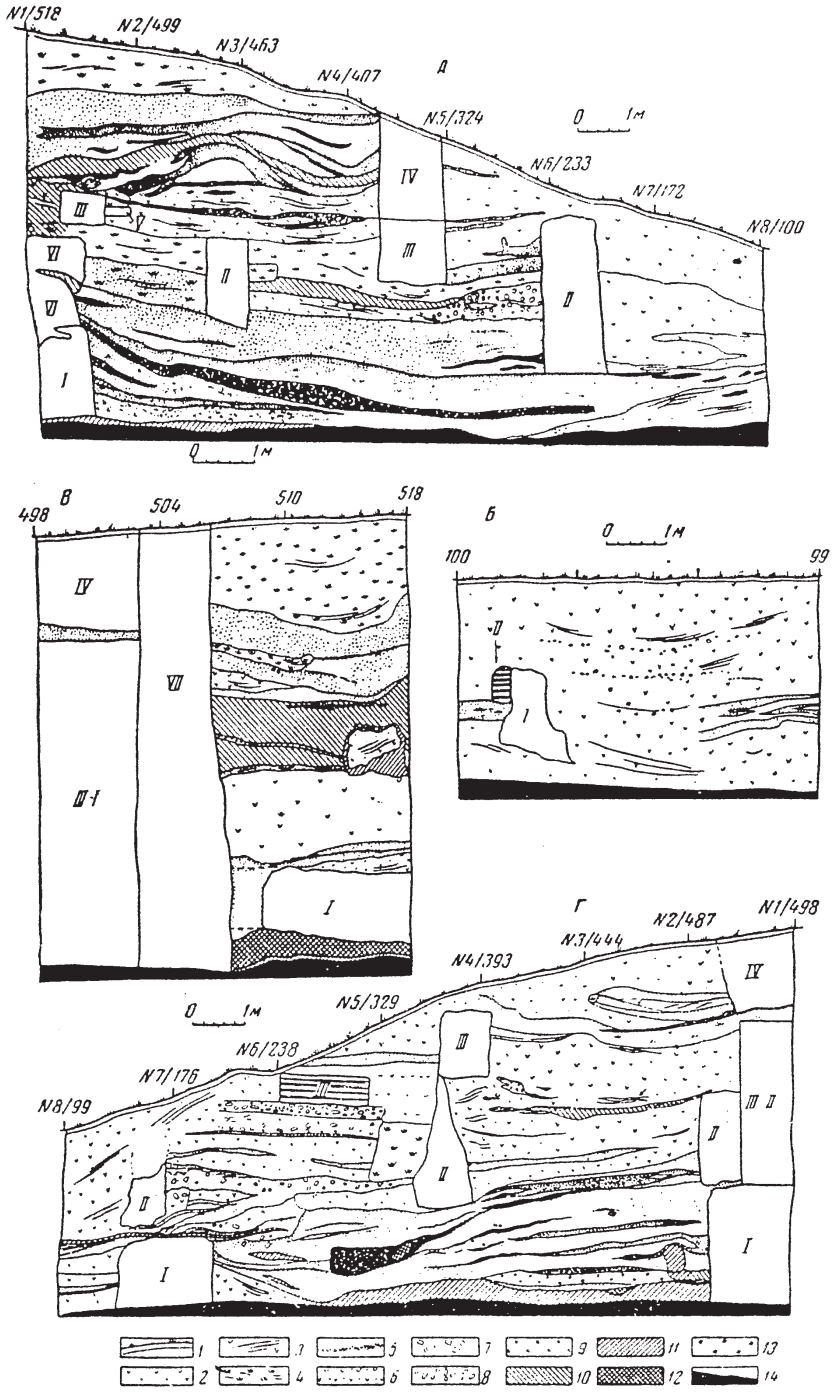


図46
第２号遺構：シャフリスタンにおける層序［確認］発掘区．４つの断面図－発掘区の側面.
А：西側，Б：北側，В：南側，Г：東側.
1. 表土層　2. 固くしまった土　3. 粘土の水性堆積層　4. 柔らかい土　5. 炭・灰層　6. 層状になった土
7. 日干しレンガの破片　8. 礫　9. 緑色土　10. 赤色土　11. 黄色土　12. 茶色土　13. 砂　14. 地山；
I. 第１層の壁　II. 第２層の壁　III. 第３層の壁　IV. 第４層の壁　V. 日干しレンガ　VI. 粘土性粘着物
VII. 第１層と第４層に建て増しされた垂直方向の壁の断面

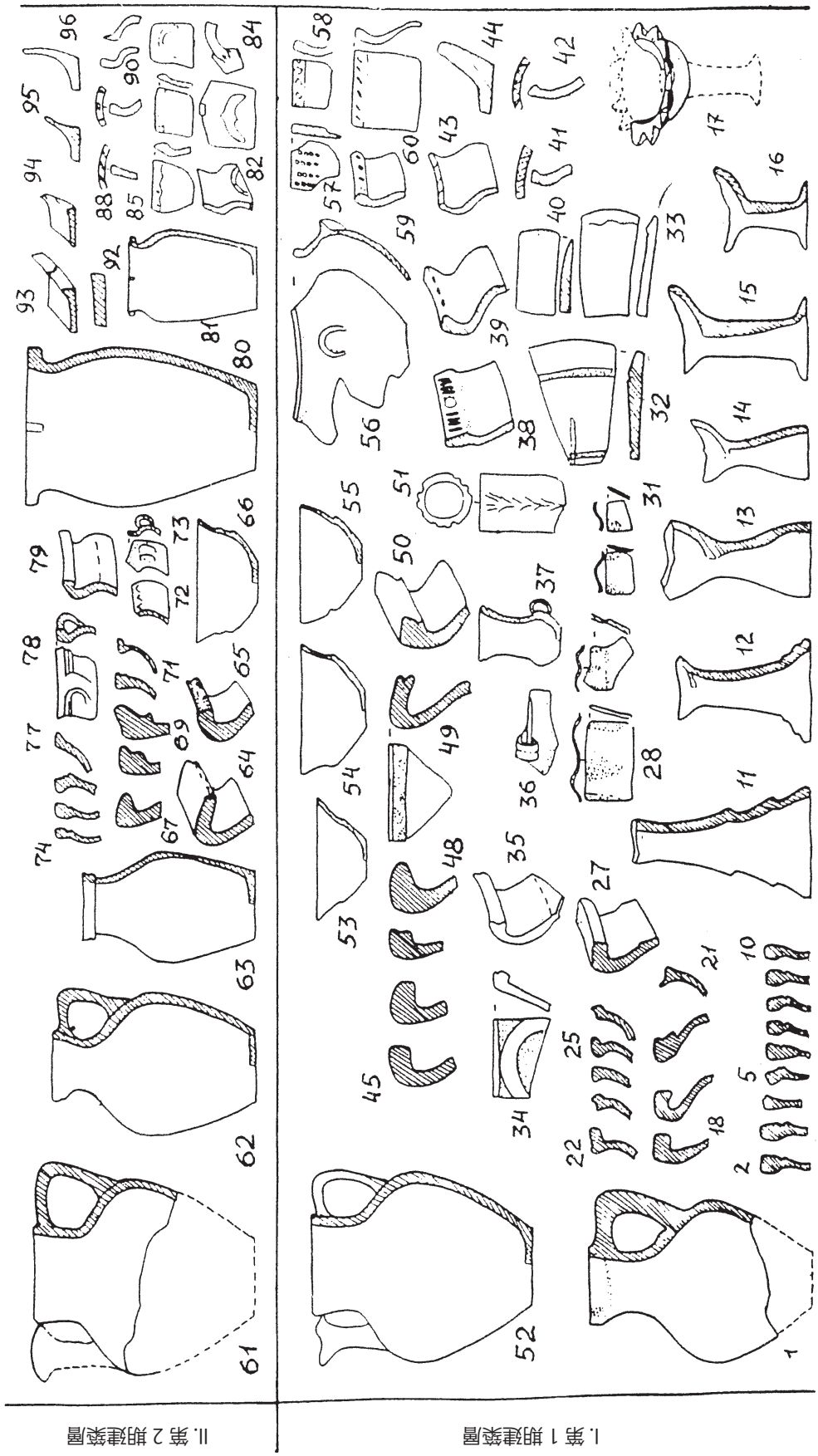


図47
第２号遺構：シャフリスタンの層序発掘区．第１期と第２期建築層の土器の型式．

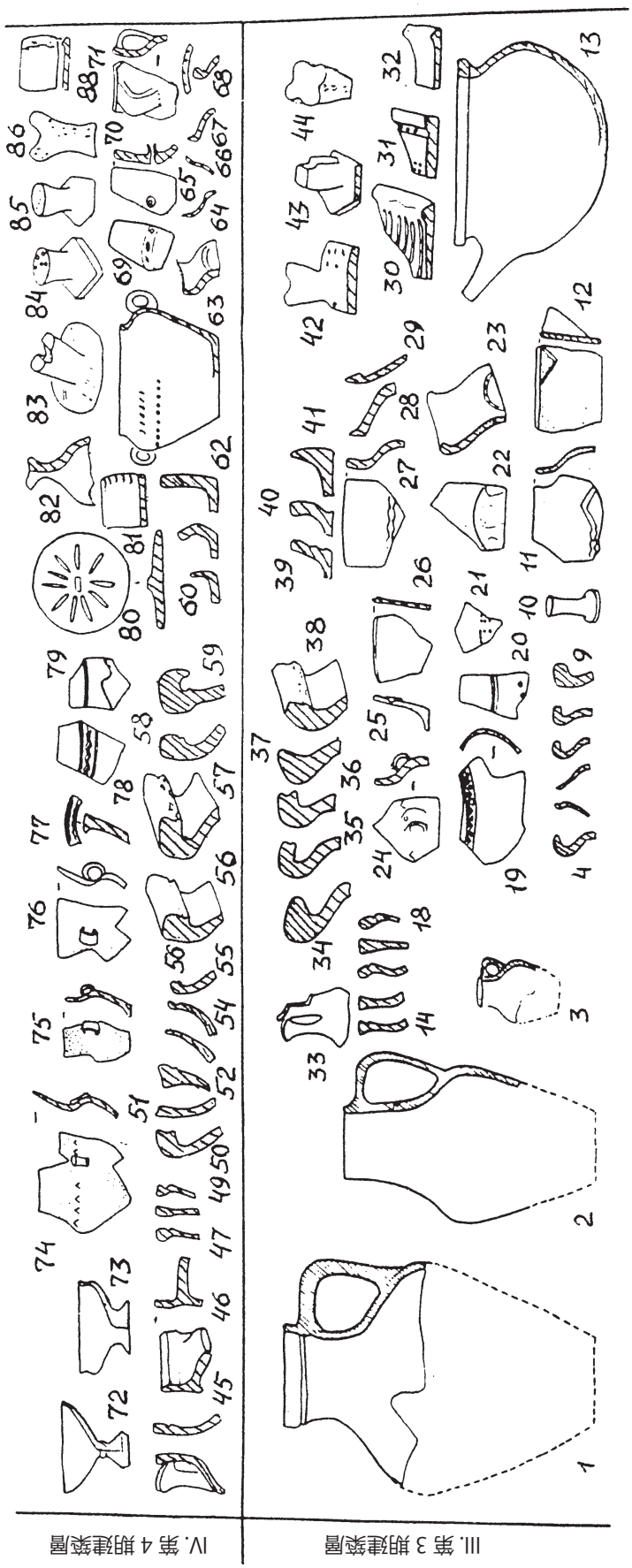


図48
第２号遺構：シャフリスタンの層序発掘区．第３期と第４期建築層の土器の型式．

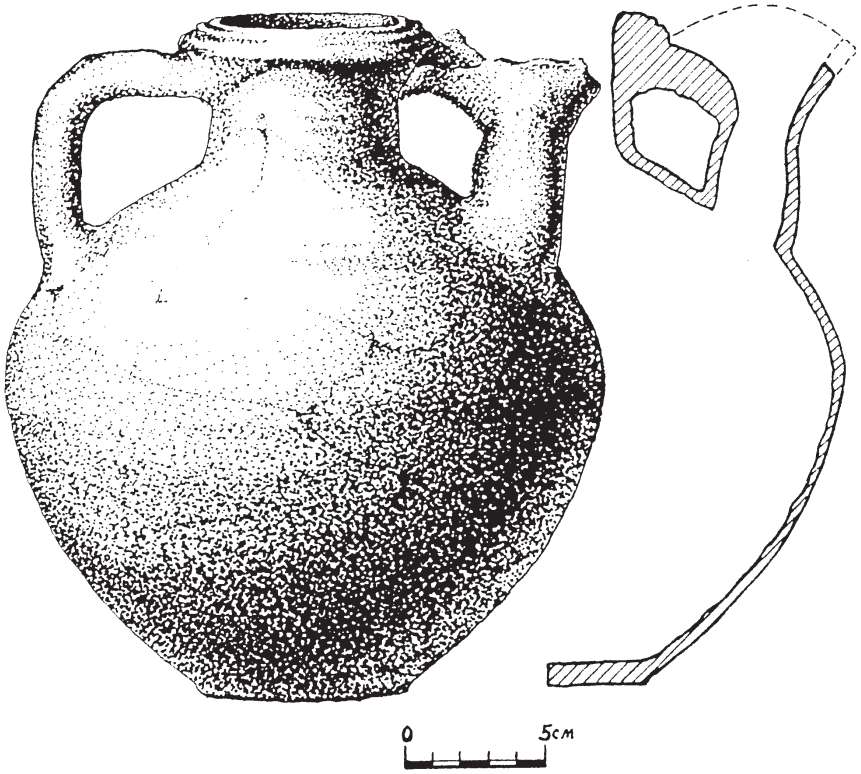


図49
シャフリスタン出土の土器．第２期建築層.

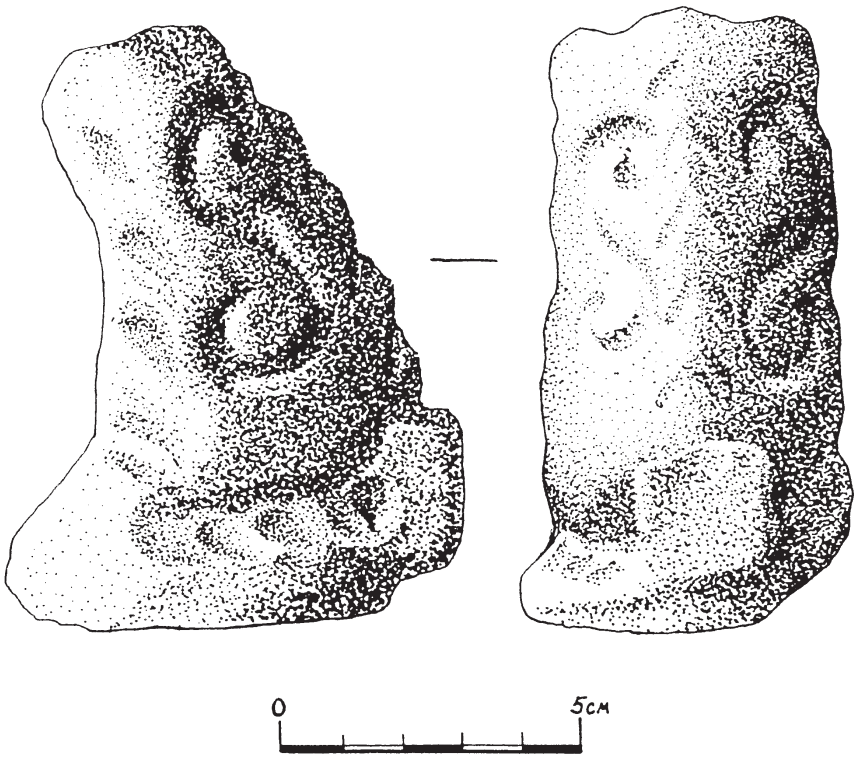


図50
シャフリスタン，上層．鍋［煮沸用容器］用の土製支脚.

蛮な」テュルク人であるヤグマ族の侵入とその当時のチュー川流域における絶え間ない封建領主同士の争いに関連しているはずである。[29)]

遺跡の最終年代を確認するために、シャフリスタンの高台［シャフリスタン 1a］の隅、第 1 層序発掘区［AKB-2a］の東に浅い第 2［層序］発掘区［AKB-2b］(3 × 3m) を設け、上層の調査を行った（図 44）。そこでもまた、日干しレンガの痕跡や 9 ～ 10 世紀の土器、唐代のコインが含まれていた。第 1［層序］発掘区の遺物は、数多くの土器やテュルゲシュ・コイン、およびテュルゲシュ式コインや単独の遺物がおもであり、文化層の年代は 5 ～ 10 世紀であることが確定された。

3．仏教寺院の発掘調査（第 I 号遺構）［第 1 仏教寺院、AKB-1］

第 I 号遺構はシャフリスタンの外側、ツィタデルから南西 100m のところに位置しており、現在ではこの丘での発掘は完了している（図 44、51）。この丘は、シャフリスタンの南壁に沿って南東に向かって郊外区［シャフリスタン 2］まで伸びている一連の小さな丘、つまり［シャフリスタン 1 の］都市壁の外側にある「集落」を形成する丘群のなかではもっとも［西］端に位置していた。

私たちは、明確な特徴を持っている丘の起伏に注目した。丘は、壁に囲まれた滑らかな輪郭をした長方形で、正確に東西方向に沿って伸びていた（長さ約 85m、平均の幅 35m）。丘の頂点は西端にあり、現地表面からの高さは 4.2m だが、東端の現地表面から計ると、この小丘は高さ 8m に達していた。頂点の東側、急な斜面の下方には、横方向に細長く、中央にくぼみがある、広間のような区画があった。その先、丘の東側部分では、丘の東端の現地表面から計ると、斜面は平均して約 3m の高さしかない、より平坦な区画に変わっていた（図 51）。後者の区画は丘の東端までに伸びており、［くぼみの］大きさは 35 × 16m で、中央部には深い縦方向のくぼみがあった。これは壁に囲まれた広い中庭のようであった。

こうした丘の地形や配置、方向は、数年前に物質文化史研究所のタジク考古学調査隊によって発掘されたペンジケントのいくつかのソグド神殿に類似しているように思われた。[30)] このようなすべての点に基づき、筆者は、この丘がソグドの建築形式にしたがって建設された神殿の廃墟を示しているという推測に至った。この推測の正しさは、6 ～ 8 世紀にチュー川流域にソグド人が植民したという周知の事実によって説明される。いくつかの修正はあったものの、建物を完全に掘り出した発掘調査の結果、私たちの推測が確認されることとなった。

このような大規模な建造物で、より良い層位的な調査を行うために、発掘は以下のようにして行われた。まずは、中心部を東西に伸びる軸に沿って丘を［南北の］2 つの部分に分けた。さらに 2 つの部分をそれぞれ長軸に沿って［直交するように］幅 6m の隣り合う 13 の発掘区に分割した。発掘区の［南北方向の］長さは丘の裾に応じたものとなり、それぞれの［地点の丘の幅の］半分の幅［長さ］となった。横軸に沿って発掘区を分け、長軸と同じように基準杭を 2m ごとに設置した。西から東へと、発掘区の番号を付けた。丘の北側部分の発掘区を 1 ～ 13 番とし、南側部分を 1a ～ 13a 番とした。[訳註19)]

すべての軸の［基準杭の］水準測量を行い、丘の平面図（図 51）を作成した後に、建物全体の層序を明確するため、各軸に沿って「ベルト」[訳註20)] を設定した（図 52 ～ 55）。1953 年には、発掘調査は、丘の頂点と想定される広間（図 51）を含めた 1 ～ 5 区と 1a ～ 5a 区、そして寺院の入口を示すくぼみが位置する丘の最東端（12 ～ 13、12a ～ 13a 区）で行われた。1953 年には、中庭においては 6、6a、8、10、11 区のみの設定を行った。1953 年に 1 ～ 6、1a ～ 6a 区を完了し、新たに設定した区（7、9 と 7a ～ 11a 区）を含む残りの発掘区は 1954 年に完了した（図 56）。[訳註21)]

第 I 号遺構の発掘調査では、2 年間で 5000 立方メートル以上の土を取り除いた。ブルドーザーとホイールトラクタースクレーパーを使用して、建物の外壁の外側の排土を取り除き、丘の裾を削って整えた。それに先立ち、丘の裾に［沿って］手作業で縦方向［南北方向］に数本のトレンチを掘った。これによって、外壁面を明らかにし、丘の裾部分は［外］壁の上部の崩落物であり、文化層が含まれていないことを確認した。土で埋もれた建物の内部のクリーニング作業はシャベルや、おもにナイフとブラシを用いて行った。というのも、私たちは、注意深く、日干しレンガの塊の堆積の構造を調べ、日干しレンガの壁のみならず、塑像や壁画、壁の建築装飾と芸

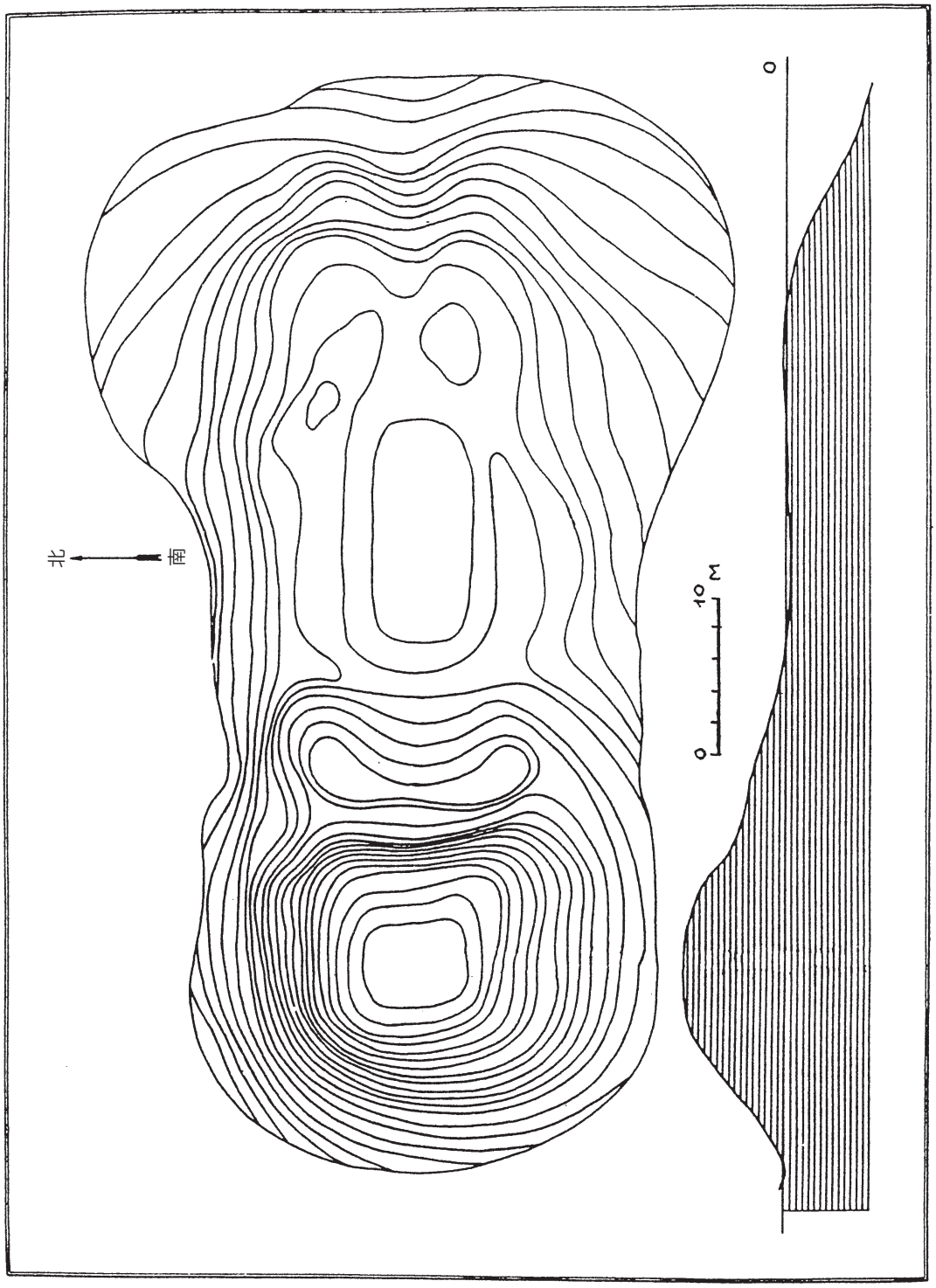


図51
［第１］仏教寺院（第１号遺構）の平面図

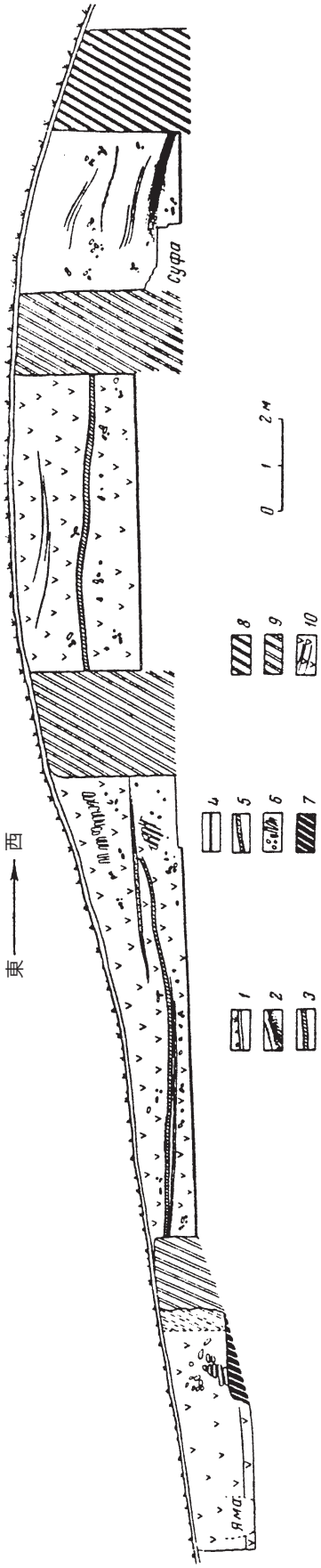


図52
第１号遺構．中心軸に沿った丘の縦方向の断面図の西側部分．
1. 表土層　2. 炭・灰層　3. 黄色土層　4. 床面　5. 砂　6. 日干しレンガの堆積
7. 固くしまった暗色土　8. 寺院の外壁　9. 寺院の内壁　10. 粘土の水性堆積層

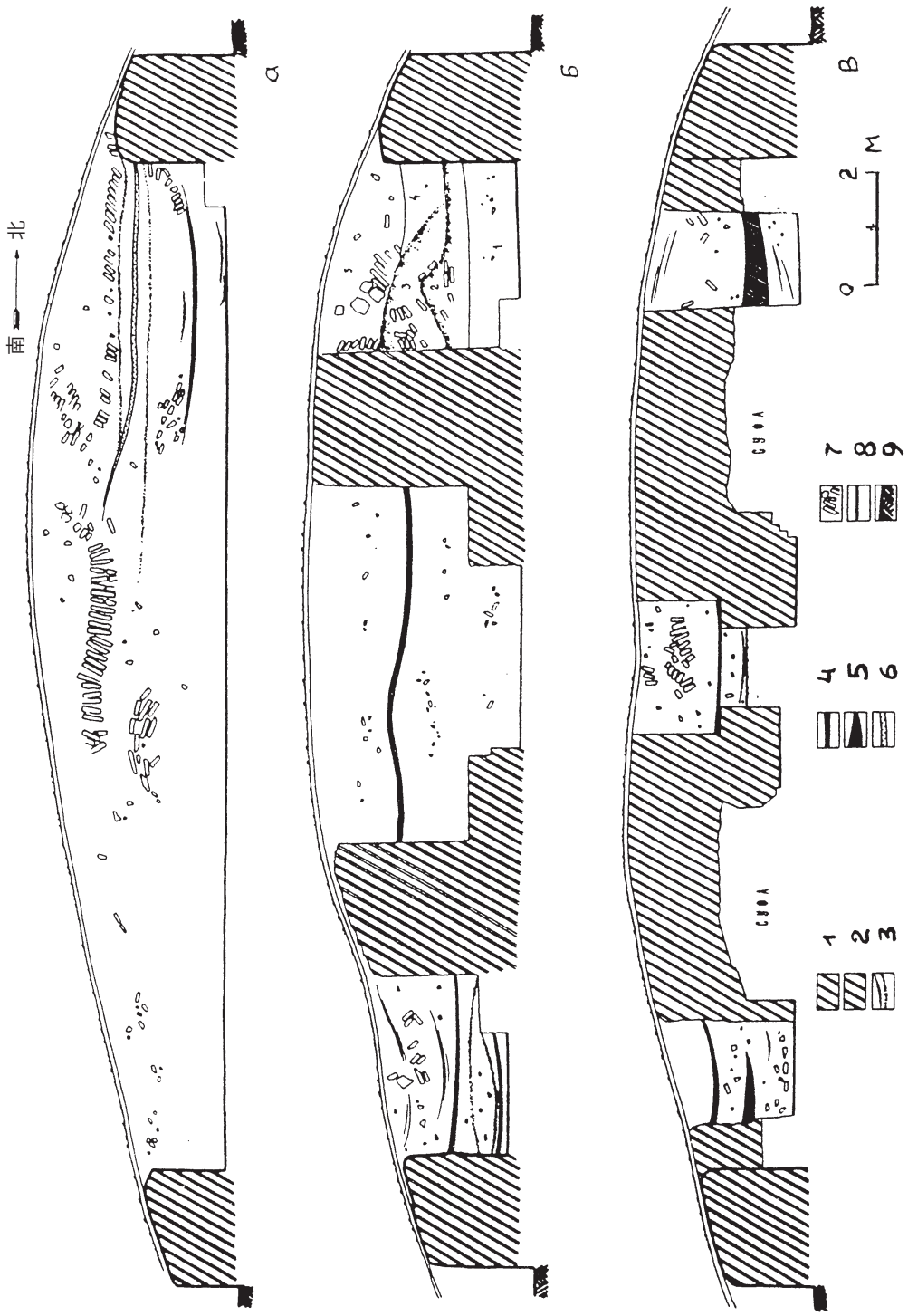


図53
第１号遺構．丘の横断面図：発掘区２（a）、発掘区３（6）と発掘区４（B）．
1. 寺院の外壁　2. 寺院の内壁　3. 炭・灰層　4. 黄色土　5. 固くしまった暗色土　6. 砂　7. 日干しレンガの堆積　8. 床面　9. 地山

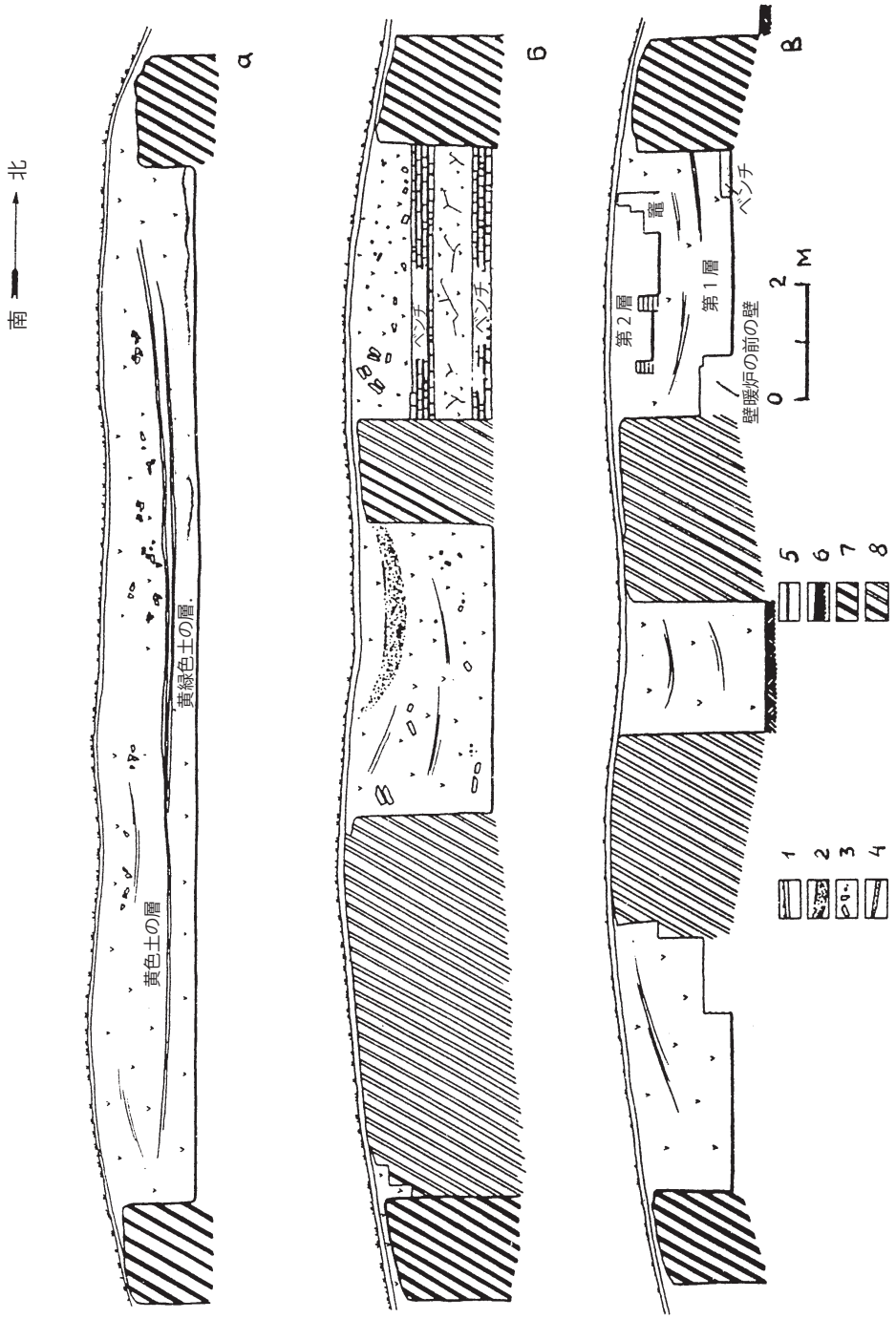


図54
第1号遺構．丘の横断面図：発掘区5（a）、発掘区12（б）と発掘区13（в）．
1. 表土層　2. 炭・灰層　3. 日干しレンガの堆積　4. 砂　5. 床面　6. 地山　7. 寺院の外壁　8. 寺院の内壁

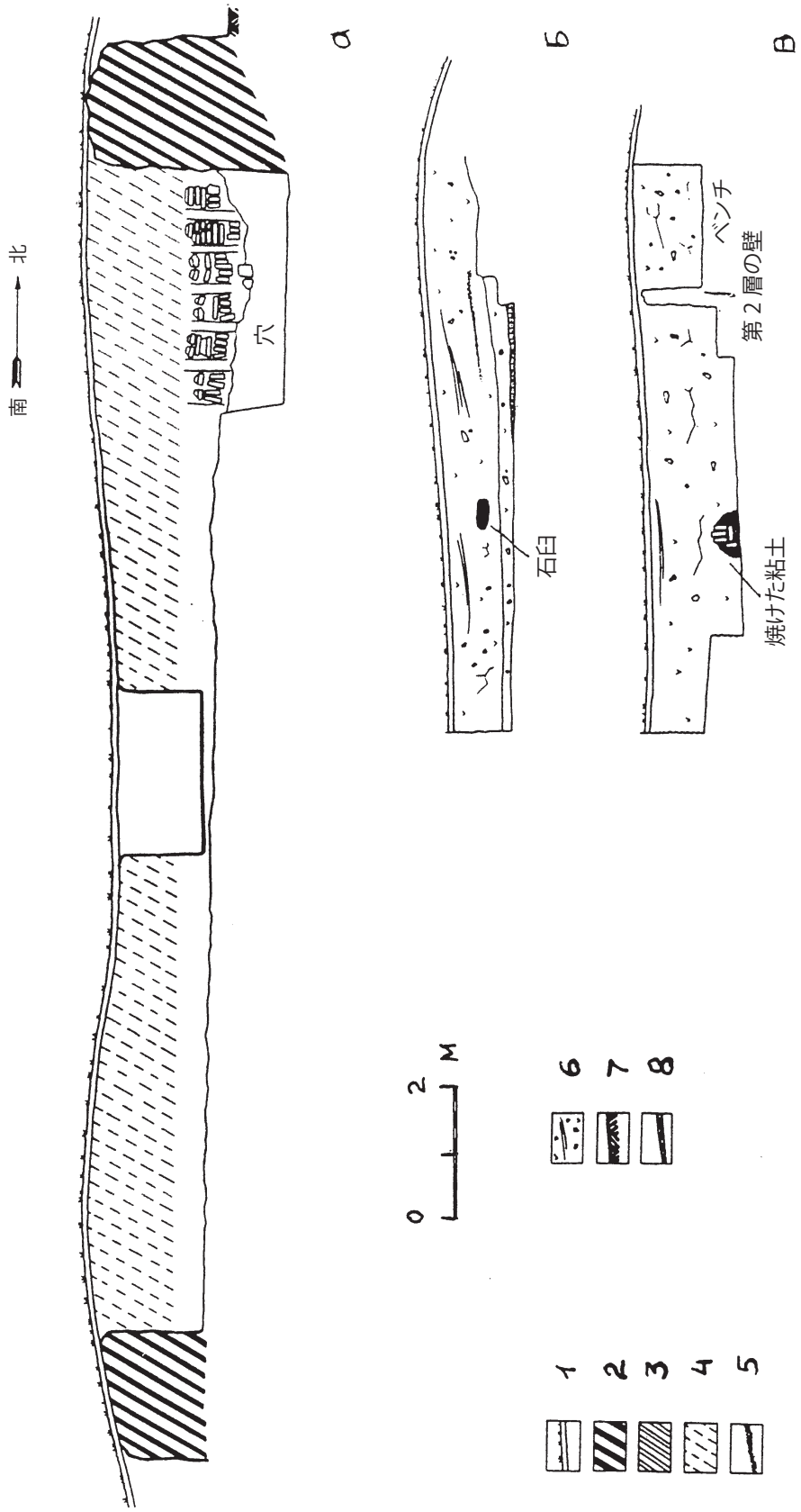


図55
第１号遺構．丘の横断面図：発掘区６（a）、発掘区10（6）と発掘区11（в）．
1. 表土層　2. 寺院の外壁　3. 寺院の内壁　4. 半壊した練り土［パフサ］の壁　5. 炭・灰層
6. 泥の水性堆積層と日干しレンガの堆積　7. 地山　8. 有機物が混じった土

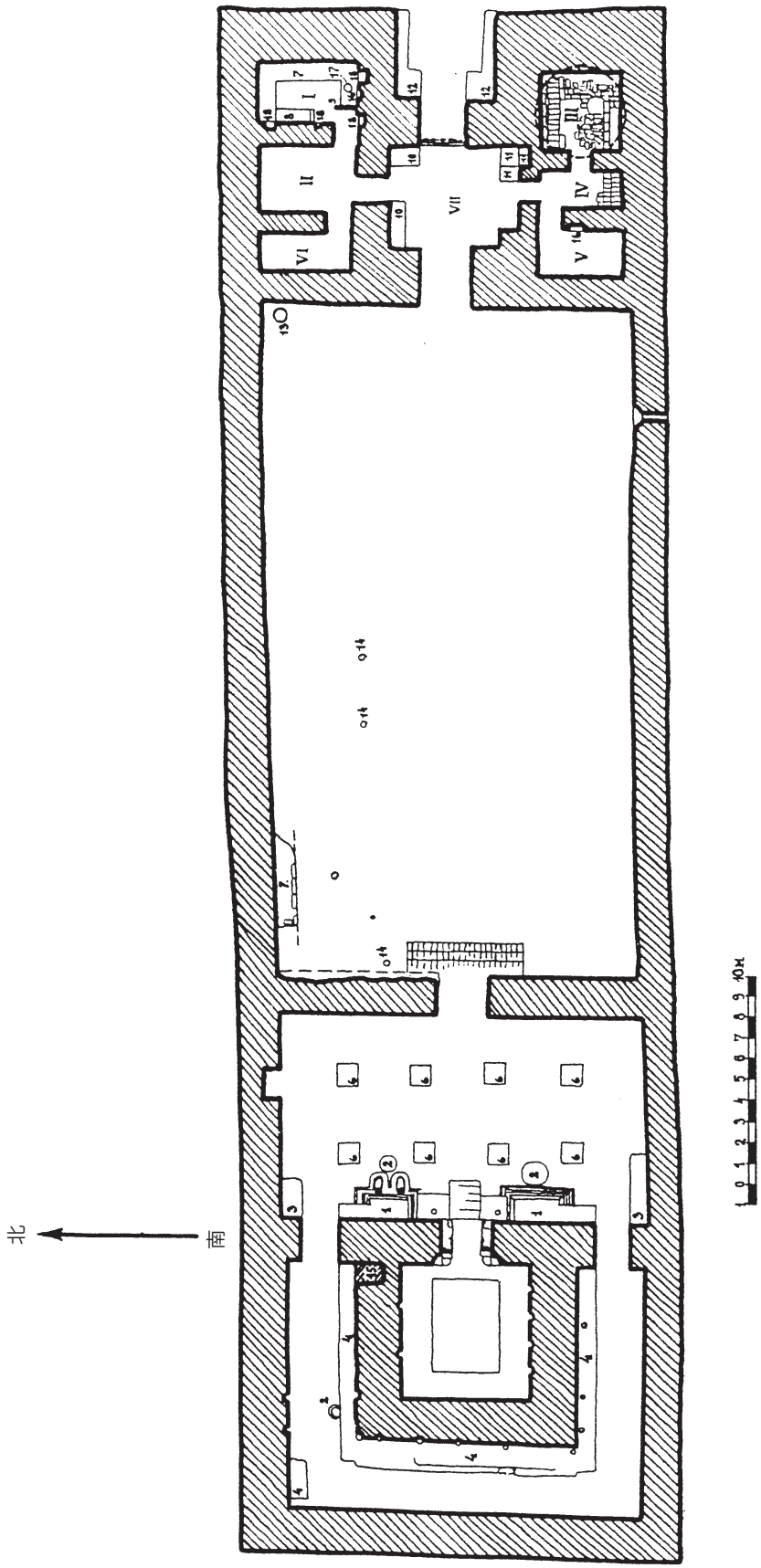


図56
仏教寺院（第１号遺構）の第１期の平面図：
1. 大きな仏像の台座　2. 塑像前面の石灰製の円形奉献台　3. 広間の塑像設置用のベンチ　4. 回廊のベンチ
5. 扉用のスラスト軸受をともなう祠堂の出入口の階段　6. 広間の柱の基礎の痕跡　7. 居住部屋のベンチ
8. ヘッドボード付きの寝台　9. 炉用の間仕切り壁　10.「出入口ホール」のベンチ　11. 階段　12. 出入口前のベンチ
13. 排水・汚水用（トイレ用）の穴　14. アイワン用の柱の穴　15. 壁上方の壁龕　I～VII. 出入口付近の部屋

術的な装飾の破片、そしてとくに重要な寺院の建物の天井の破片を検出する必要があったからである。[31)]

3-1．寺院の建築

3-1-1．建物のプランおよび建築材料[32)]

発掘によって、丘の下に埋もれていた、長さ76m、幅22m、保存状態が良好な7世紀末～8世紀初めの仏教寺院址が確認された。寺院は長方形をなしており、正確に東西軸に沿って伸びていた。建物は同じ［東西方向の］軸に沿って伸びる自然の微高地（「起伏のある地形」）の上に構築されており、西側部分は東側より高くなっていた。この自然の微高地の特徴が、建物全体の階段状の構造に利用された。つまり、寺院の正面部および中庭は中央広間の床より低く、祠堂の床面は中央広間より高かった（図57）。

建物の壁は堅固で、厚さ2mあり、重いドームと回廊のアーチを支えた祠堂の壁の厚さは2.5mであった。出入口が位置する東壁はとくに堅固で、厚さは3mであった。

建物のすべての部分の壁は例外なく44 × 22 × 8cm、45 × 23 × 9cm、そして（もっとも多くの場合）48 × 24 × 9cmの「ソグド」寸法の横長の日干しレンガで構築されていた。レンガの下面には、モルタルとの接着を良くするために、［レンガの］湿った粘土に4～5本の縦溝が手の指で付けられていた。犬の足跡も2つ見つかった。レンガの断面では、土に混ぜられたスサや栽培された穀物（大麦？）の粒の痕跡が観察された。

ほとんどすべての壁の基部（基礎）は、90 ～ 80 × 60 ～ 50cmの練り土［パフサ］の整形された［方形］ブロック造り[訳註22)]であり、その厚さはその地点の壁の厚さに対応していた（図58）。これらのブロックの表面は完全なまでに滑らかで、切れ目は非常に鋭い金属製の道具で切られており、かなり深かった。建物全体のすべてのブロックの大きさは同じであった（図59）。ただし、広間の外壁の基礎のブロックだけは例外で、側壁の基礎は、広間の床部分の水平の古い床面の高さより少し低かったため、［大きさは］97 × 77cmに達していた。[訳註23)]

3-1-2．出入口および出入口の付近の部屋

東側に位置する寺院の出入口は上りのスロープとなっており、両側面には幅の狭いベンチ[訳註24)]があった。かつては、入口の正面の壁全体が、植物文様のストゥッコ粘土のレリーフ[訳註25)]で豊かに装飾されており、多くの場合、束となっていた。すべてのレリーフには青の彩色が施されていた。スロープに続いて戸口（幅は2.15m）があり、開口部の壁全体の厚さ［に相当する］幅の日干しレンガの敷居があった。[訳註26)]かつては、開口部の東側には重厚な木製の扉があったが、［現在では］玉石のよる舗装の上に設けられた木製の敷居、そして磨耗の痕跡がある玉石で作られた小さな石製のスラスト軸受けしか残っていない（図56）。

出入口は、小さな出入り口ホール（部屋VII）[訳註27)]に通じており、その左右にはアーチ天井の通路で結ばれた6つの出入り口付近の部屋[訳註28)]があった（図56, I-VI）。より正確には、もともとは6つの部屋が造られたものの、建物が存在していた間に、その数やレイアウトには多少の変更が加えられた。

つまり、もともと出入り口ホールの北側は、アーチ［天井］の通路によって部屋IIに通じていた。部屋IIは通り抜けられ、その東側と西側に部屋Iと部屋VIがあり、それぞれ部屋IIとアーチ［天井］の通路で繋がっていた（図56）。3つのすべての部屋は、居住用の小さな長方形の部屋であった。早い時期に塞がれた部屋VIだけは狭くて小さかったので、おそらく倉庫として機能していたのであろう。部屋IIにはベンチ、そして壁に小さな壁龕があった。部屋の壁には漆喰と石灰[訳註29)]の白塗りが上層に施されていた。

しかし、その当時の居住の特徴という観点からとくに興味深いのは、「門番部屋」と仮に名付けた部屋Iである（図56；59；60, I）。壁にはていねいに漆喰、そして［その上に］石灰が白く塗られていた。東壁および北壁に沿って低いベンチが設置されている。南壁には2つの家内用の壁龕、そして煙突がない、高い位置に造られた炉がある（図59, I）。炉の上部の煤けた壁から判断すると、煙はその上の天井に設けられた孔から出ていったようで、後者［孔］の上部には煙突があった可能性もある。炉の前には日干しレンガを敷き詰めた壇があり、そこには、おそらく1人用のパン焼き用の小さな竈（直径33cm）が掘り込まれていた。パン焼き竈の焚口は側面にあり、おそらく植物性の燃料が焼け残った柔らかい灰で満たされていることがわかった（図59, I, 3；60, 2）。炉は扉の近くにあったので、扉の開閉時に生じる強

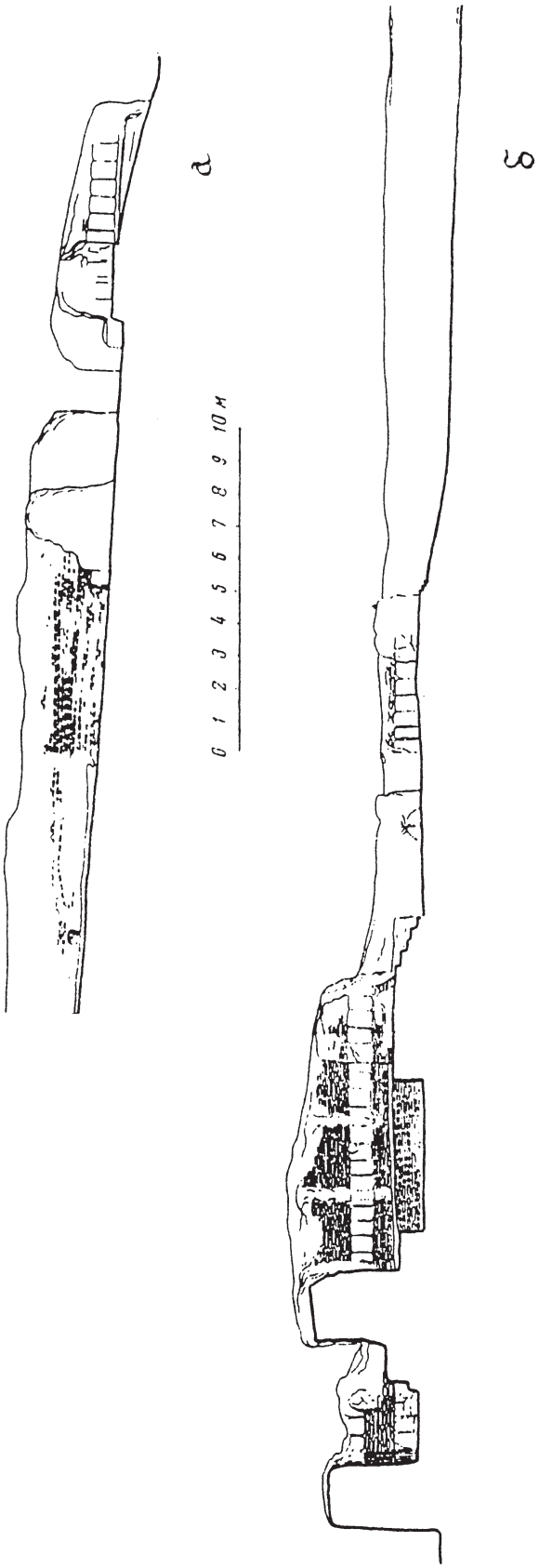


図57
仏教寺院の縦断面［見通し］図：東側部分（a）および西側部分（б）

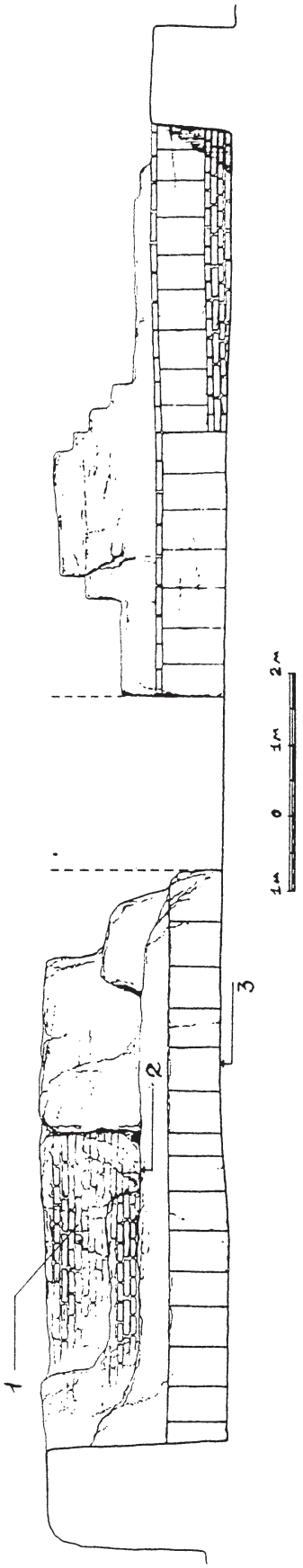


図58
寺院の東壁（西より）：1. 第２層の壁　2. 第２層の床面の高さ　3. 第１層の床面の高さ

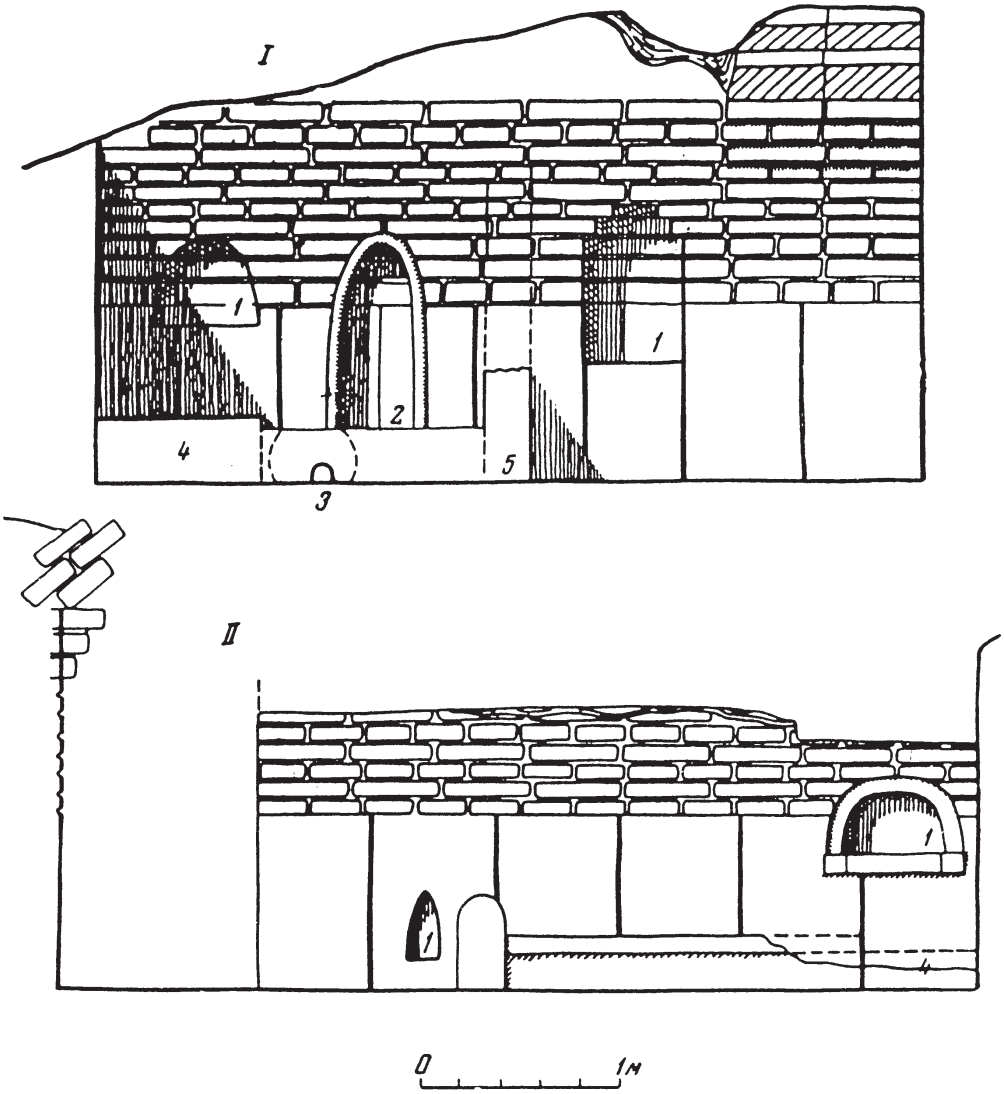


図59
部屋 I：I. 南壁　II. 西壁　1. 壁龕　2. 炉［壁暖炉］　3. パン焼き竈
4. ベンチ　5. 出入口側と炉を仕切る壁［間仕切り壁］

い空気の流れから火を守るために、炉の入口側は細長く、高い（厚さはレンガ１個分の）壁で仕切られており、そのために入口に小さな通路が生じた（図60,1）。

部屋の西壁にはアーチ天井をもつ開口部をともなう扉があり、おそらくランパート・アーチ[訳註30]の種類であり、その１つの基部が残っていた（図 59.1；60.1）。さらに２つの小さな壁龕、そして壁に接して日干しレンガと土造りの丸いヘッドボード［寝台の頭をおく側についている飾り板］を備えた１人用の狭い寝台（2.15 × 0.65m）もあった（図 60, 1, 2）。

見たところ、この小さな部屋には（面積は約 13 平方メートル）、ベンチと寝台のほかには家具がなかったが、滑らかにきちんと［プラスターが］塗られ、ぎっしりと突き固められた土造りの床と石灰の白塗りが塗られた壁（おそらく天井も）のおかげで清潔かつ快適であった。出入り口ホール［部屋 VII］の南側には、残りが良いアーチ［天井］の出入口の向こうに、さらに３つの部屋（III ～ V）があり、それらもアーチ［天井］の出入口で繋がっていた（図 60, 3；61-64）[33]。

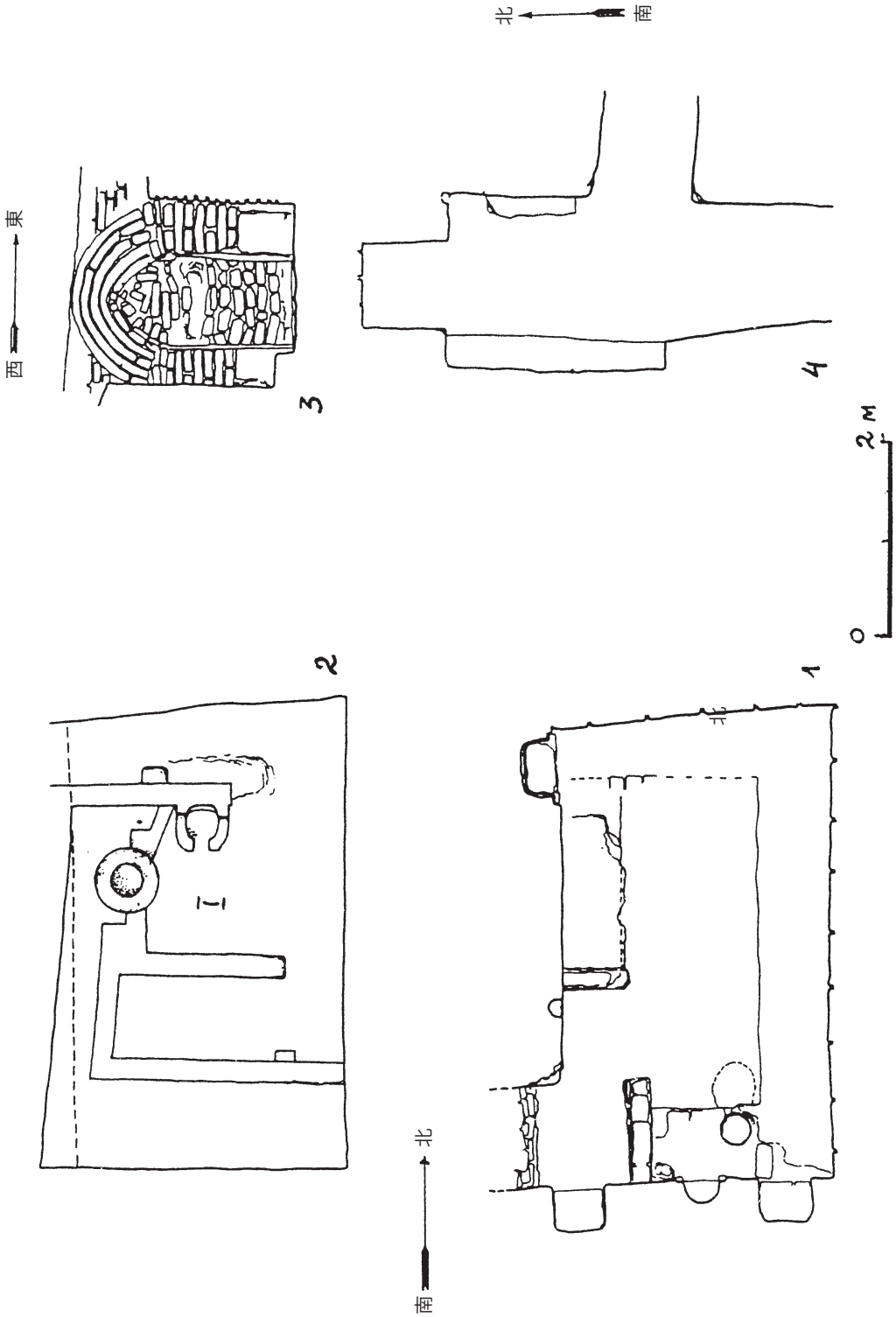


図60
部屋Ⅰおよび部屋Ⅳ：1. 下層の部屋１の平面図　2. 第２建築層の部屋１の平面図（部屋Ⅰの上層）
3.（アーチを塞いだ後の）部屋４の北側の壁面　4. 遊牧民が居住していた時期の部屋Ⅳの平面図

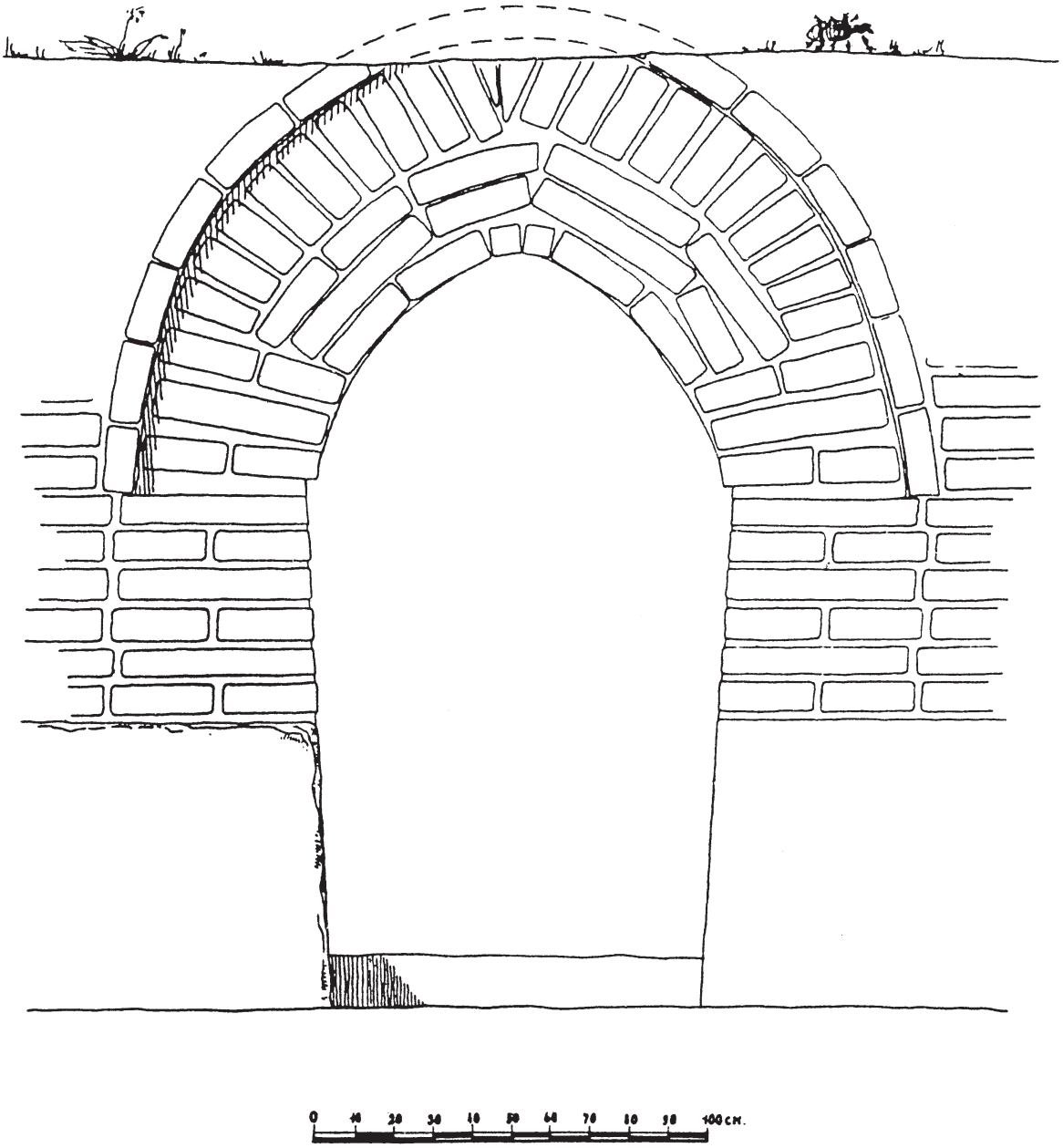


図61
寺院の東側部分に残存しているアーチ．北より見たもの.

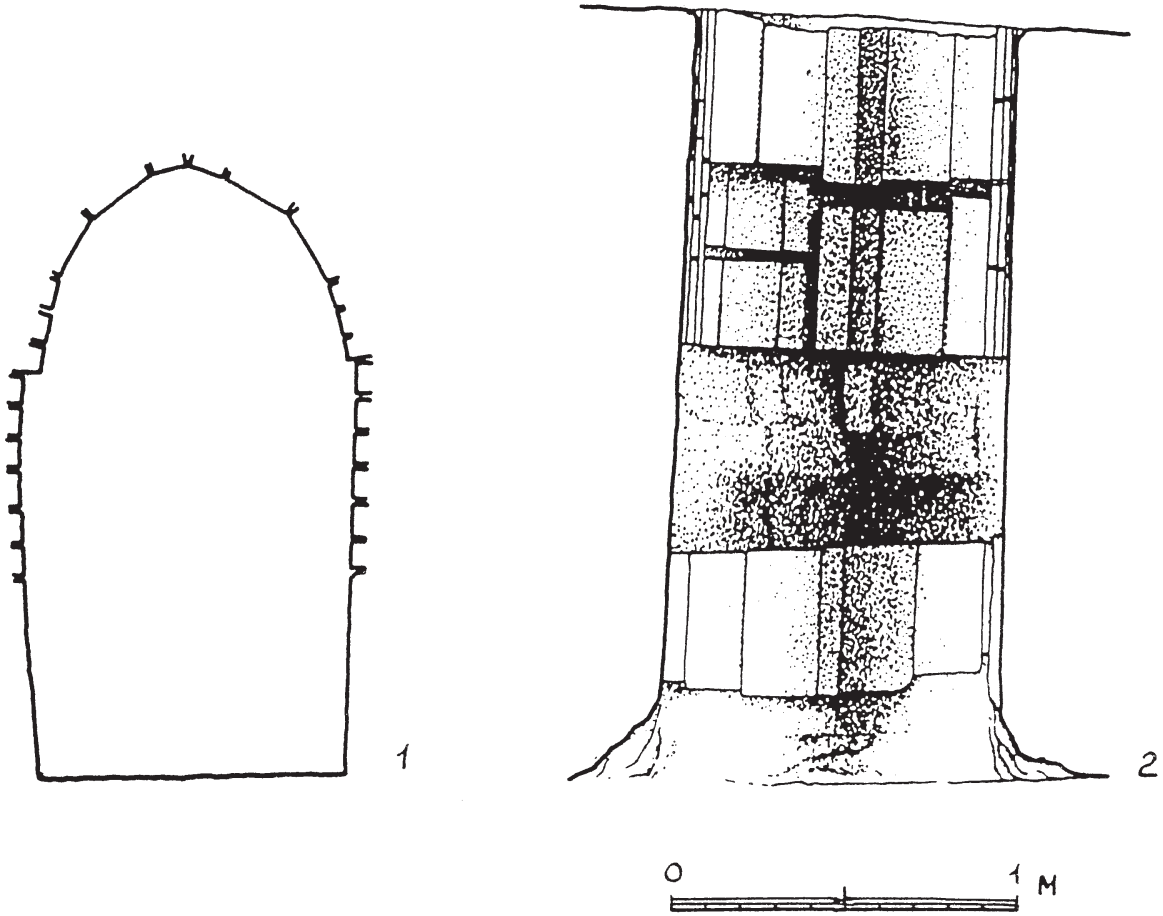


図62
寺院の東側部分のアーチの断面図（1）とヴォールトの平面図（2）

3-1-3. 部屋 III

当初の部屋 III［の平面プラン］は正方形で、ドーム屋根を持ち、その円形のドラム[訳註31)]は、4つの入隅迫持[訳註32)]（その2つのみが残っている）で支えられていた（図 56；64, 2, 3）。この部屋の調査、そして下層の床面で（もともとは、床には日干しレンガ〔48 × 24 × 8cm〕が敷かれており、プラスターが塗られていた）[34)]見つかった遺物（たとえば、土製［焼き物］の僧侶の数珠〔図 89, 5, 6〕と仏陀像の青銅製飾り板[訳註33)]〔図 86, 2〕）に基づけば、ここはもともと仏教の祠堂[訳註34)]であったと推測でき、ドーム屋根を持つ部屋の建築的な外観とも良く一致する。

細長く、長方形の部屋 IV（図 60, 3, 4；64, 2）はもともと通路であった（図 56）。ここから、アーチ構造の開口部で上述の祠堂（部屋 III）および部屋 V に通じていた。部分的にしか残っていないが、この通路にヴォールト天井があったことは興味深い（図 64, 2）。ヴォールトは横方向の断面［が見えるように］積まれている。部屋 IV のもともとの床には、部屋 III と同じ寸法の日干しレンガが敷かれていた（図 56）。この床の上で、2つ目の仏陀像の青銅製飾り板（図 86, 3）が見つかっているが、おそらく部屋 III から捨てられたものであろう。

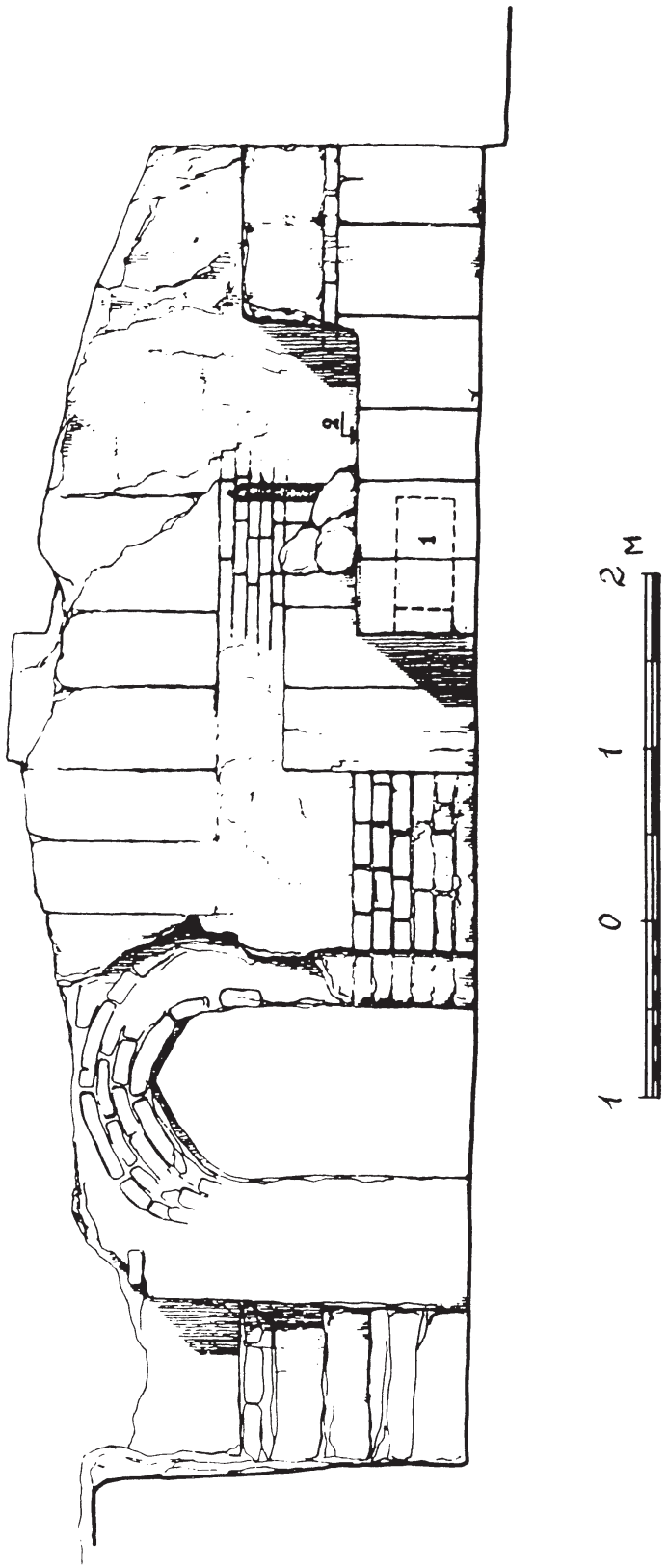


図63
アーチ型の出入口をともなう「出入口ホール」の南壁（部屋 VII）.
右側は寝台（「カン」）で，遊牧民が中庭への出入口の塔門［の基礎］に掘り込んだもの：
1. 寝台下部の煙道をともなう炉　2. 寝台の高さ

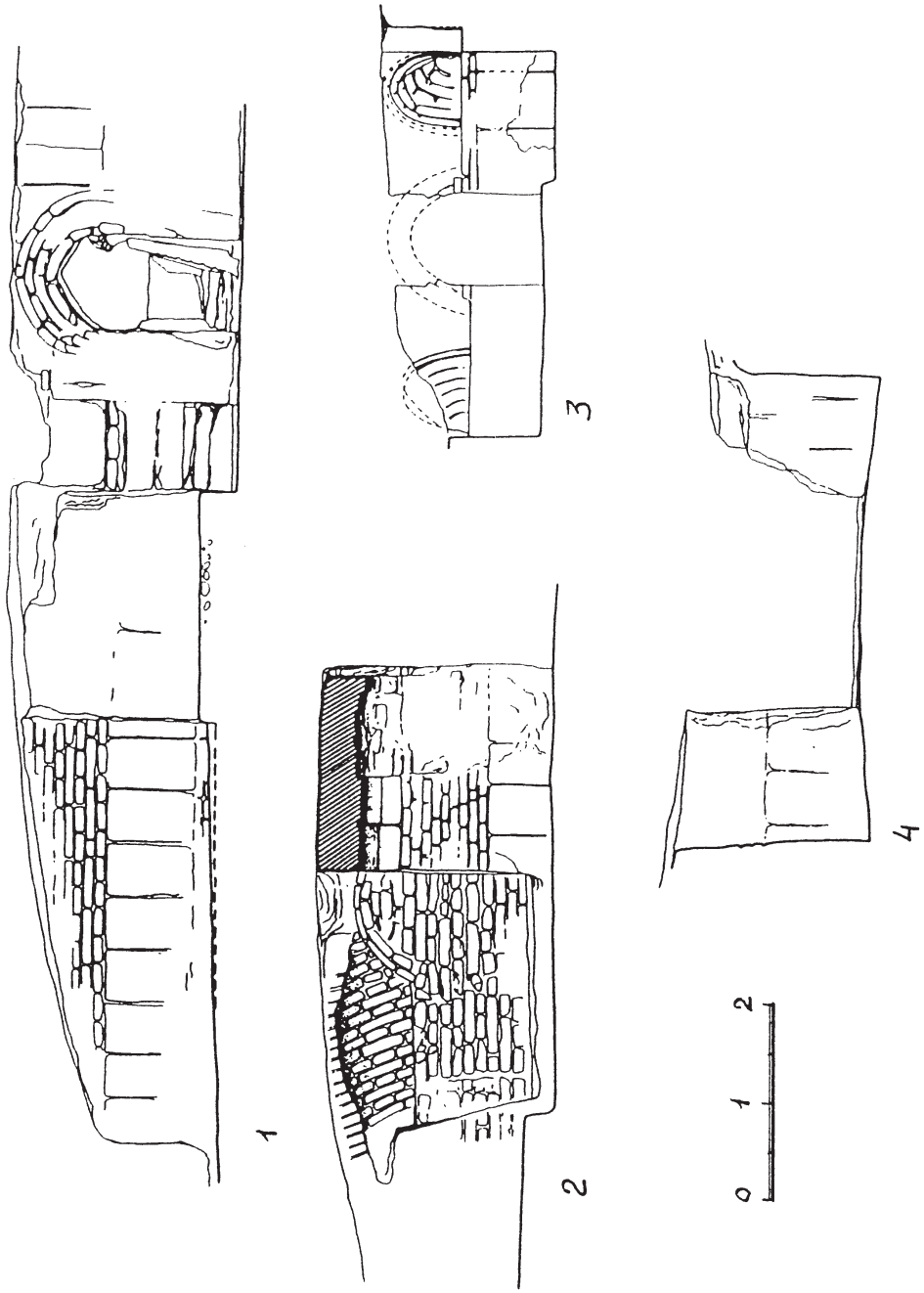


図64
寺院の出入口：1. 寺院の正門の南［側の］壁　2. ヴォールト天井の通路IV，アーチ型の出入口の断面図
3. 部屋IIIの西壁（第２層の床面レベル）　4. 寺院の出入口（東より）

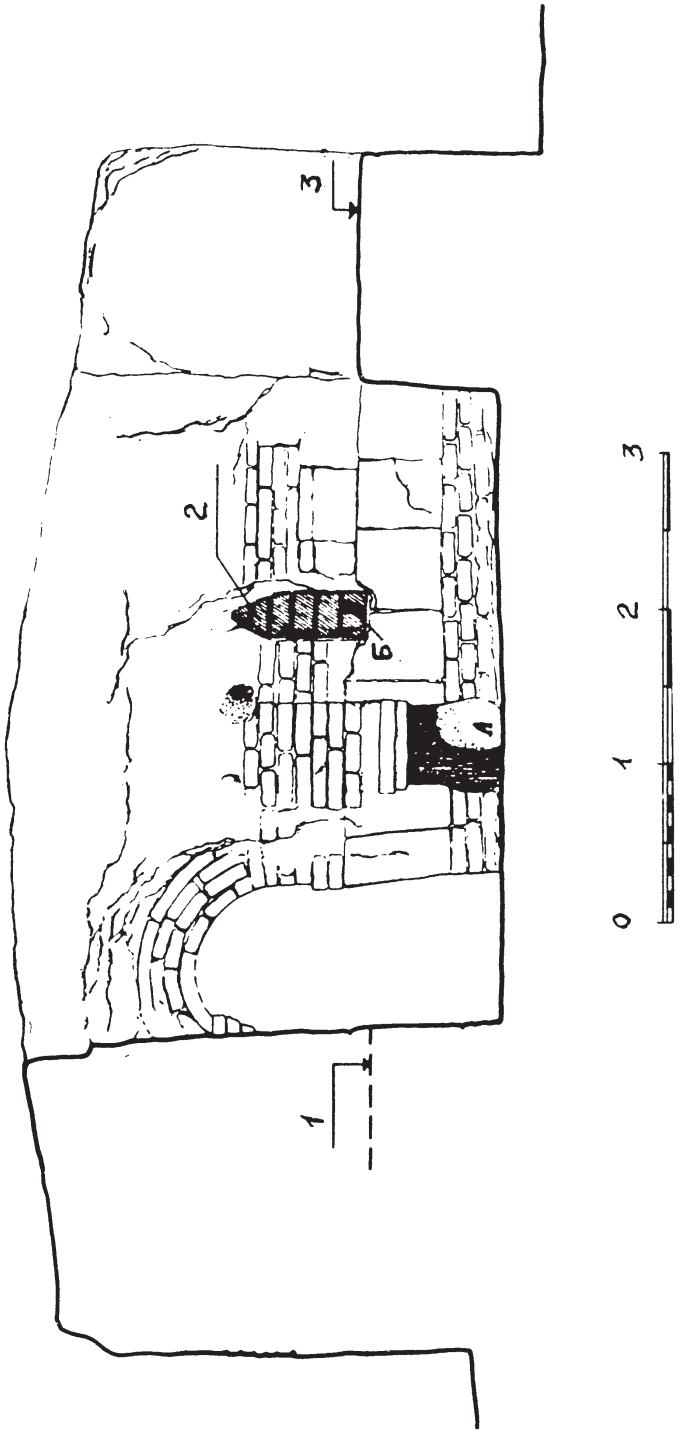


図65
部屋Ⅴの東壁．A. 第１層の炉［壁暖炉］ Б. 第２層の炉（焼成レンガ造り）
1. 第２層の床面のレベル 2. 焼成レンガ 3. 第２層の出入口の床

3-1-4. 部屋 V

部屋 V はあまり大きくなく、平面プランは長方形で、屋根の痕跡が残っていないことから、天井は平らであったのかもしれない。残存しているランパート・アーチの出入口で通路［部屋］IV に通じていた（図 56；64, 2；65）。部屋 V の東壁には炉があったが、後になって、その上部にはレンガが詰められた（図 65, A）。炉にも関わらず、ベンチがそのなかにないことから、居住用の部屋という印象はない。出土した遺物（仏陀のテラコッタ［素焼き製品］の製作に使われた石灰製の型の破片（図 90, 1）、土製の取鍋[訳註35)]の破片など）によれば、この部屋は、おもに仏教の像などのさまざまな儀礼用の製品を作るための工房であったと判断できる。

さて、出入り口のホールであるが、それはほぼ正方形であり、大きさは約 5 × 5m で、それぞれの壁の中央には 4 つの出入口が位置していた。上述したように、そのなかの 2 つ［の出入口］は、出入り口ホールの両側に位置する出入り口付近の部屋に通じている。出入り口ホールの北東隅では小さなベンチ、もしくは基壇が見つかったが、上部の残りは良くなかった。出入り口ホールの北西隅にも同じようなベンチがあった。東南隅には、部屋 III のドーム［屋根］に登れる 3 段の階段があり、おそらく、寺院の扉を叩く訪問者を見るために使われたものであろう（図 56, 11；63）。

3-2. 中庭

出入り口ホールから西への通路は、広くて、屋根がない四角形の中庭に通じていた。中庭の長さは 32m、幅は 18m であり、すなわち面積は 576 平方メートルであった（図 56）。この中庭では、壁はもっとも初期の［古い］床のレベルから高さ 3m まで達しており、おそらく、中庭の側面には木製の柱で支えられていたアイワン［イーワーン］のひさし[訳註36)]があり、それの丸い穴の痕跡がところどころに残っている[35)]（図 56, 14）。ひさしの下には、壁に沿ってベンチがあったようである。このような（なかに土が詰められた日干しレンガ造りの）ベンチの一部が中庭の北西隅に残っている。中庭の北東隅では、深い、

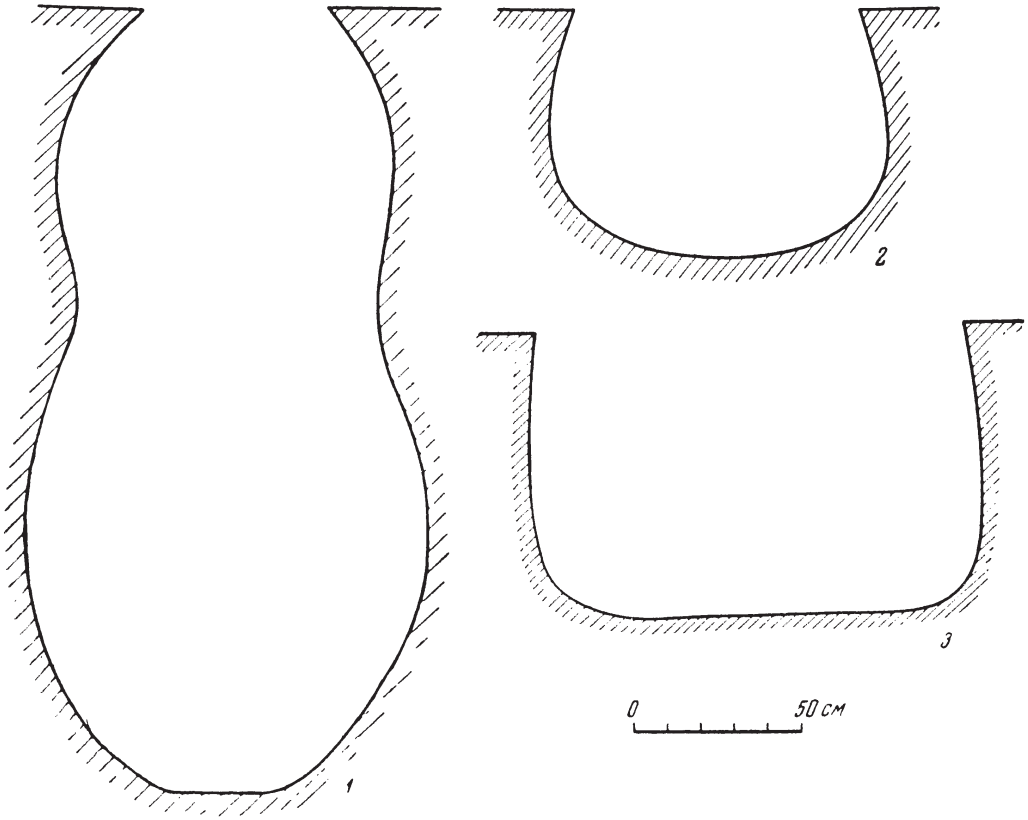


図66
遊牧民によって回廊の北側部分の床に掘られた立坑の断面図（2, 3）：
1. 排水・汚水用（トイレ用）の穴　2-3. 日常生活用の穴

洋ナシ形をした縦坑、つまり古代の排水・汚水用［トイレ用］の穴[訳註37]が見つかった（図 66, 1）[36]。中庭の出入口に近い南壁のなかでは、排水口の設備が見つかった。［これは］徐々にすぼまる穴の形をしていて、その先は寺院の壁を抜けて伸びる焼き物製の管に繋がっていた。

中庭では信徒が休息し、またここでは、おそらくこの寺院に属する仏教教徒の共同体のコミュニティの商取引や裁判も行われたのであろう。このことは、中庭の古代の［かつての］床で発見された象の図像（つまり、仏陀の化身）とソグド語の銘[37]をともなう文書用の吊り下げ型の 4 つの土製の印章［封泥］[38]、青銅製の秤の皿（図 81, 2）や立方体の鉄製分銅、ソグド語で記された銘を持つテュルゲシュ式コインなどによって裏付けられる。

中庭の西側部分では、床は小さなスロープ状になっており、そのまま礼拝用の建物の出入口に通じる日干しレンガ造りの階段へと続いていた。この階段の残りは良くなかったが、かつては 3 段で、それぞれ［の段］には積み重ねた 2 列のレンガが敷かれていた（図 56；67）。

3-3. 広間

西から中庭を囲む横方向の壁の中央には、幅 2.4m の出入口があり、かつては寺院の巨大な広間に通じていた（図 67）。この広間で礼拝の主たる儀式が行われた。広間の大きさは、18 × 10m であり、寺院の南北方向の長軸に沿って伸びている。厚さ 2m の広間の壁は高さ約 1m まで残っている[39]。かつて、広間には、柱に支えられていた木製の梁の上に置かれていた、葦で造られた平らな屋根があった。

これは、火事で炭化し、床全面に広がっている葦

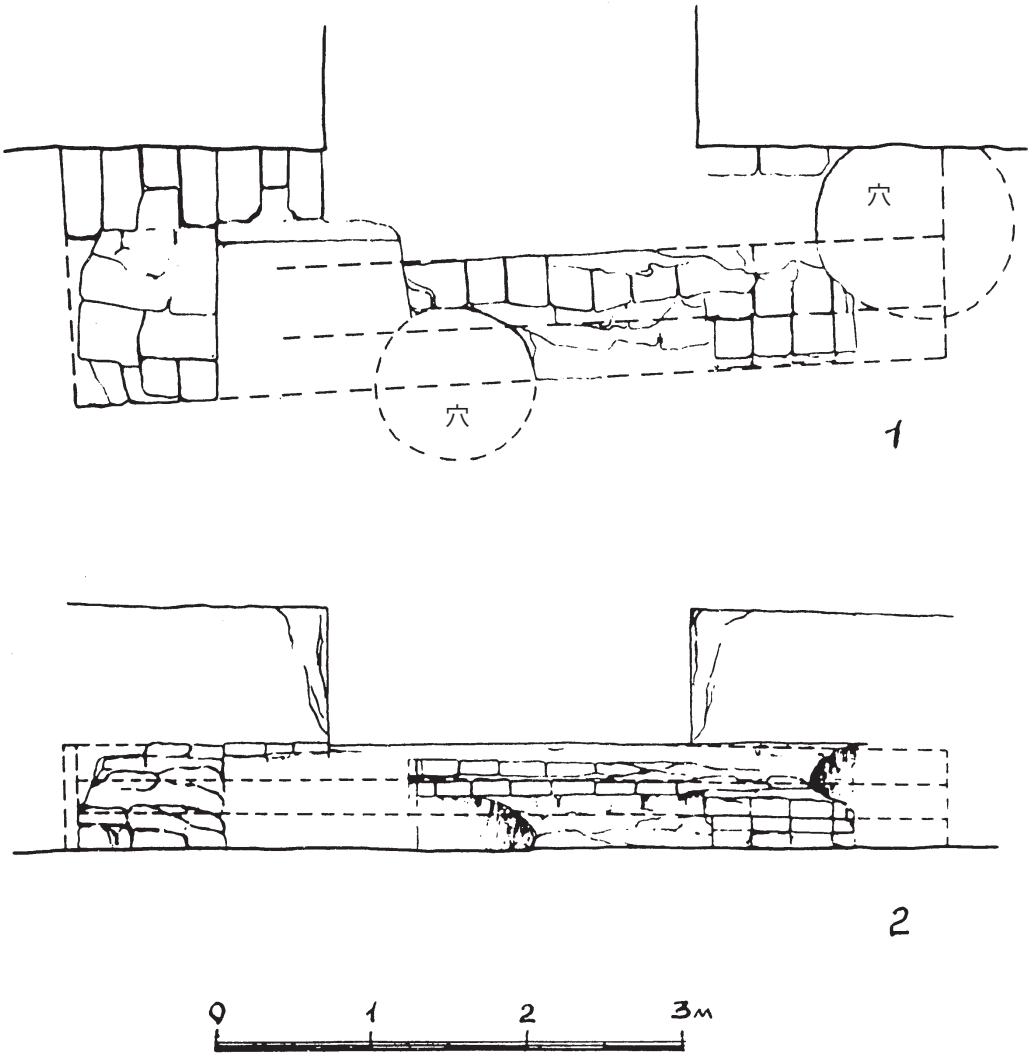


図67
中庭から寺院の広間に通じる日干しレンガ造りの階段の痕跡：1. 平面図　2. 正面図

図68
広間の壁龕出土の塑像の破片：1. 龍の顔（正面） 2. 龍 3. 貼付けレリーフの蓮弁文様
4. 型押しの装飾の痕跡をともなう塑像用に加工されたレンガ 5-6. 蓮弁文様 7, 11. 塑像の耳
8. 小型の塑像の脚 9, 10. 飾り板

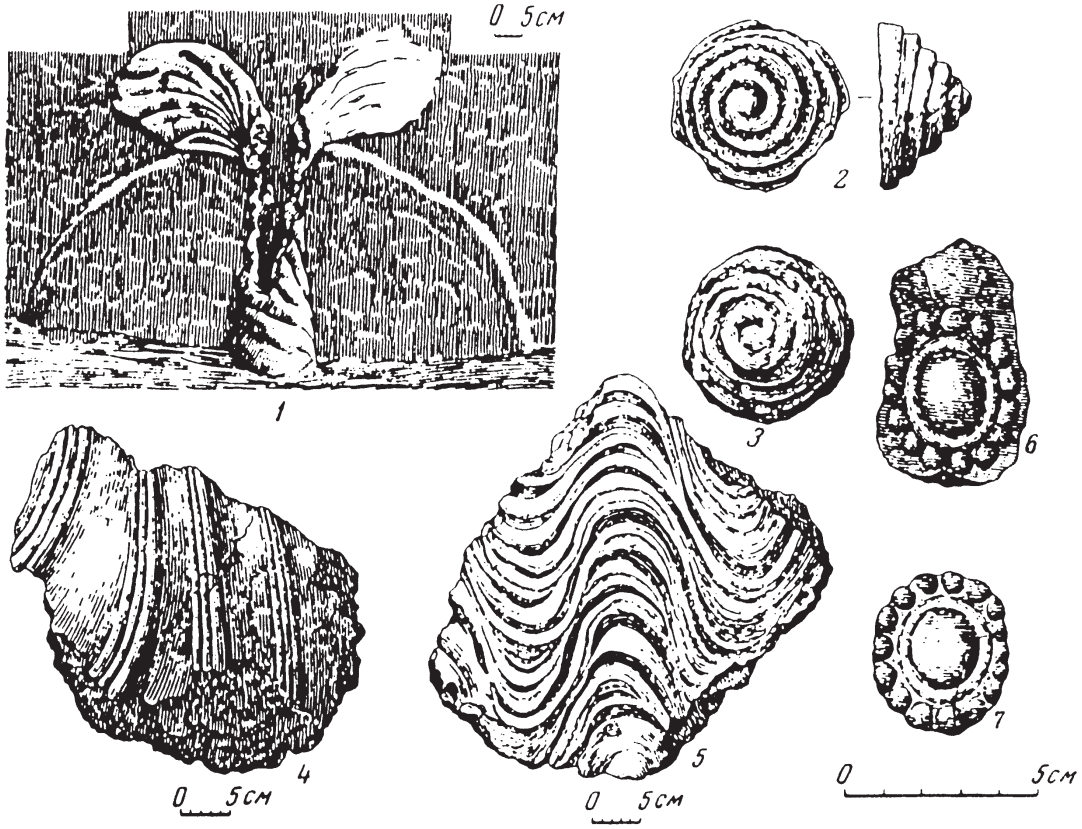


図69
塑像の破片：1. 広間の北壁の撚りがかけられた幹を持つ「ヤシの木」 2–3. 仏陀の土製螺髪
4–5. 弥勒菩薩像の衣と髪の破片　6–7. 弥勒菩薩像の脚のメダイヨン型土製飾り板

と梁の破片によって証明される。堅くしまった土造りの床をクリーニングした際に、8本の柱の基礎が見つかったが、厳密なプランにしたがって、対称的に間隔をおいて2列に並んでいた（図56, 6）。床面にある1×1m、深さ10cmの正方形のくぼみが柱の痕跡である[40]。これらの正方形のくぼみに木製の基部が固定されており、2か所では厚さ10cmの半分腐った木材が残っていた[41]。堆積のなかに残った空洞のおかげで、柱の基部［柱礎］は高さ40cmに達する角錐台の形をしていたことが確認できた。この木製の角錐台に、柱本体となる丸太が垂直に差し込まれていた。おそらく、もともとの木製の柱は、いわゆる土の「殻」で覆われており［土が塗られ］、ストゥッコ装飾で飾られ、青い彩色、そして部分的には金色の彩色が施されていた。このようなストゥッコ装飾の破片は、すべての柱の基部の付近でのみ見つかり、ほかの場所では発見されなかった（図80, 1, 3）。

広間の北壁には、幅1.20m、奥行き80cmの小さな壁龕があった。この壁龕のなかでは、数多くのストゥッコ装飾や［塑］像の破片（蓮弁[訳註38]、飾り板、螺髪[訳註39]、耳など、図68）、輪郭を丸めて明らかに塑像用に仕上げた日干しレンガ（図68, 4）、内部に草が混じった粘土製の筒が見つかった。ここで発見されたなかでもっとも重要な遺物は、非常に巧妙に細工された土製の龍の破片であった（図68, 1, 2）。これらのすべての破片は壁龕のなかで乱雑に積み重なっていたが、かつてここで破壊された1つの像を構成していたものの残りを示している可能性がある。

当初は、中央広間には厳粛な、儀礼用の装飾が施されていた。その壁全体には、漆喰の上に薄い石灰の下地層が塗られ、壁画が描かれていた。一部ではあるが、どうやらおもに柱と柱の間の天井[42]、そして中央の4本の柱の間にあった天窓[43]の周りでは、［表面が］滑らかに仕上げられた土の漆喰［の上］に壁画が描かれていた。

壁画に加えて、壁は土製のストゥッコ細工の貼付レリーフで装飾されていた。たとえば、装飾的な「ヤ

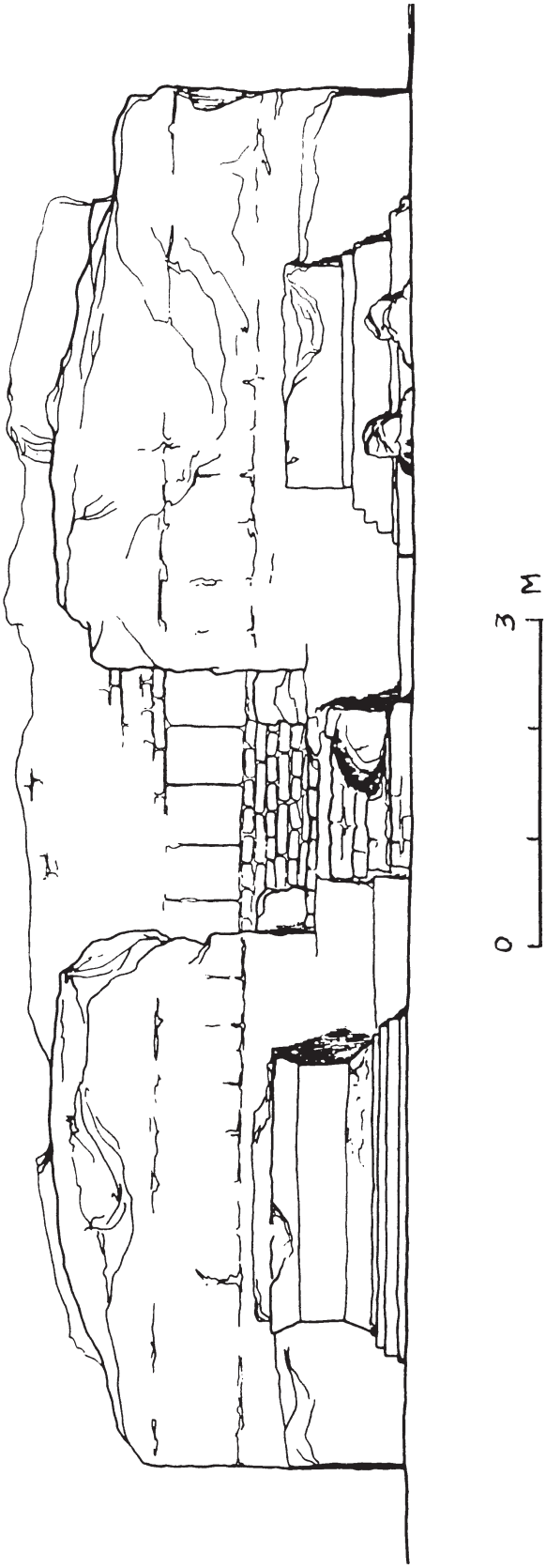


図70
寺院の広間の西壁。南側と北側の塑像の台座.
後者［北側の台座］の傍らにはある弥勒菩薩像の足の破片.

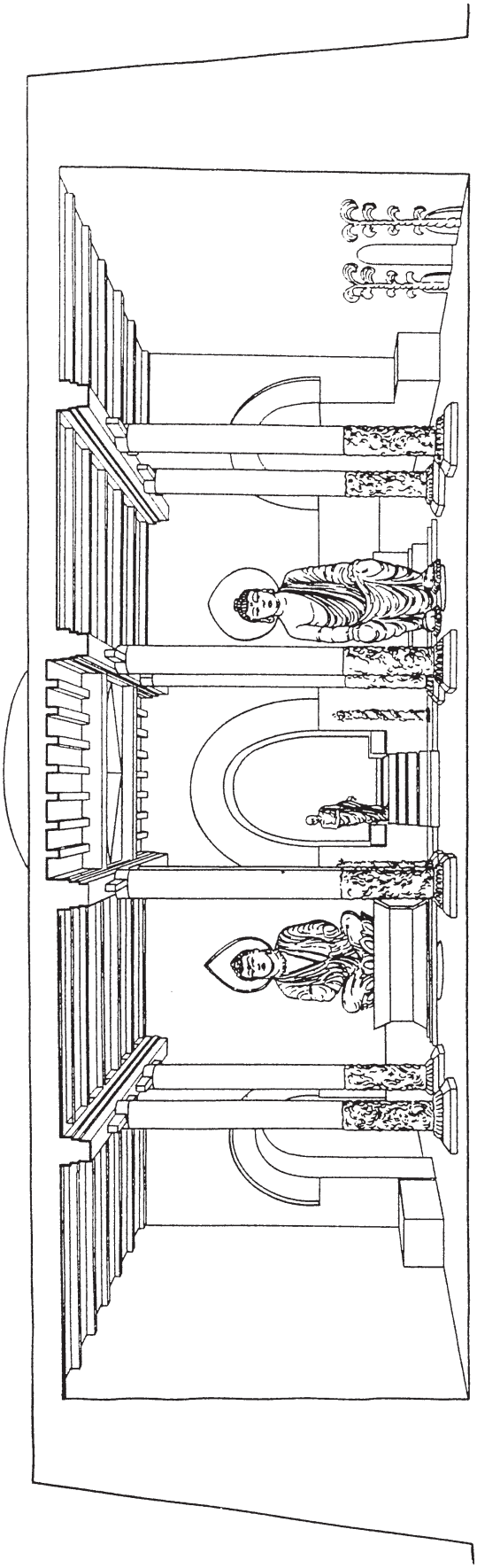


図71
仏教寺院の広間全体の復元図.
フメルニツキーによる作図.

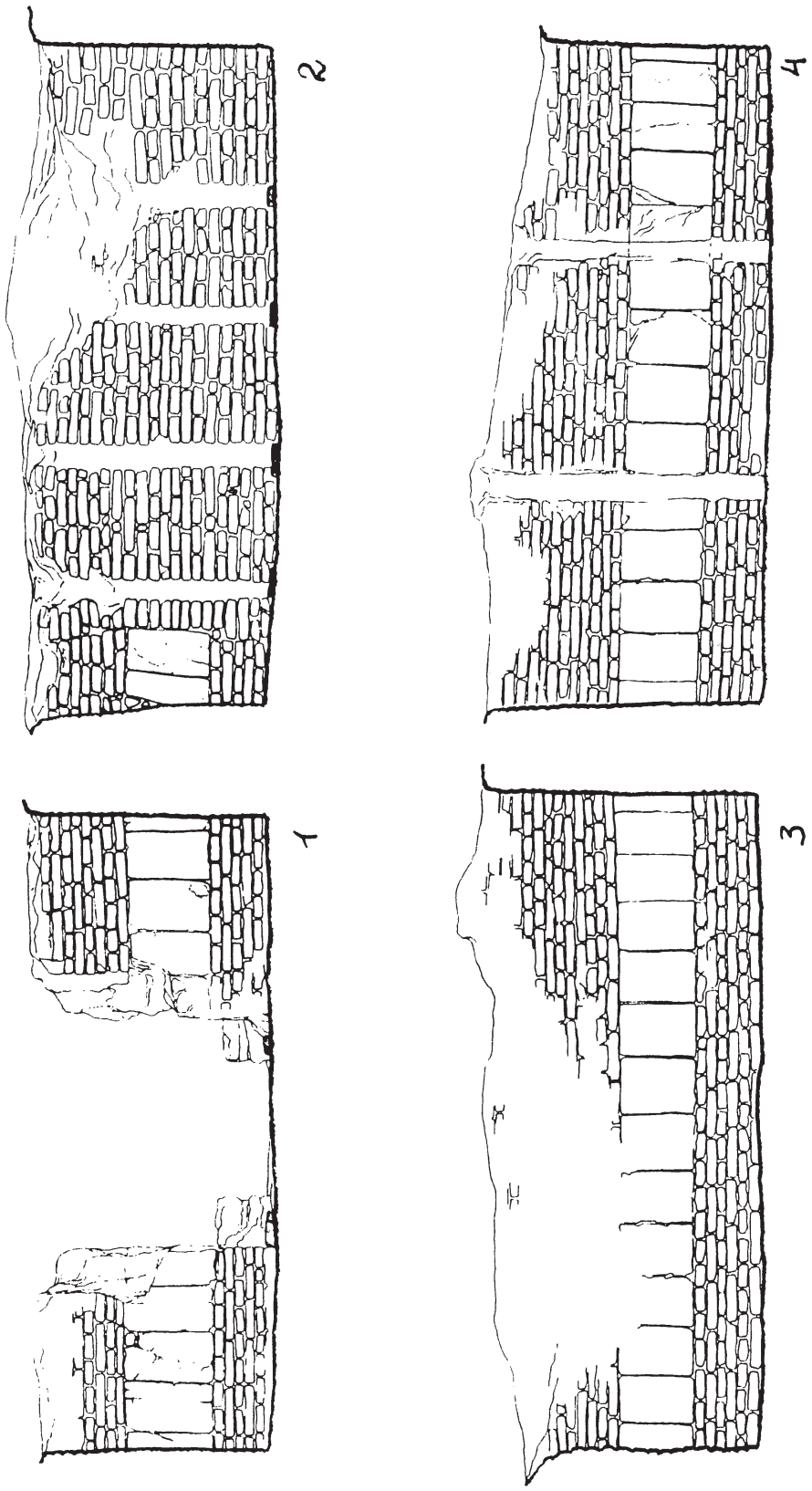


図72
寺院の祠堂の内壁：1. 東壁　2. 南壁　3. 西壁　4. 北壁

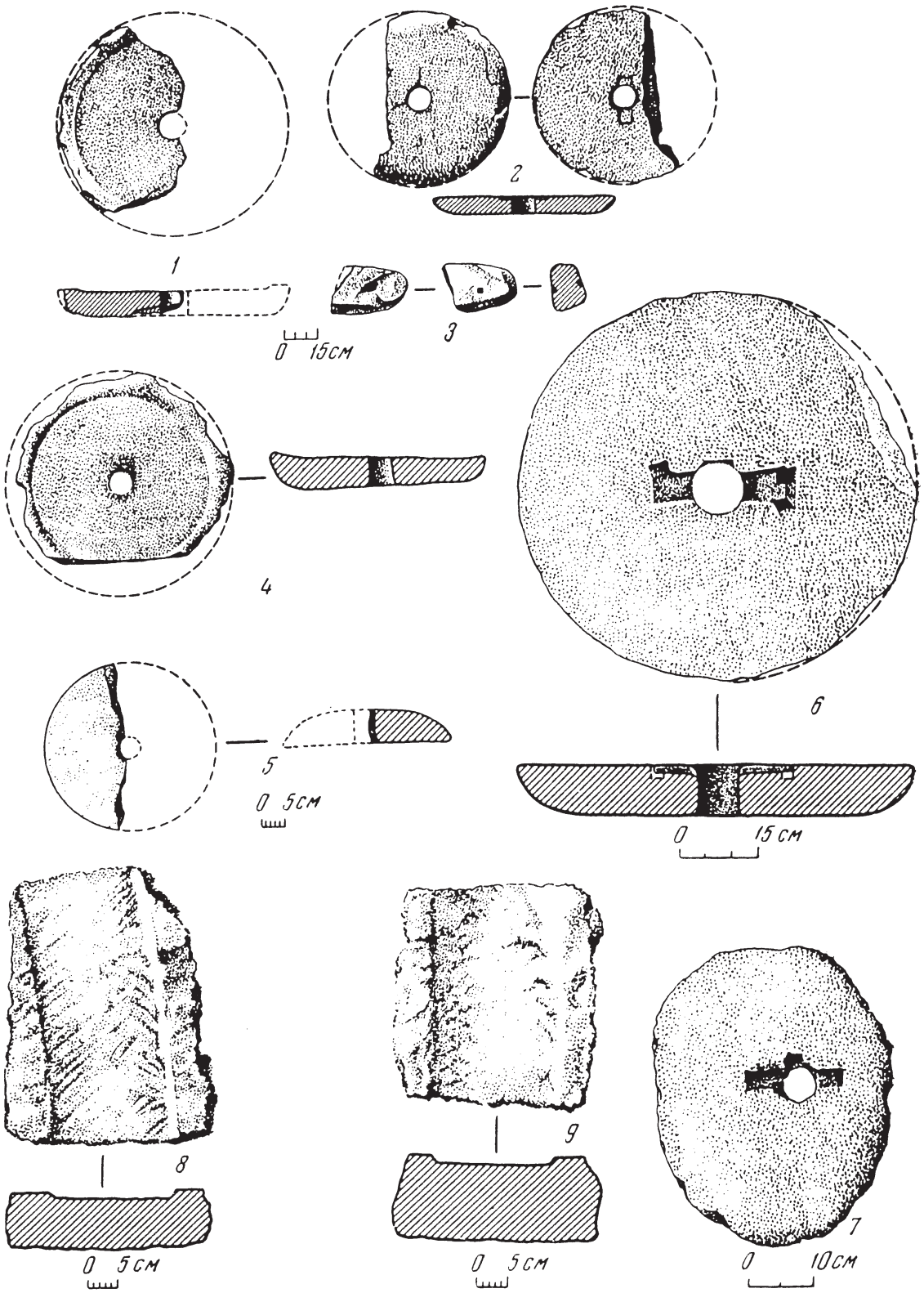


図73
寺院の中庭出土の石製品：1, 2, 4-7. 石臼の上臼と下臼の破片　3. 突き固め道具［砥石］の未完成品
8, 9. 花崗岩製の樋．1-3, 6-9 は第 1 層出土（8 世紀），4, 5 は第 2 層出土（9～10世紀）.

シの木」の下部が残っているが、おそらくは仏教徒の聖なる菩提樹であろう。仏教徒によれば、世界の終わりに消えるまで生きながらえ、世界の創造の時に最初に現れる木である。[44] これは、撚りがかけられた土製の幹が貼付けられたものであり、別々の方向に伸びる2枚の幅の広い葉が付いている。残念ながら、この部分の壁はひどく壊されていたため、幹の上部は残っていない（図69, 1）。

それに加えて、広間は、高い台座に座る4体の仏陀の塑像[訳註40]で飾られていた。それらの断片しか残っていない。それら［仏像］は広間の出入口の反対側、西壁沿いに置かれていた（図70）。この壁には3つの扉があった。階段が付いている出入口の中央の扉は、祠堂に通じており、外側の2つの扉は祠堂を囲む回廊に通じていた。西壁のこれらの扉の間の2か所の空間では、いくつかの段で飾られた残りの良い高い台座（1.44mと1.12m）が発見された[45]（図56, 1; 70）。

かつて、北側の台座には、腰を掛け、足を正面に下ろした、高さ約4mの巨大な塑像造りの弥勒仏[訳註41]の像［弥勒菩薩倚像］があった。[46] 胴部と髪の毛、蓮の花のような2つの低い台座［蓮華座］に立っていた脚の膝から下［の部分］が残っていた（図70）。[47] 足は長さ80cm、幅40cmであった。[48] 脚の上面は石灰の薄い層で覆われ、彩色され（塑像全体も同様）、足元とくるぶしの周りには貼付けの土製の浮き出し文様のリボンがあり、その上に「真珠文様［連珠文］」で縁取られた楕円形の飾り板が［リボンの上に］隣り合わせに貼り付けられていた（図69, 7, 8; 70）。塑像の足元の前には、土造りの円形の奉献台があり、床面よりわずかに高くなっており、石灰のプラスターが塗られていた。[49] 直径は0.85mである（図56, 2）。円形の中央には炭が詰まった小さなくぼみがあった－つまり祭壇［奉献台］の痕跡である。おそらく、私たちが発見したスイヤブの寺院［第1仏教寺院］にもともと祀られていたのは弥勒仏であった。

南側の台座は北側の台座と異なる建築デザインであった。同じように、その前面の真ん中には、床面より2～3cm高い、直径1.16mの円形の奉献台があった。円形の奉献台が［仏像の］台座のすぐ近くに置かれているという事実から判断すれば、後者［仏像の台座］には、足を組んだ坐仏像が置かれていた[50]（図70）。床に落とされたこの塑像の胴部の破片、そして仏陀の髪の毛を表す青色で彩色された土造りの貼付けの螺髪で覆われた頭部の破片が残っていた（図69, 2, 3）。おそらく、広間の南壁の前の床に発見されたトルコ石が象嵌された鋳造された鍍金の青銅製飾り板（図87, 2）、あるいは寺院の別の場所で発見された数多くの飾り板（図82, 84, 85）に描かれた仏陀の像がこの台座の上に置かれていた。

残念なことに不完全ではあるが、スイヤブの仏教寺院の広間の全体像の復元図を提示しておく（図71）。

別の2つの台座状のベンチが広間の南西と北西の隅、回廊への両方の出入口の近くに位置している[51]（図56, 3）。その上ではなにも見つからなかったが、疑いもなく、かつてはそこにも塑像が置かれていた。南西側の台座の大きさは3.46 × 0.87 × 0.55m、北西側の台座の大きさは1.84 × 1.1 × 0.87mである。ほかの装飾的な要素としては、祠堂へと通じる［広間の］西壁沿いの階段の左右には木製の細い柱があった。［柱の］穴には、木材の痕跡が残っていた（図56）。祠堂への扉の戸口の両側には、同じように対となる木製の柱が立っていた。

3-4. 祠堂

祠堂に通じる階段は、寺院に用いられている通常の大きさの長いレンガで造られ、5段の階段と上部の踊り場からなる。構造物の全体の長さは1.85m、幅は1.5mである。祠堂の扉の戸口の幅は2.4mである（図72, 1）。出入口の両側には低い「ベンチ」[52]があり、その東端には上述の柱が立っており、西端にはかつて扉があった。［扉のものとしては］古い壊れた石臼で作られた灰色花崗岩のスラスト軸受[53]のみが残っていた（図73, 1, 2）。壁には、扉を吊り下げるためのくぼみも残っていた。

この祠堂そのものは正方形（6.33 × 6.38m）で、面積は約40平方メートルであった（図56）。この部屋の中央には、東西に伸びる長方形のくぼみ（4.58 × 3.43 × 1m）があり、その側面には日干しレンガが並べられていた。おそらく、このくぼみの奥、東側［西側の誤植か］の壁には主たる仏像が（東トルキスタンのいくつかの寺院の祠堂の像と同じように）立っていたが、土造り［塑像］ではなく、青銅製であった。しかし、その仏像が強盗によって寺院から運び出される際に剥がれた落ちた青銅の断片数個しか残ってなかった（図88）。この破片のほかに

も、あご髭もしくは口髭の巻毛を表す飾り板があるが、[54] とりわけ興味深いことに、これは東トルキスタンにある寺院の塑像の同じくあご髭の巻毛の形と類似している。[55]

祠堂では、12 個の青銅製の透かし彫りの仏教の飾り板が並んで発見された（図 82 ～ 83）。[56] 床の長方形のくぼみの用途はいまだに不明である。ゾロアスター教の礼拝における先祖返り[訳註42]（たとえば、ジャンバス・カラ Джанбас-калы 遺跡の「火の家［拝火神殿］」[57] およびシャープール［ビーシャープール］で発見されたサーサーン朝の神殿[58]のくぼみを参照）を扱ったものなのか、もしくは魚が泳ぐ池をイメージしたセンギム・アギズ Сенгим-агызе 第 1 寺院の祠堂の床面のフレスコ画[59]のように、仏陀が蓮の花の上に立つ聖なる池を示しているのかもしれない。

祠堂の屋根構造に関する問題については、いくつかの理由（正方形の平面プラン、2m 以上の壁の厚さ、部屋は上から落ちて密集したレンガ堆積で埋もれていること、そして崩落したレンガの断面が扇形をしていることなど）から、もともとはドーム屋根であったと推定できる。広い部屋を覆う同じようなドームは、後世の 18 ～ 19 世紀におけるカザフスタンの聖者廟[訳註43]で知られており、日干しレンガで構築されるドームは一体型の強固な構造である。

この部屋のそのほかの構造上の要素としては、2 つの壁のなかに差し込まれている木製の支柱が特記される。［これらの木柱は］その下に置かれた、同じく古い石臼の破片である厚い花崗岩の基礎に載っている[60]（図 72, 2, 4；73, 4, 5）。専用の溝に固定された長い丸太の支柱は、壁全体を覆うプラスターによって隠されていた。このような、明らかに一定の荷重を受ける支柱は、祠堂の相対する 2 つの壁［北壁と南壁］でのみ用いられたが、その数は等しくなかった。南壁では 4 本あるが、北壁では 2 本しかなかった（図 72, 2, 4）。おそらく、これらの支柱が天井の梁が支えていたようで、その［梁の］痕跡も見つかっている。ドーム屋根構造の下に［もう 1 つの？］天井が存在することは、同時代の新疆の寺院で確認されており、日干しレンガまたは練り土の壁に木製の支柱を設置するという方法は、古代中国の仏教寺院の建築の特徴である。[61]

3-5. 回廊

正方形の祠堂の三方を回廊が囲んでおり、その壁は床面のレベルから高さ 3.5m まで残っていた（図 74 ～ 76）。2 つの出入口で中央広間と繋がっていた。回廊への出入口（幅 1.7 と 1.75m）および祠堂への出入口はもともとアーチ型であり、その下部が残っている。[62] そして回廊そのものは、出入口のアーチ型の天井から奥へとそのまま繋がっていたヴォールトで覆われていた。回廊の幅は約 3.3m で、全長 41.37m（北部分は 11.9m、西部分は 17.35m、南部分は 12.12m）であった。回廊の全体に沿って、つまり祠堂の壁に沿って日干しレンガで構築された長いベンチがあった[63]（図 56, 4）。回廊の南部分と北部分の［ベンチの］幅は 82cm に達していた。この部分では、ベンチは比較的低く、上部の残りはとても悪い。［回廊の］西側通路でのみ、ベンチは高さ 1.18m に達し、異なった建築上の設計となっており、巨大な基壇をなしている（図 75, 1）。[訳註44] かつて回廊全体に渡って、ベンチの上には、いくつかの［単独の］塑像や一群の塑像が置かれていた。その数多くの破片が回廊の床上の堆積のなかで見つかっており、回廊の北翼部の南東隅には、なんらかの像の台座が残っていた[64]（図 74, 1）。壁面と天井は壁画で覆われていた。[65]

回廊の壁際のベンチにも支柱と木製の柱があった（図 56）。[訳註45] 祠堂の壁の支柱とまったく同じように、北側の回廊の外壁の内側［北側回廊の北側の壁］には 2 本の支柱しかなかった（図 74, 2）。回廊の北西隅には小さな基壇があり、［その上にも］像が置かれていた。

回廊の北翼部では、ベンチの前面の床の上に、わずかに高くなった石灰の［プラスターが塗られた］円形の奉献台形台があるが、［これは］広間の仏陀像の前で見つかった円形［の奉献台］と類似している。

3-6. 建築に関する追加的な所見

この建物は、寺院として約50～60年間存在していた。当然のことながら、上述した当初のプランと比較すると、この間には何らかの変化があった。これらの変化は大きくないが、建物の歴史との関連という点からは指摘しておくべきものである。第 1 に、礼拝用の建物（広間、祠堂と回廊）については、練り土の床の磨耗にともなって部分的にプラスターが塗られたといったことなどを除けば、ほとんど変化がなかったことが挙げられる。良く管理され、人も

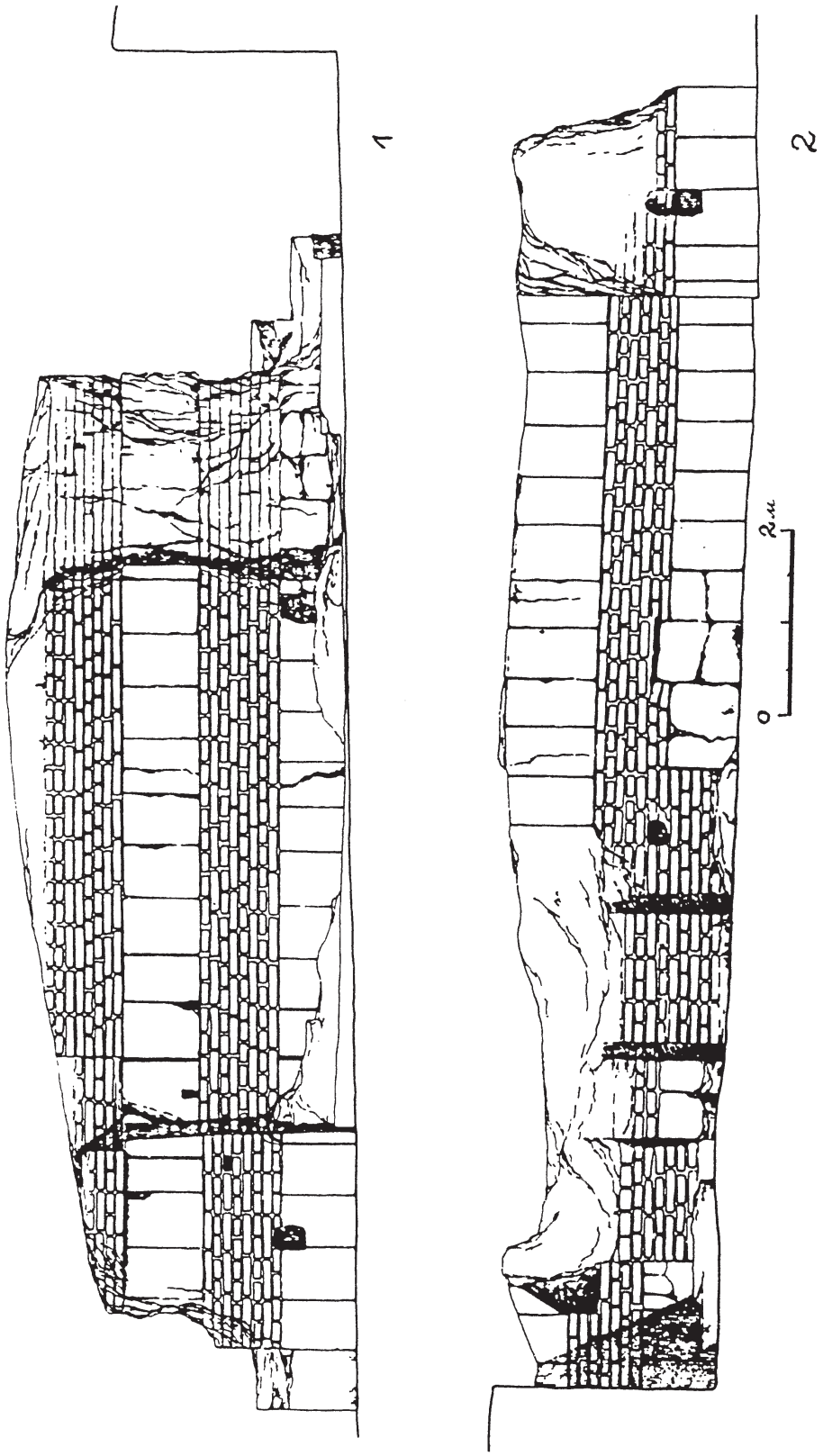


図74
寺院［祠堂］の回廊の北翼部の南側の外壁（1）と北側の外壁（2）

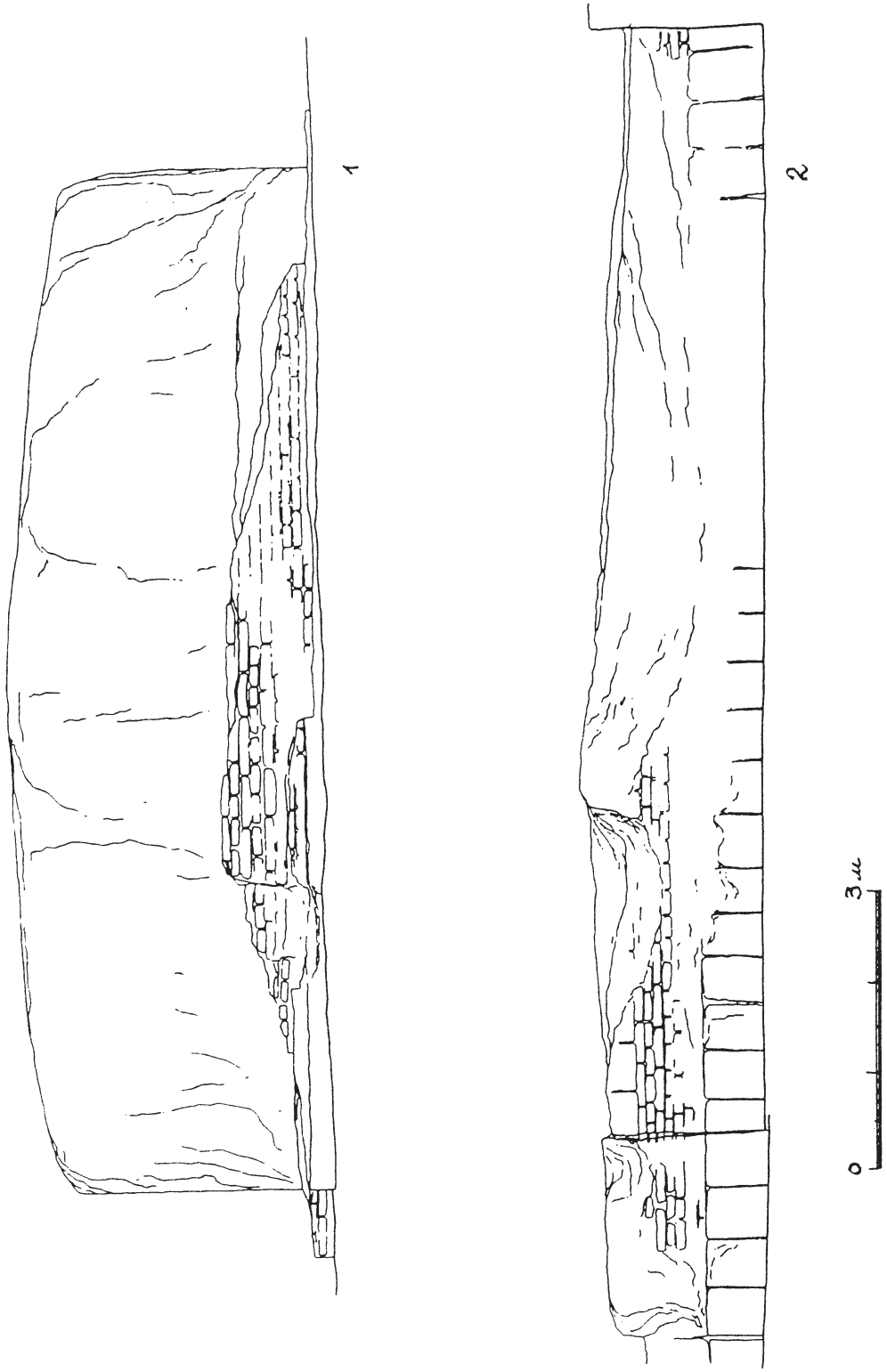


図75
寺院［祠堂］の回廊の西翼部の東側の外壁（1）と南翼部の南側の外壁（2）

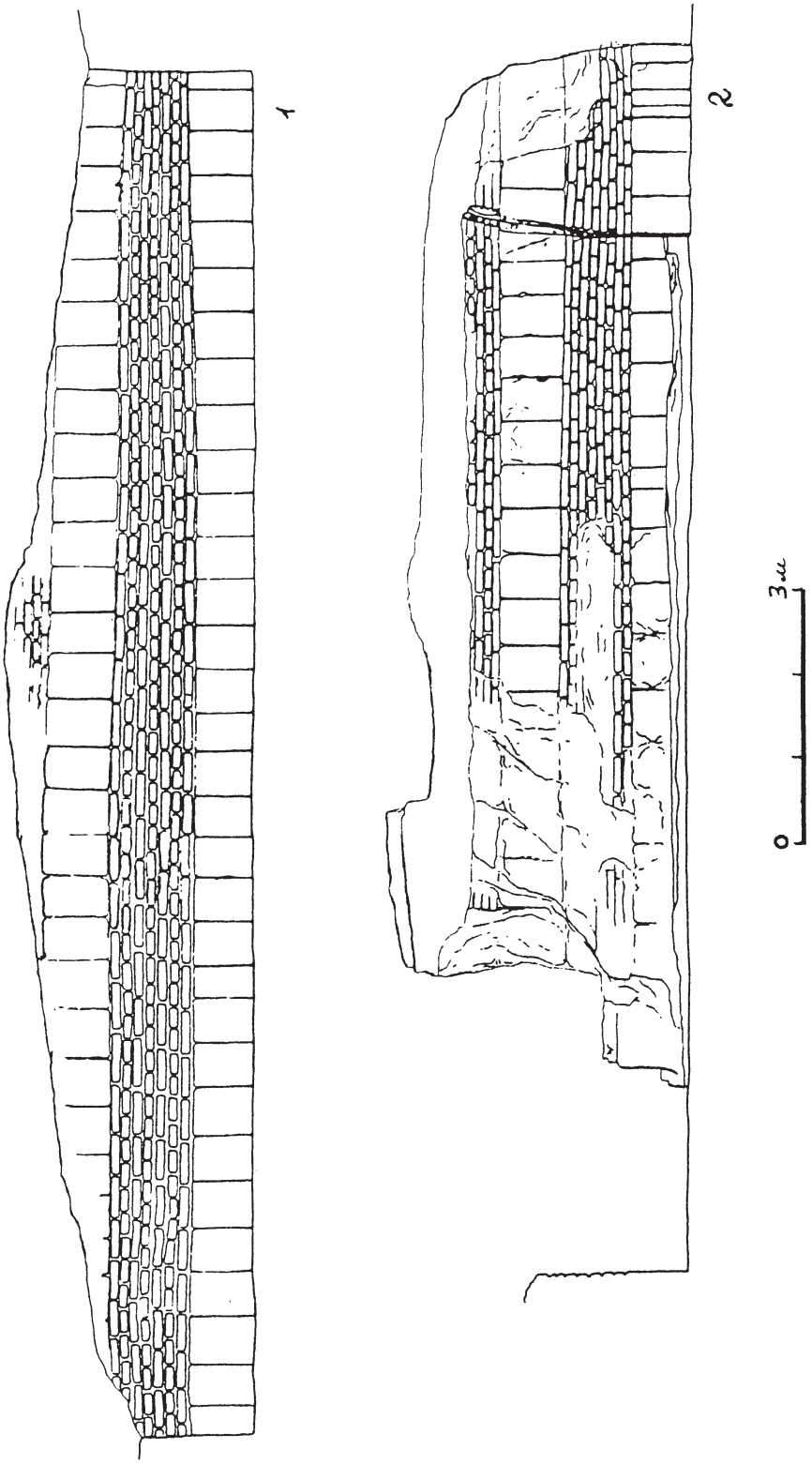


図76
寺院［祠堂］の回廊の西翼部の西側の外壁（1）と南翼部の北側の外壁（2）

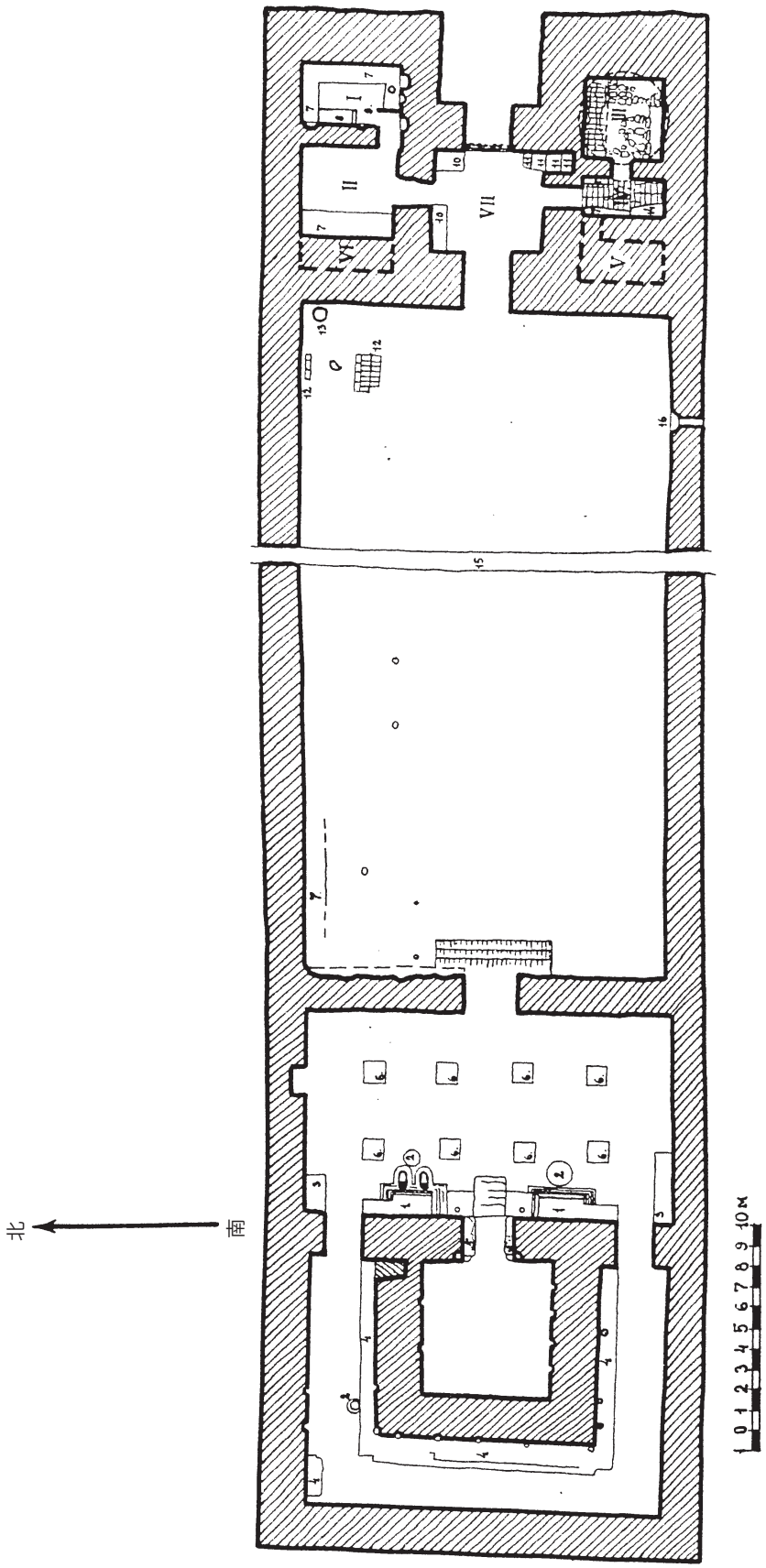


図77
第II期の仏教寺院（第1号遺構）の平面図
1. 大きな仏像の台座　2. 塑像の前面の石灰製円形奉献台　3. 広間の仏像設置用のベンチ　4. 回廊のベンチ
5. 扉用のスラスト軸受をともなう祠堂の出入口の階段　6. 広間の柱の基礎の痕跡　7. 居住部屋のベンチ　8. ヘッドボード付きの寝台
9. 炉［かまど］用の間仕切り壁　10.「出入口ホール」のベンチ　11. 改築された階段　12. 中庭の日干しレンガによる舗装
13. 排水・汚水用（トイレ用）の穴　14. 控え壁　15. 水路　16. 排水口　I-VII. 出入口付近の部屋

居住していなかったおかげで[新たな]堆積はなかった。

中庭と出入口付近の部屋では状況が異なる。屋根がなかった中庭には、おそらく［仏教徒の］共同体の何らかの商業センターがあったことから、たくさんの人が訪れ、とても長い時間を過ごしていたため、時の経過とともに15～20cmの層が堆積した。さらに、同時に、共同体のメンバーと僧侶たちにとって、中庭には新鮮な流水がつねに必要になったため、庭を横切るように幅約90cm、深さ20～30cmの水路が引かれ、その［水路の］側面は上層の表面［中庭の床面］の高さに一致していた（図77, 15）。私たちが行った水路の基底面の測量では、水路の基底面は中庭の南壁から1mごとに1cmずつ低くなっていたことを示しており、すなわち、水は南から北へ、そしてかなりゆっくりと流れていた。[訳註46)]

寺院の南側の耕地から流れてきた水路は、専用にあけられた水路[66)]を抜けて中庭の南壁の下を通り、中庭を横切って、北壁の下に位置する別の水路（図77, 15）を抜け、さらにツィタデルの自然の傾斜に沿って北に向けて下っていた。発掘によって、侵食を防ぐために、中庭の南壁のなかの水路用の取水口の側面（両面）は、大きな丸石と上述したものと同じ巨大な石臼を半分に割ったもの7個（図73，6，7）を2段に積み重ねて、徹底的に補強されていたことが明らかとなった。壁の日干しレンガの塊を支えるために、木製の梁が水路を横切るように石臼の上に置かれた。水路には細かく、きれいに水で水簸された砂が詰まっていたので、水路の流路については、上部のレス土の堆積と層を除去することで十分にその痕跡を追うことができた。北壁の水路については、上部の組積壁が大きく沈下したために塞がれていた。明らかに、北壁付近では、しばしば水路がその側面を洗い流し、壁に沿って東側へ溢れ、徐々に中庭の壁そのものを破壊した。

この地点では、中庭の表面にかなり深い侵食の痕跡があり、都市の近くに［川が］ないために遠く（3～4km）から運ばれた川原の小石でその窪みが埋められていることが分かった。

壁の下部が侵食されたことにより、側面のレンガの組積も部分的に崩れたので、中庭の北東隅の壁は補修されている。つまり［壁が］崩れた部分には、通常の大きさの日干しレンガ（48 × 24 × 9cm）を充填し、甲殻のように、残った壁の本体部分を覆っていた。[67)] 水路の東側の中庭で見つかった石臼の破片と大きな丸石による舗装、そして同じく中庭の北東隅における日干しレンガによる部分的な舗装は同じ時期のものである。

ここで記しておくべきだが、中庭の床面の窪みに敷かれた石のなかからは、用途は不明であるが、巧みに作られた2つの花崗岩製の樋（図73, 8, 9）、そして練り土の壁を造る際に土を突き固めるための石製の道具の半製品[訳註47)]（図73, 3）が発見された。両側から開け始めた把手用の孔は、きちんと計算しなければできなかったので、［そのまま］捨てられた。[訳註48)]

中庭の壁には補修やプラスターの塗り直しの痕跡が非常に多かったが、壁本体はつねにそのまま残っていたことに留意すべきである。中庭の壁はほかの部屋の壁と異なり、頑丈な屋根が載せられなかったことを考慮すれば、驚くにはあたらない。

同じ時期には、出入り口ホールの両側にあった6つの部屋のうちに4つだけが残された（部屋I～IV）。おそらく、部屋Vの東壁がきちんと構築されておらず、崩れ始めたため、部屋Vおよび通路IVから通じるアーチ型の出入口が塞がれた（図77；64, 2；65）。発掘によれば、壁を甲殻状に1個のレンガを積んで補強しようとしたことが明らかになったが、それが役に立たなかったため、狭い部屋を完全に塞ぐことにした。同じことが倉庫VI［部屋VI］でも起こり、［部屋は］塞がれ、東壁の上部は取り壊され、部屋IIのベンチに変えられたが、そのおかげで部屋IIはいくらか広くなった。同時に、部屋IVに通じる通路の南壁の出入口のアーチが増築されたため、[68)] 屋根に通じる2段の階段が増築された。

この建物が寺院として存在していた期間、それ以上の改造はなかった（図77）。

3-7. 建築的な類似性と結論

ここでは詳細な論証をともなう建物の建築的な特徴を分析はできないものの、現時点でまとめた結論の概要について簡単に述べる（図56; 77; 78）。まずは、明確に建築様式に現れている顕著なシンクレティズム［混合主義］を挙げるべきである。まさに建物のプランそのものに、2つの起源が明確に現われている。

その最初のもの（寺院の主要な部分:広間、祠堂、回廊）は、東トルキスタンの古代の地上寺院、とく

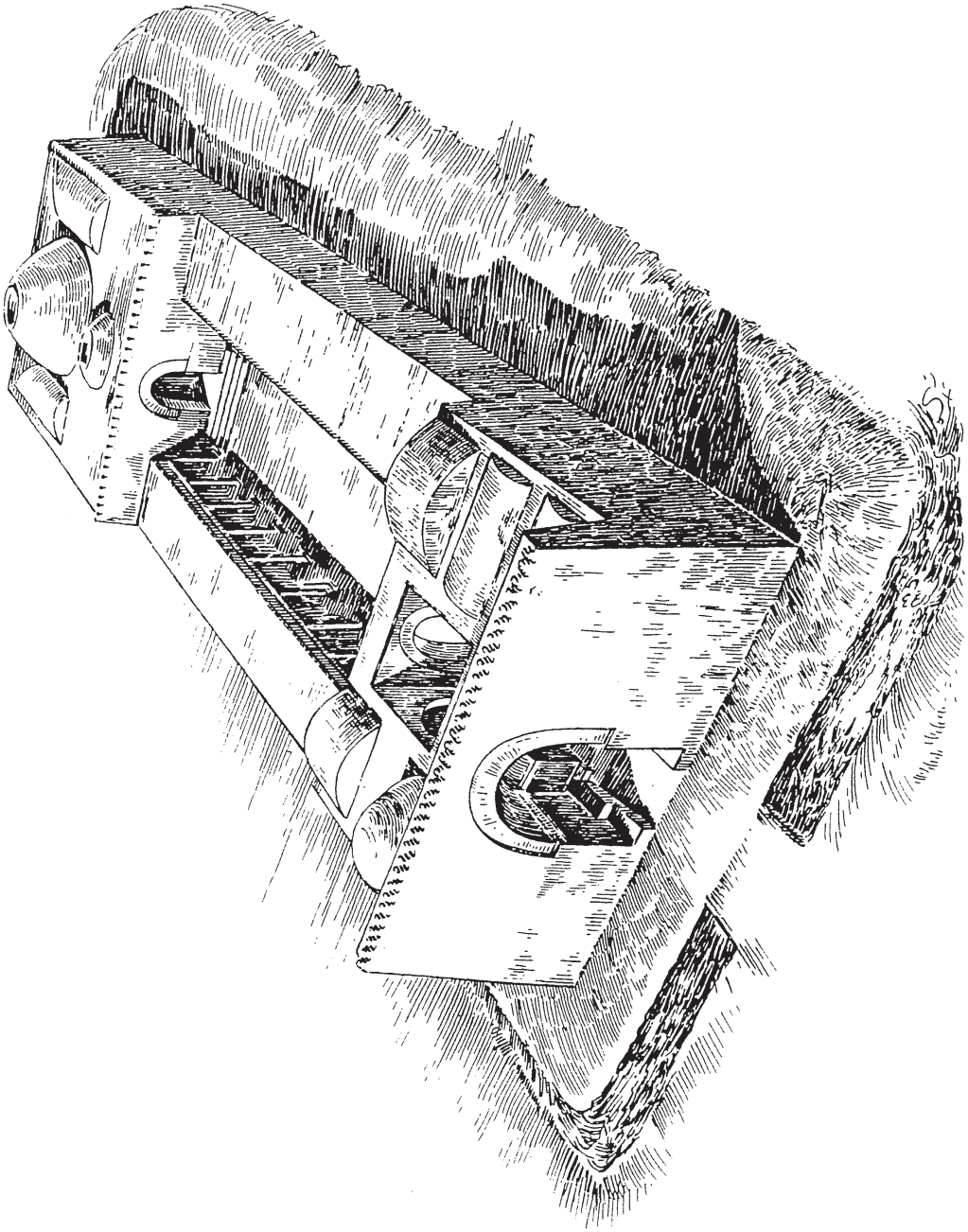


図78
仏教寺院の外観.
フメルニツキーの参画とヴォロニナとの相談に基づくクズラソフによる復元.
フメルニツキーによる作図.

にカラシャール周辺のシクシン Шикшин 寺院（ミンオイ Мин-уй 仏教僧院址［七个星佛寺］）[69]、ホータン・オアシスのダンダン・ウィリク Дандан-уилиг 寺院の一部[70]、トルファン盆地のベゼクリク Безеклиг の寺院[71]のプランと直接的に類似している。オルデンブルグ С.Ф. Ольденбург によって出版されたプランによると、シクシンのミンオイ遺跡には、アク・ベシム［第１仏教］寺院と同じように正方形の祠堂を囲む回廊を持つ 11 の寺院建築があった[72]。しかしながら、私たちの［アク・ベシム］寺院のプランを東トルキスタンの古代寺院のプランと比較すると、後者には中庭と出入口付近の部屋がないこと、そして縦軸と入り口の方向（おもに北東および北軸）、日干しレンガの大きさ[73]など、ほかの多くの詳細では一致しないことが明らかである。

２番目に、私たちの［アク・ベシム］仏教寺院のプランの起源は中央アジアに由来するものである。建物の東側部分、つまりアイワンをともなう中庭に関して言えることである。ペンジケント（ソグド）で発掘された第１神殿[74]のプランと著しく類似する特徴を挙げないわけにはいかない。その神殿にもまた、後世になって改造されてはいるものの、当初から広間と聖所を囲む回廊があり、それに加え、屋根がなく、東側に入口をともなう壁に囲まれた中庭もあった。配置［プラン］だけではなく、基本方位に沿った軸、つまり東西方向が縦軸となり、東向きの出入口をともなう点で、私たちの［アク・ベシムの第 1］仏教寺院はペンジケントのソグドの神殿に近似している。建設技術においても共通性がある。例えば、切断したパフサ･ブロック造りの壁の造り方、日干しレンガの大きさ（48 × 24 × 9cm、44 × 22 × 8cm）、そして完全に類似するイギリス積み工法[75]・[訳註49]、壁画の下地として使われた石灰のプラスター[76]、角錐台形をなすいくつかの柱の木製柱礎[77]などが挙げられる。

いまだにも類例が見出されていないのは、まさに仏教寺院の壁の構築方法のみである。

実際のところ、壁は一般的に以下のように構築されていた。練り土［パフサ］ブロックの土台[訳註50]の上に、その幅全体に合わせて、粘土モルタルを用いてイギリス積みに日干しレンガを７～８段積み、さらにその上に、同じ大きさのブロック形の練り土の層を重ね、その上にふたたびレンガを積んでいる（図 58; 64; 74-76）。

ヴォロニナの総括研究から判断すると、私たちの寺院のそのほかの建築の様式や細部などが７～８世紀の中央アジアの建築の様式と同じであることは興味深い[78]。それに関連しては、その当時のソグド建築の特徴であるレンガの正確なイギリス積み（ペンジケント Пенджикент、ムグ山の城 замок на горе Муг、都市遺跡ヒサーラク Хисорак）、レンガの大きさ（タリ・バルズ Тали-Барзу、ペンジケントおよびタシケント近くのアク・テパ Ак-тепе）、ヴォールト構造および入隅迫持に支えられるドーム屋根の正方形の部屋（ドームの直径は正方形の基部の幅より大きい）[79]（タシケント付近のアク･テパ､アフラスィヤーブ Афрасиаб）、レンガの「平」面によって構築されるアーチ（図 62）[訳註51]（アク・テパ）を挙げることができる。

さらに、東トルキスタン、とくに石窟寺院である敦煌の千仏洞[80]でも知られている像の階段状台座は私たちのものと完全に類似しているものの（図 70; 71）、ホレズム（カラリ・グル Калалы-гыр １号址）で発見された類似する台座から判断すると、中央アジアではより早い時期から知られていた。

したがって、上述したアク・ベシムの仏教寺院のすべての建築的特徴や明確に示されている混合［折衷］様式からすれば、東トルキスタンからの移住民によって建設されたとは言えない。むしろ、この優れた建築家は、中央アジアの中心部（ソグドとチャチ）と東トルキスタンの両方の建設技法に精通していたと結論付けることができる。

（上記の建築的な類似に基づいてアク・ベシムの仏教寺院［の建設］が属する時代とみなされる）７～８世紀のそのような人たちというのは､その当時、セミレーチエや東トルキスタンに進出し、定住したソグド人であった[81]。東トルキスタンやソグドそのもの、そして同じくその間に位置するチュー川流域にあった植民都市に定住していたソグド人は、彼らが行なっていた活発な交易活動のために、お互いに恒常的に連絡を取り合っていた。これらの地域一帯のソグド人の間には、さまざまな宗教、つまりマニ教やキリスト教、仏教が広まっていた[82]。それゆえ、アク・ベシムの仏教寺院が、おそらく東トルキスタンを訪れたことがあるソグド人の建築家によって建設されたという事実は驚くにあたらない。

しかしながら、この寺院の仏教徒集団には、ソグド人だけでなく（後者［ソグド人］は、寺院の第１

層で出土したさまざまな考古学資料、つまり土器、ソグド語の銘文をともなう土製の吊り下げ型印章、生活用品などの分析から[その存在が]確認される)、地元の住民、おそらく、7～8世紀にセミレーチエ地域を支配していたことが知られているテュルク語を話す関連部族も含まれていた。[83)]

これは、おそらく間接的には、寺院で発見された、7～8世紀に年代付けられる中国風に鋳造された(方孔をともなう）2種類の、いわゆる銅製の「テュルゲシュ式コイン」により証明できる。そのコインの銘は、テュルク語ではなく、ソグド語で書かれている。[84)]これらのコインの（同じく、弓の形をしたタムガをともなうテュルゲシュ・コインそのものの）銘文がテュルク語で記されているというベルンシュタムによる読みは誤りであり、[85)]テュルク学研究者(シェルバク A.M. Щербак ）に認められていない。というのも、テュルゲシュ可汗が発行したすべてのコインはソグド語の銘をともなっており、スミルノヴァ O.И. Смирнова にとってその銘文を読むことはとりわけ困難ということではなかったからである。

ペンジケントの研究者（ヤクボフスキー A.Ю. Якубовский とベレニツキー A.M. Беленицкий）は、かつて発表した論文のなかで、この遺跡で彼らが発見した諸神殿との建築的な類似性が欠けていることを強調していた。[86)]現在では、状況が変わっている。ペンジケントの第1神殿が持つすべての独創性にもかかわらず、現在では、アク・ベシム遺跡で私たちが調査した仏教寺院は、様式の点でそれ［第1神殿］に類似していると私たちは確信している。私が思うに、ベレニツキーが、ペンジケントの回廊をともなう第1神殿のもともとのプランは、回廊の代わりにアイワンが構築された第2神殿のプランと同じであったと信じたことは誤りであった。[87)]現時点で利用が可能なデータに基づけば、近隣諸国、第1に西アジアやイラン、アフガニスタンにおけるより古い古代の寺院［神殿］は、まさに回廊が聖所を囲むプランを持っていたことが立証されている。

ソグドやキルギズスタン、東トルキスタンの上述の寺院建築の設計の起源を明らかにするためには、もっとも古いゾロアスター教神殿および仏教寺院の建築構造の起源を手短に分析する必要がある。長方形の聖所を回廊が囲んでいたもっとも古い神殿はスーサにあるアケメネス朝［時代の］の拝火神殿である（前4世紀）。[88)]その後、正方形の聖所を囲む回廊がハトラ、[89)]そしてシャープール［ビーシャープール］（後3世紀）[90)]のサーサーン朝［時代の］のゾロアスター教の拝火神殿に造られた。

これら［回廊］は、ナバテアのバール・シャミン神殿に追加され、正方形の聖所（内部は4本の柱）に屋根付きの回廊[91)]をともなうというその［神殿の］プランは、アク・ベシムの仏教寺院の西側部分、そして東トルキスタンの仏教寺院（シクシンなど）のプランと完全に類似している。[92)]

上記の比較に基づき、モネネ・ドゥ・ヴィラール Monneret de Villard は、もっと後世の東トルキスタンの寺院（とくにトルファン）の諸寺院では、そのプランにおいて「仏教文化へのイラン文化の影響」が反映されているという結論に達した。[93)]「イラン文化」を広い意味でとらえるという条件付きでこの結論に賛成することが可能であり、それ［イラン文化］にはいまだにすべてが発見されてはいないものの、古代の寺院を持っていたイラン語を話す中央アジアの人たちの文化も含まれている。

（シュルンベルジュ D. Schlumberger が率いたフランス･アフガニスタン考古学調査団［DAFA］によって）1952年にアフガニスタンのスルフ・コータルの近くで発掘された小さな神殿は、6～10世紀において、東トルキスタンの建築へ与えた西方の影響についての考えを立証するものである。[94)]発掘調査を行った著者によると、これは2～3世紀のクシャーン朝時代に建設された後期ヘレニズムの小さな拝火神殿である。神殿の年代は、発見されたクシャーン朝のコインや土器、ギリシア語の碑文で確定されている。著者は、類似性と原型は上述のスーサにあったアケメネス朝の神殿を考慮しつつ、この神殿の建築におけるイランの伝統の直接的な影響を認めている。しかしながら、直接的な類例はスーサの神殿ではなく、スルフ・コータルとほぼ同時期のバール・シャミン神殿であろう。

7～8世紀のペンジケントやアク・ベシム、東トルキスタンの寺院のプランは、まさに後者の紀元後の数世紀に属する2つの寺院の型式に起源を持つものであり、東トルキスタンの仏教寺院、そしてこの形式の古代の寺院が見つかっていない中国でも、依然として存在している一部の寺院にそのプランがもっとも純粋に残っている。[95)]後者の例は、山西省の平遥古城に現在でも残っている寺院[訳註52)]である。［この寺院は］正方形の基壇上に構築され、東側に入り口、

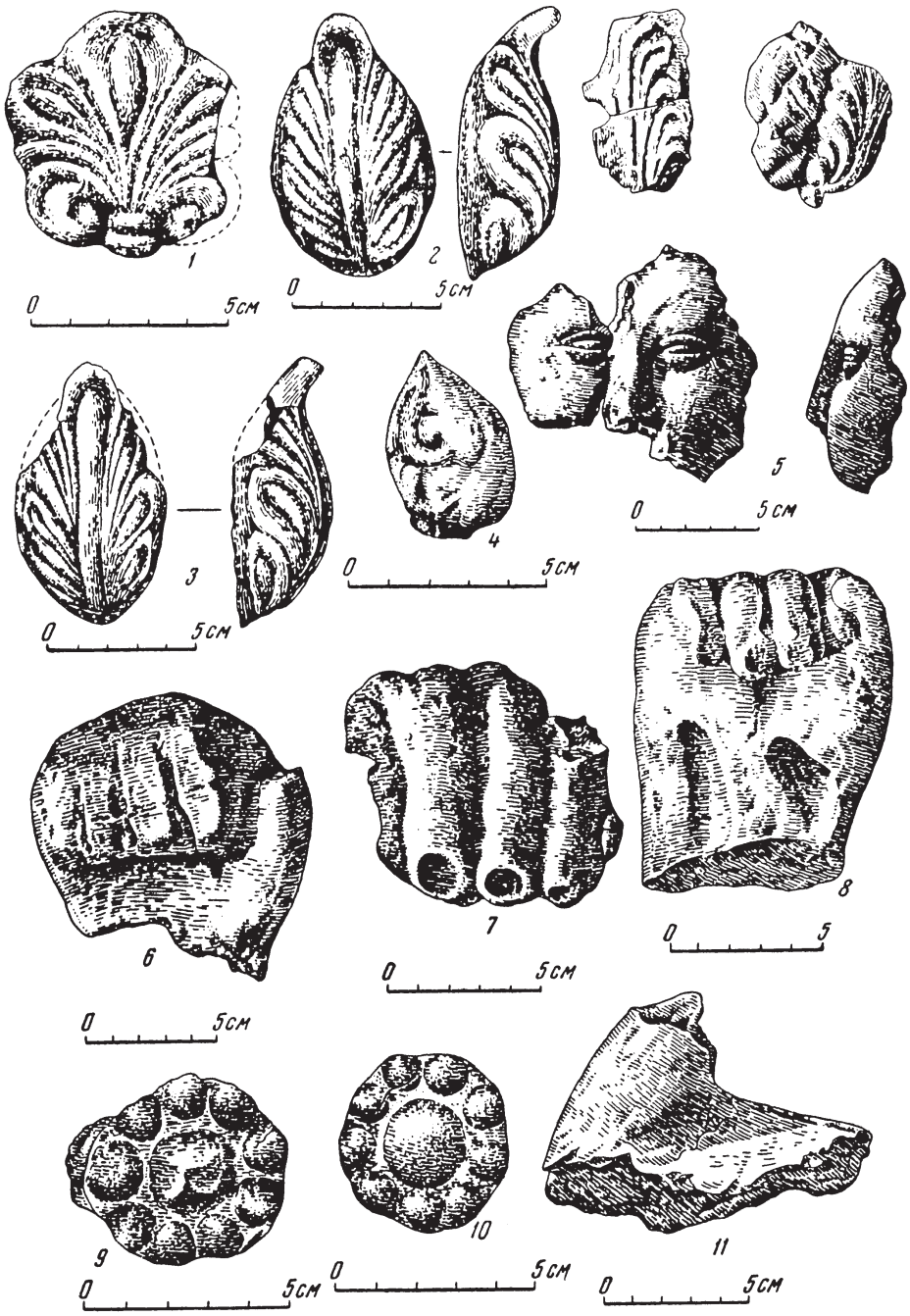


図79
寺院の宗教的な区域［聖域］出土の塑像と彫刻の貼付けレリーフ装飾の破片：
5. 仏陀の顔および枠の破片　11. 手の親指の破片．1. 祠堂　2, 3, 4, 7, 8. 広間
5, 6, 9, 10. 回廊の西翼部　11. 北翼部より出土．すべて土製．

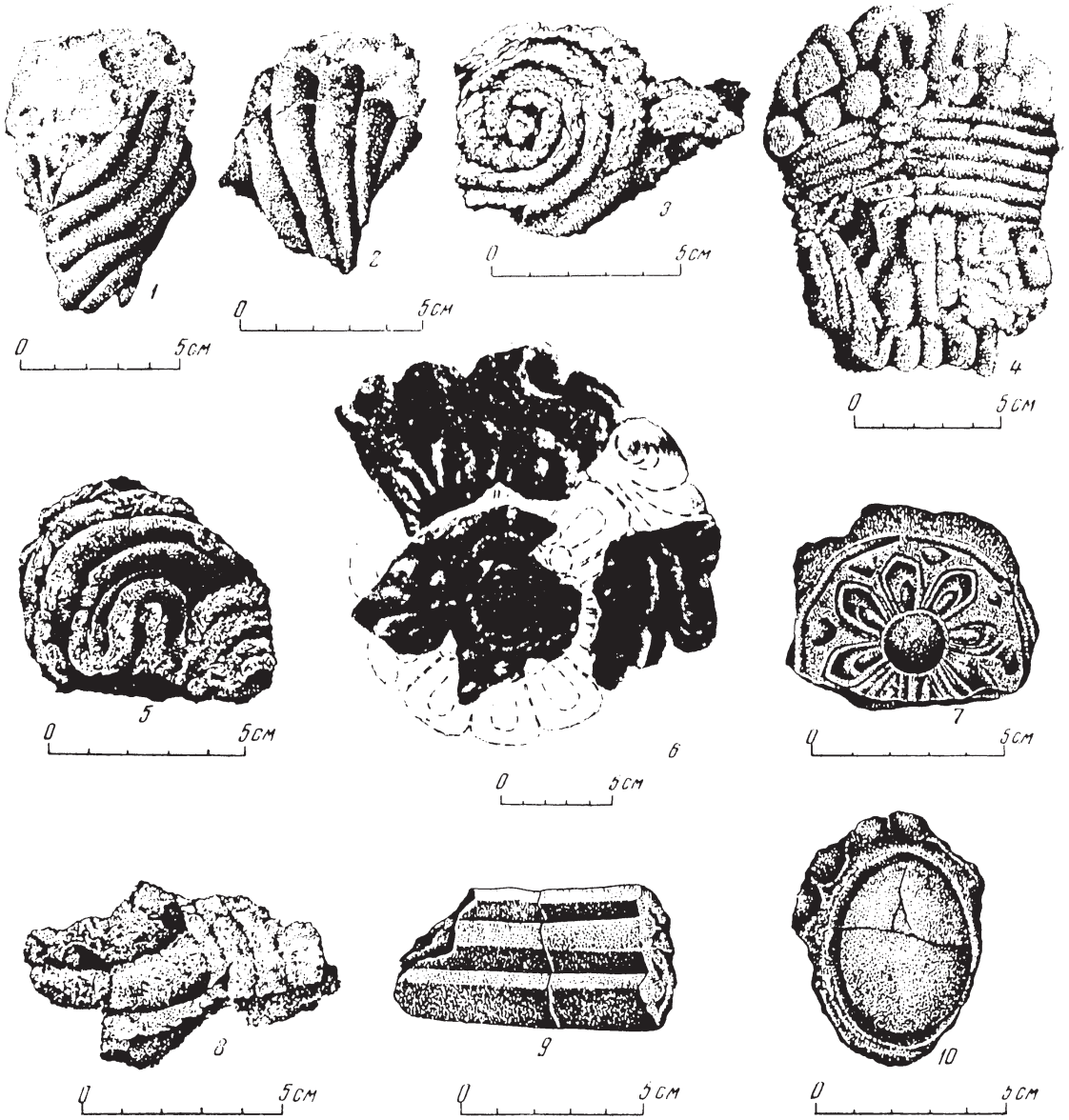


図80
レリーフ装飾の破片：1, 2, 3, 5, 8. 広間の木製柱の撚りがかけられた土製「甲殻」の破片（青い彩色が施されている）4, 6, 9, 10. 広間の壁の装飾
7. 回廊の西翼部出土の塑像の蓮弁文様．すべて土製.

その前面には空いた空間［広間］があり、正方形の祠堂を囲む回廊の壁は練り土造りで、その壁のなかには木製の支柱が埋め込まれており、さらに聖所に4本の柱がある。[96]

この寺院は古くから存在しているが、正確な建設の年代は不明である。天井の梁に刻まれた碑文からわかることは、「大定三年に復元された」、つまり1163年［に復元された］ということだけである。すでに列挙したすべての特徴の点で、これはスルフ・コータルの神殿に類似している。後者［スルフ・コータルの神殿］も日干しレンガの基壇の上に建設されており、平面プランは正方形で、正方形の聖所のなかには4本の柱があり、入り口は東側である。[97]興味深いことに、聖所の日干しレンガの壁のなかには、アク・ベシムの寺院と同じように、礎石に据えられた木製の支柱があった。[98]

最後になるが、中央アジアでは、イスラーム時代であっても、同じようなプランを持つ宗教的な建物が維持されていることを記しておくべきである。例えば、ヴィヤトキン В.Л. Вяткин とザスィプキン Б.Н. Засыпкин によって1927年に発見されたテルメズ［市］の第1号建物であり、同時に遺構の試掘も行われた。[99]その建物の壁は日干しレンガで造られていたが、内側と外側には焼成レンガが積まれていた。「中央部分は正方形に区画されており、その四面すべてに回廊があり」、壁にはナスフ体で書かれた宗教的な碑文があり、この建物は11～12世紀以降に年代付けられる。[100]

ザスィプキンは正しくも、ここは古代の仏教徒の建物がイスラーム教徒の建物として採用された事例であると示唆している。というのも、とくに同じ年にテルメズにおいて石製の仏像の断片と日干しレンガ造りの仏塔という仏教の痕跡が発見されたからである。[101]

3-8. 彫刻および壁画

優れた建築家とともに、寺院の装飾には才能ある彫刻家と画家が参加した。

残念ながら、像と壁画は断片としてしか私たちに伝わっていない。おそらく8世紀の後半に都市全体を占領した遊牧民が、建物に深刻な被害を与えたことによるものである。数多くの塑像はすべて破壊され、その破片が当初の堆積物の下に残された。発掘では、脚や拳を握りしめた手、頭部の断片（顔、耳など）、襞がついた衣服の痕跡をともなう胴部の一部、塑像の立体的な型押し装飾の破片（土製の蓮弁、螺髪、メダイヨン［円や楕円］形や多花弁の飾り板など）、長い龍の破片、木製の柱を飾った撚り合わせた土製の装飾、植物形の貼付け装飾などが発見された（図68；69；79；80）。[102]

仏像とそのほかの塑像は、ペンジケントや東トルキスタンの塑像、そしてカーブル近郊のテペ・マランジャーンの仏像と同じように、葦と木製の芯を用いて粘土で造られていた。[103]それらはすべて、大形の貼付け装飾と同じように、表面は薄いプラスターで覆われ、その上に青色、黄色、赤色、黒色といった原色の絵具が塗られていた。中間色としては、オレンジ色、赤茶色、薄黄色があった。壁画や天井画を調査した際にも、同じ色の種類が記録された。

塑像の図像の美術的な解釈、造形的な像を表現するための様式、塑像の装飾の詳細（衣装の襞、貼付け文様の「ベルト」、蓮弁、「メダイヨン」など）、これらすべてが同時代の東トルキスタンのおける寺院の典型的な芸術と完全に一致している。[104]たとえば、「ベルト」に付いている完全に類似した蓮弁、連珠をともなう「メダイヨン」（図68, 3, 6, 9；69, 7, 8；80, 7, 10）はシクシンの塑像を飾っている。[105]それに加え、「メダイヨン」は東トルキスタン出土の土器に貼付けられることが多く、[106]また木製品などにも彫刻されていた。[107]また、私たちのものと類似する土製のパルメット文様もある（図68, 10；79, 1）。[108]

広間（南側の台座の近く）で発見された、仏像の頭部の断片に貼付けられたものやそこから剥がれ落ちた土製の青色の螺髪は（図69, 2, 3）、典型的な髪の表現である。また、このような螺髪を型作りするための型が見つかっている東トルキスタンの数多くの仏像にも特徴的である。[109][110]

しかし、ここでは、アク・ベシム寺院の弥勒菩薩の波状の髪と同じように表現された髪を持つ仏像が、シクシンで発見されていることに注目すべきである（図69, 5）。[111]

その一方で、土製の装飾（たとえば、開花するつぼみ－図79, 2, 3, 4など）には、類似するものを見つけることができない形のものもある。このことは、蛇型龍やそのほかの詳細とあいまって、独自の方法で、仏教寺院に必要な宗教的な装飾を再現していた地元の彫刻家の独創的な流儀を私たちに想定させる。広間の壁龕で発見された上述の龍は、身体を

くねらせ、しわが寄った胴体をしており、むき出しになった捕食性の歯、額に「真珠」をともなう独特な頭部を持っている（図 68, 1, 2）。

その形は非常に独創的に表現されている。しかしながら、上述した装飾のすべての特徴は、東トルキスタンだけでなく、中央アジアの中央部、まず第 1 にソグドとの関係を反映しており、それらの同時代の美術作品には、同じような多花弁文様や連珠で縁取られた「メダイヨン［円形浮き彫り］」がある（図 68, 3, 6, 9; 79, 9–10）。アク・ベシムのものと完全に類似する装飾の種類は、土器でも知られている。たとえば、7 ～ 8 世紀に、都市遺跡であるカーフィル・カラ Кафир-кала、[112] 同じくタリ・バルズ Тали-Барз[113] として知られている都市に住んでいた熟練した陶工によって作られた土器の［装飾］である。

中央広間と回廊のすべての壁、ヴォールトや天井の全面が一連の壁画で覆われていたという、いくつかの証拠がある。祠堂と中庭、出入り口付近の部屋には壁画はなかった。

残念ながら、かつてすべての壁画は破壊され、それゆえその大部分は残っていない。しかしながら、床面や堆積中の完全に破壊された破片のなかには、比較的小さな漆喰の層が見つかっており、その［漆喰］上には保存状態が良い壁画の断片があった。これらの破片から判断すると、2 種類の文様、つまり幾何学文と植物文が主流であった。しかし、寺院には、仏陀の生涯の場面を描いた壁画があった証拠もある。回廊の西壁では、非常に精巧で大胆に描かれた仏陀の頭部の壁画の破片が見つかった。[114]

壁画は、かつて改変され、描き直されたという証拠がある。その際には、古い壁画に上に石灰の漆喰層を塗り、この新たな土［下地］の上に新しい壁画が描かれた。様式の特徴、図像の性格、描法には、東トルキスタンの石窟［寺院］と地上寺院の壁画と直接的に類似する点がある。とくに、アク・ベシム寺院の広間の天井の壁画[115]の構図と細部は、センギム・アグィズ寺院の第 10 号址の天井画[116]に近い。

3–9. 遺物

発掘された建物の第 1 期に遡る遺物のなかでもとくに重要なのは、その当時、チュー川流域において灌漑による顕著に発達した農耕があったことを証明するものである。建物の壁を調査した際に、中庭の隅の壁できわめて貴重で珍しい遺物、つまり 8 世紀の木製の犂が発見された。これは、ネズノキ［アルチャ］（キルギズのブウルスン種［ビャクシン属］[訳註53]）製の、使用済みの古い犂である。[117] それは、建物の建設に際して、角をより強固にするために、壁のなかに置かれた（図 81, 1）。かつては鉄製の犂先が付いており、その軸受筒の痕跡は作動部分に残されている。犂は直角に曲がっているため、水平方向に犂先が土に切り込み、雑草の根を切り、土壌を破砕する［ようになっている］。とはいえ、犂としての機能を果たすことができず、土を掘り起こすことなく、表面をひっかくだけのものである。

さらに、祠堂の扉のスライス軸受には、1 つの大きな下臼（直径 1.5 メートル以下）の 2 つの破片が使われていた。[118] 同じく石臼の破片が、祠堂の壁を支える柱の基礎として機能していた。[119] 寺院のまさに入り口では、直径 1.5m の完形の上臼が見つかった（図 73, 7）。そのような大きく、古い石臼の完形品や破片が、とくに中庭で数多く（10 個以上）発見された。［これらは］中庭の床面の窪みや浸食を舗装するために用いられていた（図 73, 1, 2, 4）。[120] 灰色の花崗岩製の板石で作られたこのように大きな石臼は、おそらく大規模な灌漑水路や川沿いに建てられた水車に使用されていた。同じような水車は、まさに 8 世紀にソグドで出現している。[121]

上述のように、寺院の日干しレンガの練り土には、ワラや穀物（大麦？）の種の痕跡が発見されている。追記しておくべきであるが、中庭のゴミ穴のクリーニングの際には、小麦の種子も発見された。

これらすべての遺物［発見物］、とくに数多くの大型の水車が存在していた証拠は、非常に重要な事実、つまり、7 ～ 8 世紀のチュー川流域でパンの商業的な製造が発達していたこと、そして同じくこの寺院の仏教徒集団が主として農民－パン焼き職人、そしてキャラバンサライの所有者で構成されていたということを証明している。

アンズの種、カボチャとスイカ、メロンの乾燥した種子の発見は、その当時、果樹園とメロン畑［ウリ科果菜類の畑］があり、広範な灌漑水路のネットワークによって水が供給されていたことを証明している。寺院の中庭に見つかった水路は、このような水路［の存在］の直接的な証拠である。

この建物が寺院として機能していた時期に主として関連するほかの遺物［発見物］は仏教の儀礼に関するものである。第 1 に、類例のない、青銅製の透

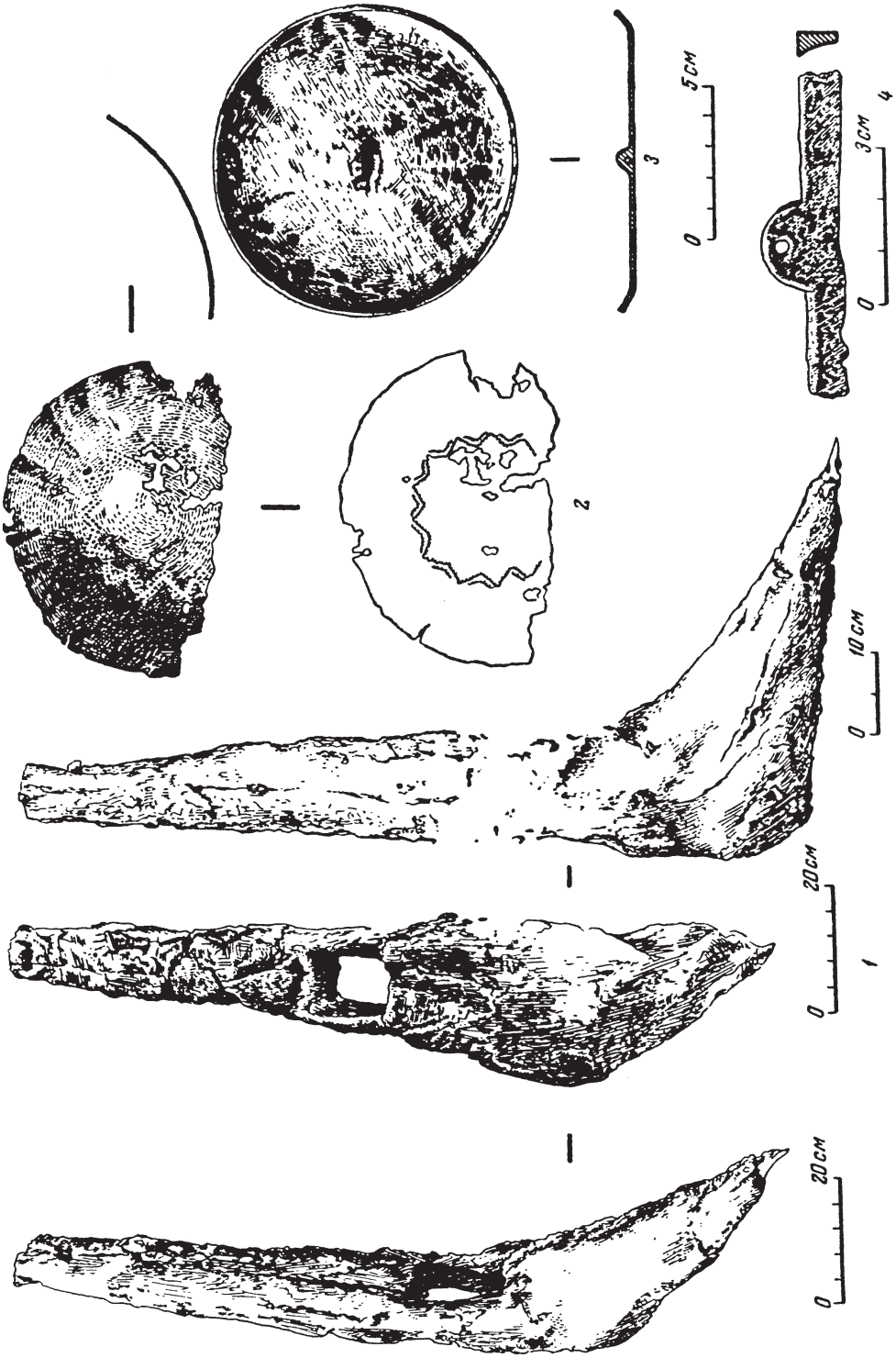


図81
寺院出土：1. 犂　2. 秤の皿の破片　3. 鏡　4. 鞄の留め具のパッド（1. アルチャ材　2–4. 青銅）

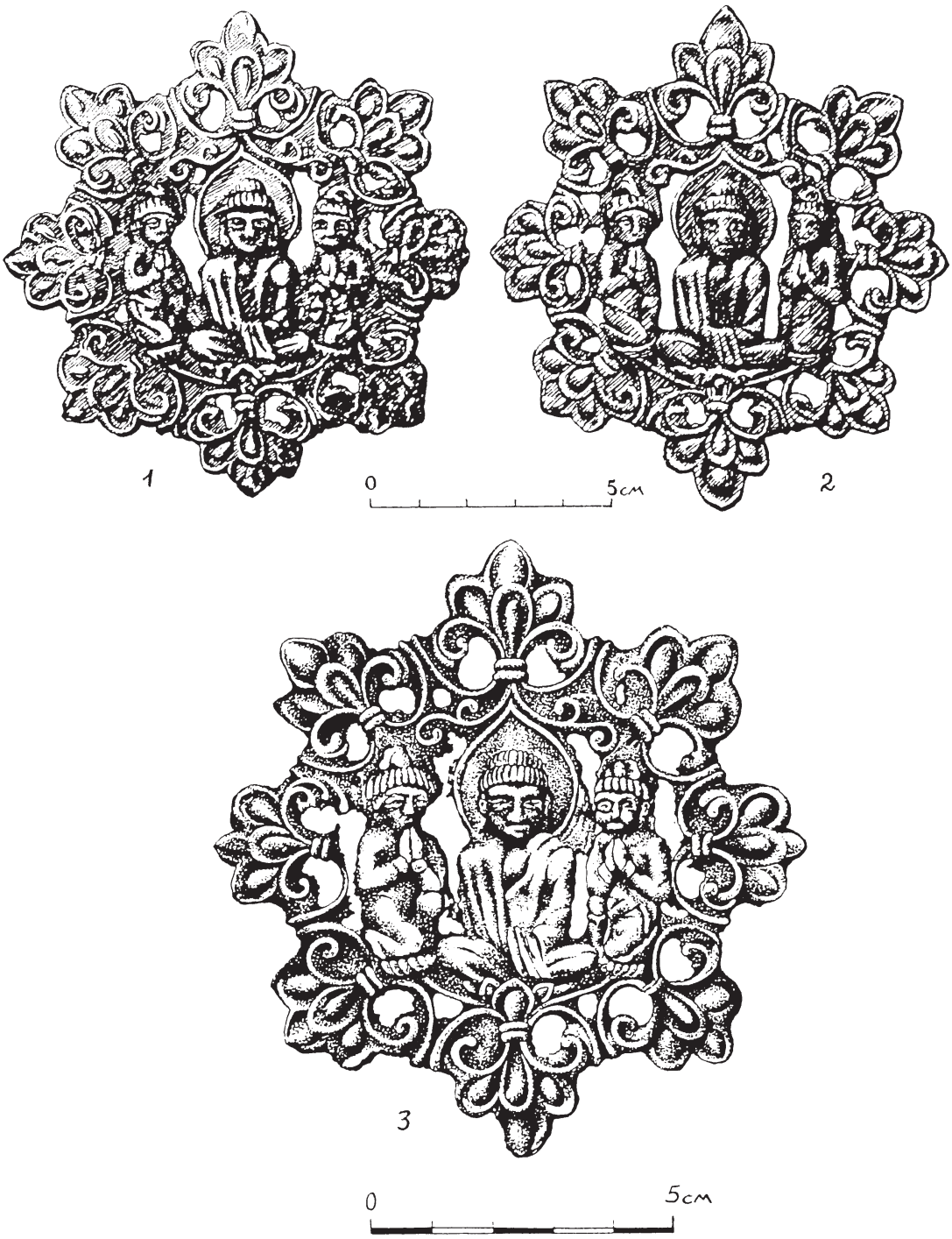


図82
仏陀と弟子が描かれた青銅製の透かし彫り飾り板．寺院の祠堂出土.

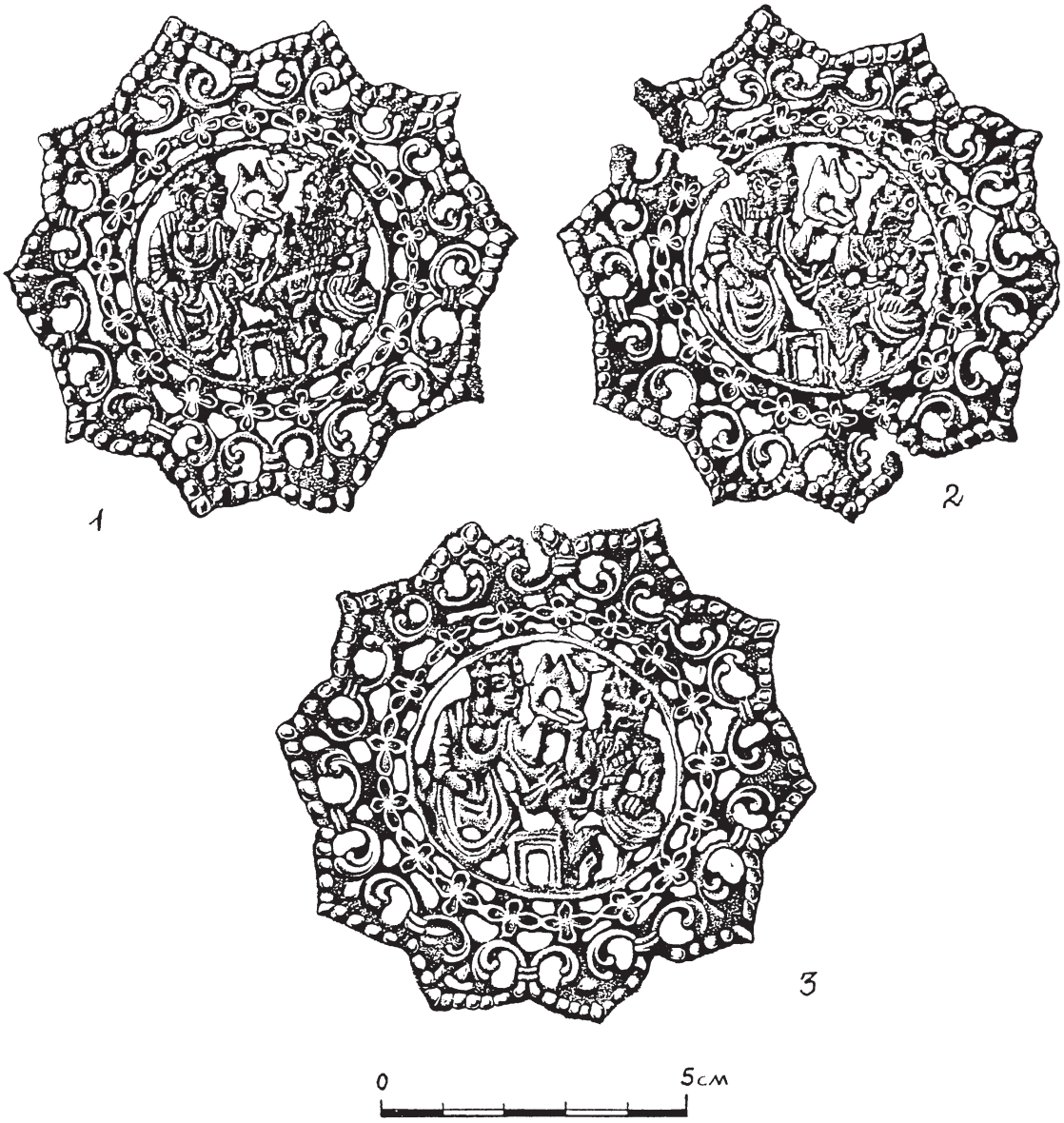


図83
ラクダを持つ２人の神を描かれている鍍金が施された透かし彫り飾り板．寺院の祠堂出土.

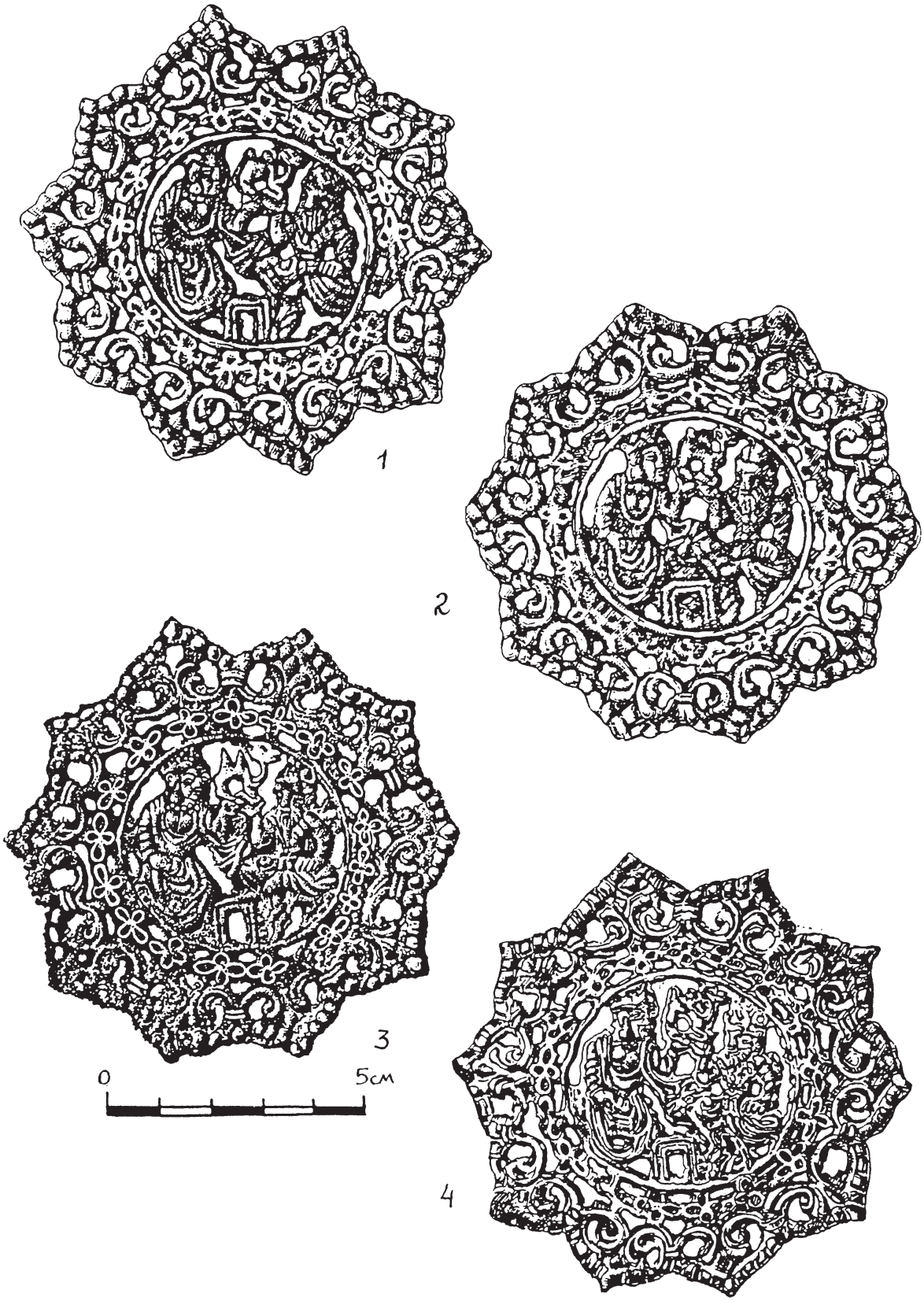


図84
「聖障」の一部をなす鍍金が施された青銅製の飾り板．寺院の祠堂出土.

図85
鍍金が施された青銅製の仏教の飾り板．回廊の西翼部出土.

かし彫りの飾り板であり、多くは熱法［アマルガム法］によって鍍金されている。計17個の完形品で見つかり、もう1つ、つまり18個目は断片であった。上述したように、そのうちの12個の飾り板は、祠堂の一番西側の壁付近、床よりわずかに高いレベルで一括して発見された（図82〜84）[122]。おそらく、飾り板はもともと白い綿製の布で覆われた皮革、もしくは薄い板に金具で留められ（飾り板のいくつかの金具に布［の痕跡］が残されている）、壁に掛けられていた。［この壁は］一種の仏教の「聖障」[訳註54]をなしていた。当初、これらの大きな黄色い飾り板の透かし彫り［の部分］は、背景となる布の色のおかげで白く見えていた。火災で天井の梁が崩壊した後、「聖障」はすぐには壁から外れ落ちず、最終的に床ではなく、すでに堆積していた層の上に落下した。

一方、ほかの5個の類似する飾り板は床面で発見された。2個は回廊の西側部分（図85; 86, 1）、1点は広間の南壁の近く（図87, 2）、1個は祠堂（部屋III）（図86, 2）、1個は廊下IV（図86, 3）である。最後（18個目）の飾り板の破片は中庭で見つかった。さらに、回廊の西側部分で、同じく金具が付けられた鍍金の飾り板が見つかったが、これは、おそらく同じ「聖障」の上の方にあったものであろう（図87, 1）。中庭では、石をはめ込むための穴を持つ、形が崩れた薄い鍍金製の枠も見つかった。これは、おそらく、もともと祠堂にあった青銅製の仏像を飾っていたもので、外され、捨てられたものである（図88）。

発見された飾り板の類例はない。しかし、東トルキスタンの仏教徒の間で透かし彫りの青銅製の飾り板（仏陀ではなく、花の図像）が存在していたことは、ル・コックによるセンギムの第10寺院址の発掘で確認されている[123]。また、［敦煌の］千仏洞の壁画では、大きな仏陀図の周りに小さな仏陀が配置される、ある種の「聖障」も知られている[124]。さらに、ホータン・オアシスでは、差し込み［部分］をともなう［杖などの］頭部の形をしたある種の仏教の青銅製の「聖障」が見つかっており、上部には仏陀と6人の菩薩が7つの枝の蓮華座に座っている[125]。

私たちが発見した仏教の神々の図像をともなう透

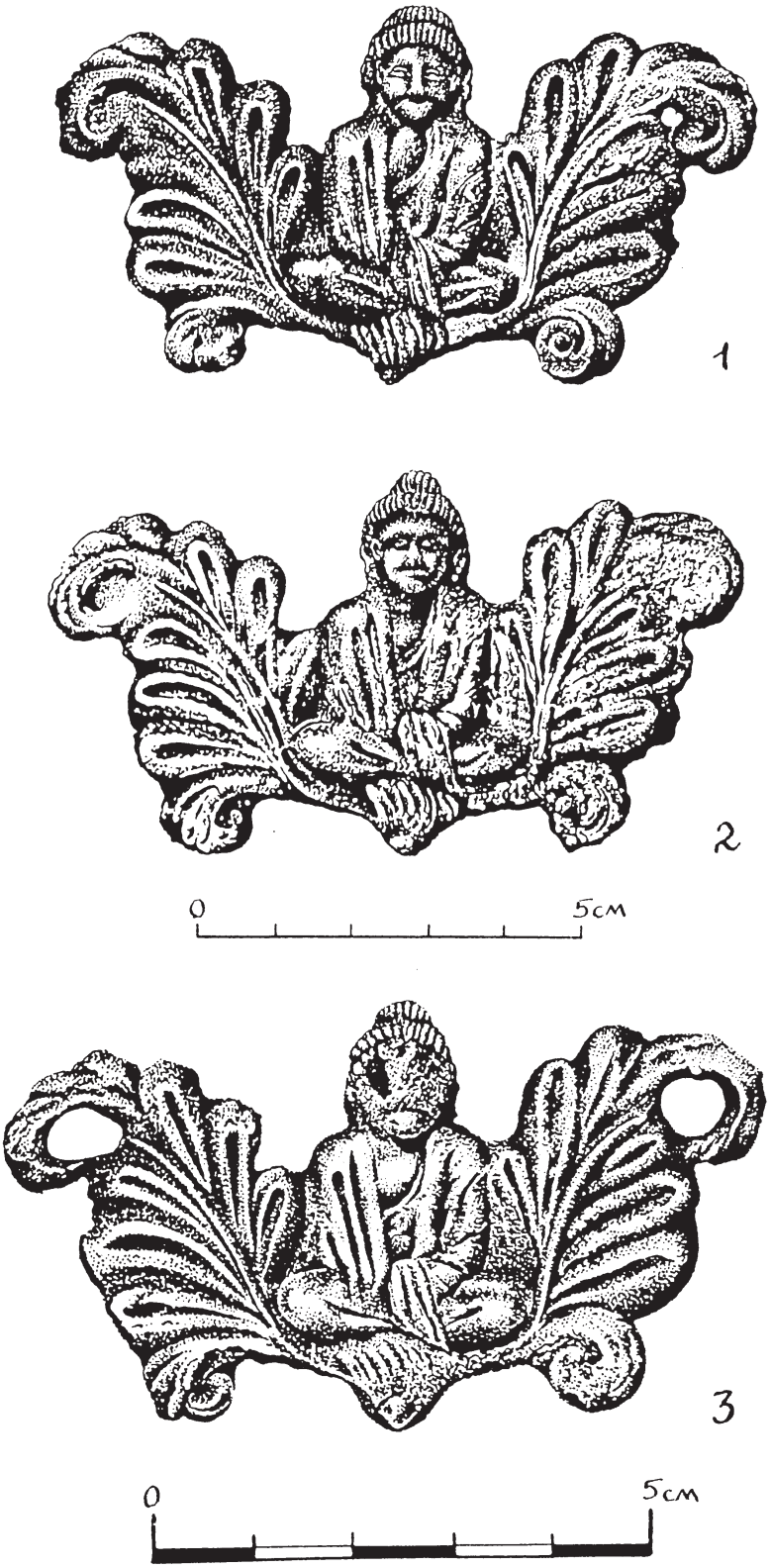
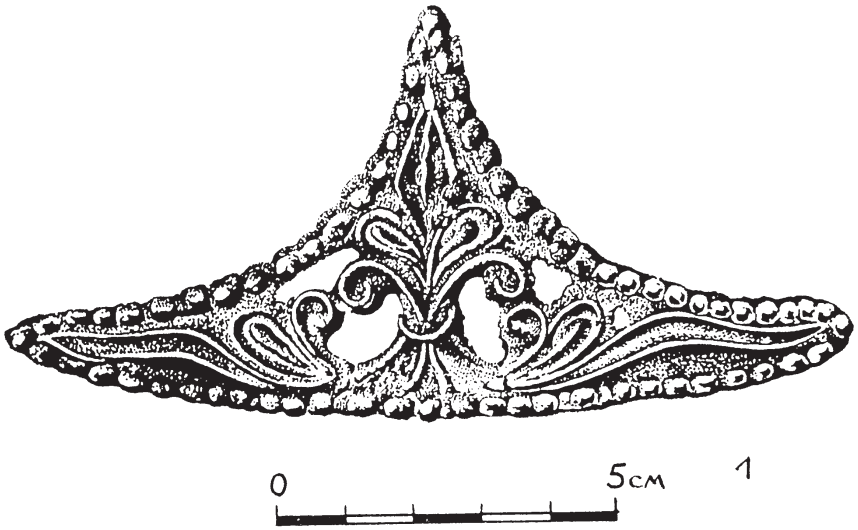


図86
仏教の青銅製の飾り板：1．鍍金が施されているもの，回廊の西翼部出土
2. 部屋 III 出土（礼拝堂） 3. 部屋 IV 出土。



【図 87】
鍍金が施された青銅製の仏教の飾り板：
1. 回廊の西翼部出土　2. トルコ石が象嵌されたもの，広間出土.

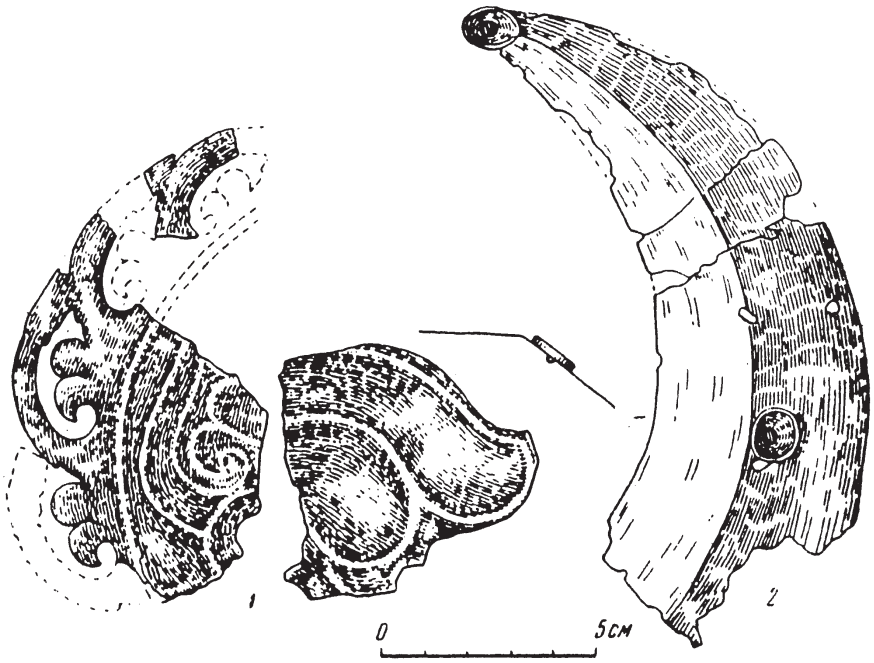


図88
鍍金が施された青銅製の仏像の縁枠．中庭出土.

かし彫りの飾り板は6つの種類に分類されている。

1. 頭の後ろに後光をともない、足を組んで蓮華座に座る仏陀の図像が描かれる、大きく、鍍金された飾り板。仏陀の両側には、2人の菩薩（あるいは弟子？）が、蓮華［座］の上で、片膝をつき、お祈りの姿勢で、両手を胸の前に組んで座っている。この場面全体は、様式的には8世紀に遡る、豊かなパルメット様の装飾で囲まれている（図85）：1点。

2. 中央には同じように［2人の］菩薩をともなう仏陀［が描かれるが］、この場面を囲むパルメット様の装飾はあまり複雑ではない（図82）：1点は破片のみ、同じ型で鋳造されたまったく同じもの5点。[126]

3. 中央部は同じ場面で、仏陀と菩薩が描かれているが、4弁のロゼットの縁取りが枠をなし、蓮の葉で縁取られている：1点。[127]

4. 同じく仏陀であるが、（後光と蓮はなく）単独で2枚の葉の間に座っている（図86）：3点、1点のみ鍍金製。[128]

5. 鍍金製の飾り板の1種で、中央には蓮華座に座る同じ仏陀、後光から渦巻き状の植物が出ている。仏陀が座っている中央の円と花冠には6つの受け口があり、そのうちの2つには青いトルコ石が嵌め込まれている（図87, 2）：1点。

細部から判断すると、これらのすべての5種類の飾り板には同じ仏陀の図像が描かれている。

この図像では、肩から垂れ下がる衣のひだで両手が覆われ、手さえもが隠されている点がやや珍しい。私たちが知っている限り、そのほかの細部では私たちのものと一致しないものの、このように衣を纏った仏陀は、中世の東トルキスタンの仏教の遺物にのみ特徴的であり、壁画[129]とテラコッタ[130]の双方に描かれていた。より古くは、ガンダーラにおいて、仏陀と菩薩がこのように描かれていた。[131]

6. 中央部の円のなかに男性と女性の2人の神が描かれた鍍金製の飾り板は、図像学の観点からみてきわめて特徴的なものであり、仏教の神々のなかには類例がない（図83；84）。中世初期のソグドの神々を除けば（これについては後述する）、中央アジアに特徴的な宗教の神々の図像においてもそれらに近い類例はない。同種の7点［の飾り板］が、上述した祠堂の「聖障」の一部として見つかった。

神々の図像はまったく典型的なものではないようで、多くの日常的な描写があることから、むしろ人々の実像に近い。左側は、襞が垂れ下がる長い衣服を纏い、足を曲げて腰を下ろす［正座する］女性であ

る。背後に彼女の脚の足が見えるが、かかとを上に向けている。衣服の深い襟ぐりによって胸と首が露出し、その上に球形ビーズの首飾りが垂れ下がっている。頭飾りは判別しにくい。大きく膨らんだ目、そしてまっすぐな鼻をした顔であり、3/4 面の向きで、容貌は完全にコーカソイドである。右耳には、大きく、丸いペンダントが付いた耳飾りがあり、左肩からはスカーフ（？）が垂れており、襞となってまとまったその端部は、隣に座っている男性の膝の上に置かれている。長衣を纏った腰が細い男性は、ベルト（おそらく帯飾り付き）を締め、高い鼻、窪んだ目、大きなひげを持つコーカソイドの顔をしている。頭飾りははっきりしないが、おそらく、男性の頭部には動物の耳が描かれている。バルマ型の首飾り［金属板製の首飾り］[訳註55]が肩から胸にぶら下がっている。男性は右脚を下ろして座っている。左足を前に組み、その上に左手を載せている。神々の間、前面には、脚付きのテーブル（もしくは祭壇）がある。男性と女性は、（男性は右手で、女性は左手で）彼らの手のひらに置かれた小さなラクダを掴むことで一体となっている。この場面の円は、上述の３つ目の種類の仏陀が描かれた飾り板の縁と同じく、４花弁の蓮弁の輪で縁取られている。[132]外側の縁取りは別なものである。

この種類の飾り板は（もちろん、これらの飾り板は仏教のものであり、仏教寺院の「聖障」に由来することを念頭に置きつつ）、仏教の神々のイメージと男性の神の脚の位置（片足を下ろして、片足を組む）という［点］だけは、この姿勢はガンダーラの太陽の神々の[133]図像をはじめ、もっとも後期の「ブルカン」[134]・[訳註56]に至るまで、仏教の善神の伝統的な姿勢（つまり、ラリターサナ［遊戯坐］に関連付けられる。

現時点では、これらの偉大な神々は誰なのか、そしてラクダをともなう場面全体の意味は何なのかを確定することは困難なように思える。しかしながら、神々の容貌全体、服装とその細部は、おそらく地元的、つまり中央アジア的であり、より正確にはソグド的である。

男性に関しては、窪んだ目を持つひげを生やした神々は、ベルンシュタムが発表したチュー川流域出土のテラコッタ像[135]、そして、同じように、例としては、最近、タジク考古学調査隊によってペンジケントで発見された壁画で知られている。それに加え、カスタルスキーのコレクションには、同じような動物の耳が付いている頭飾りを持つテラコッタ製の頭部がある。[136]

胸を露出させ、首に首飾りを付け、特徴的なひだ付きの衣服を纏った女性の神は、同コレクションのなかにある、子羊を抱える女性のテラコッタ製の図像（残念ながら、壊れている）に類例を求められるかもしれない。[137]さらに、（広い意味では）彼女の肩から垂れ下がっているスカーフはイラン風であると解釈されよう。

上述した詳細、そして中央アジアの中央部で年々明らかにされているラクダの神聖な意味は、８世紀のチュー川流域の仏教徒の神々に含まれる地元のテュルク－ソグドの神々の図像がアク・ベシムで発見された飾り板に描かれていることを示している。[138]これは何ら不思議でもない。というのも、まず、多数派ではないにしても、この寺院の仏教徒集団のなかには非常に多くのソグド人がいたからであり、第２に、仏教はとても容易に地元の信仰を受け容れ、同化したことが一般的に知られているからである。[139]この一対の神は、まず第１に、スイヤブの都市の住民、つまりおもにセミレーチエのテュルク－ソグド人の守護神を表したものだと考えられる。

図像を振り返ると、この一対の神は、ソグド起源の神々ではなく、テュルク－ソグド起源を示しているものと説明できる。男性と女性の両方の図像は、別々にソグドの初期の信仰図像で見つかっている（マルシャーク Б.И. Маршак によれば、男性と女性の神は、勝利、そして幸福の神、つまりソグドのヴァシャグン Вашагн（アヴェスターのヴァレスラグナ）、そして確信はあまりないが、ヴァニンダ Ванинда に比定されうる）。

ソグドの宗教の図像では、神々はもともと単独で描かれている。アフラスィヤーブやペンジケントの壁画では、男神と女神は１つの玉座に座り、共通の持ち物（ラクダの像）によって一体となっており、[140]テュルク族の支配の下で、テュルク族の宇宙起源論の影響を受けて登場したもののようである。未知の時代から、世界を主導する神の夫婦、テングリとウマイが特徴的であり、地上ではカガン［可汗］とカトゥン［可敦］の支配者の夫婦で再現される。テュルク族が持つもともとの世界観におけるこの夫婦の神聖な不可分性は、第１突厥可汗国の影響範囲に含まれていた中央アジアのいくつかの地域では公的な記念物に影響を与えている。それらのなかでもっと

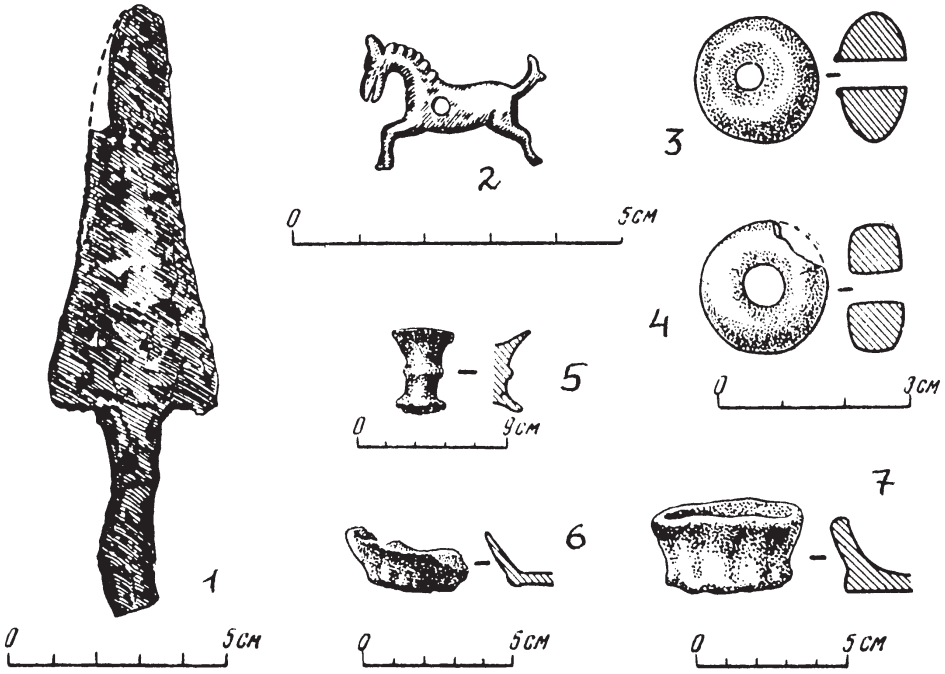


図89
仏教の儀礼用品：1. 装飾的な紋章旗の槍先　2. 馬形護符　3, 4. 数珠
5. 小型ランプ　6, 7. 小型カップ（1. 鉄　2. 青銅　3–7. 土）

も有名なのは現地で製造されたコインであり、コイン資料の歴史のなかで初めて、片面に最高支配者とその妻の顔からなる一対の図像が描かれている。[141] また、それと同じように、ソグドの神々の図像が、テュルク語世界に登場したテングリとウマイの図像に影響を与えたとも十分考えられる。[142]

いずれにしても、上述の建築や彫刻、絵画の特徴と同じように、アク・ベシムの寺院の飾り板の一対の図像には、7 ～ 10 世紀のチュー川流域の諸都市の文化のシンクレティズムの本質が明確に現れている。

宗教的なほかの遺物のなかで注目すべきは、祠堂 III で発見された土製の数珠（図 89, 3, 4）、テラコッタ製の仏陀頭部の型押し用の石膏製の型（部屋 V、図 90, 1, 2）、仏教徒の旗の平らな鉄製槍先（図 89, 1: 回廊の南翼部）、疾駆する馬の形をした孔付きの青銅製の護符（図 89, 2）、[143] 土製の小型のカップと同じ小型のランプ（図 89, 5-7）である。

この建物が寺院として存在していた時期に関連するほかの遺物はあまり多くない。もっとも多く発見されたのは、建物の木造部分が燃えたあとに残った鉄製の釘や犬釘、又釘であった。[144] 青銅製の釘もあった。

しかし、もっとも注目すべきものは中庭の下層で見つかった。まずは、異なる地点で発見された、完全に同一の 4 つの文書用の土製の印章［封泥］であり（ムグ山のソグドの城塞の文書とともに見つかったものと類似）、[145] それには象の図像と短いソグド語の銘が刻まれていた。[146] 発掘調査のおもな資料が出版された 1959 年の時点では、この銘は解読されていなかった。その後、スミルノヴァはそれを「主 господин」と読み、リフシツ B.A. Лившиц は（もっと後になってから）著者に「象 слон」と読めると述べた。[147]

底部に星のような文様をともなう青銅製の秤用の皿（図 81, 2）、側面が 1.3cm と 1.5cm の鉄製の立方体の重り［分銅］2 点、ソグド語の銘が刻まれたテュルゲシュ式コイン 4 点もここで見つかった。コインの 1 点は、水路の底面を取り除いたときに、その下で見つかった。真ん中に丸い孔が開いたコイン型の中国風の護符もそこにあった。

寺院の下層では、三叉槍の形をしたタムガとソグド語の銘をともなう（この都市の領主によって発行された）小さなテュルゲシュ式コイン［トゥフス・コイン＝ワナントマーフ・コイン］だけがいたる所で発見されたが、弓形のタムガをともなう 8 世紀の

図90
仏陀の頭部のテラコッタ［素焼き製品］の型作り用の石灰製型の破片（1），
その型による粘土の印影（2）.

テュルゲシュ・コインそのものは、上層でのみ出土していることは強調されるべきである（図 91）。この状況に基づけば、テュルゲシュ式コインは、テュルゲシュ・コインそのものよりも前に発行され始めたと推測することが可能である。すなわち、［テュルゲシュ式コインが発行されたのは］「おそらく、7 世紀の末、この寺院が建設されたときで、［この寺院は］8 世紀初めまで存続し続けた」[148]。発見されたすべての出土品および建築やその他の類似点は、この年代付けと矛盾しない。

同じテュルゲシュ式コインが、中庭を除けば、広間の柱の木製の基部［柱礎］の下（1 点）、広間の床面（2 点）、祠堂の床面（1 点）、回廊の北翼部の床面で（1 点）、そしてもっとも重要なことに、祠堂（部屋 III）の壁の分割されたパフサ・ブロックのなか（1 点）で発見されたことの意味は大きい。最後の出土品は、寺院の主要な壁の建設中に流通していたのは、これらの［テュルゲシュ式］コインであることを示している。初期の寺院の建物の床面、そして同じく広間の柱の下で発見された上述のコインは、同じ［結論を］示している。[訳註57]

ほかの日常用品のなかでは、広間で出土した、縁部が湾曲し、中央に紐孔をともなう円形の青銅製鏡について言及しておく（図 81, 3）。これは中国製ではなく、中央アジア製の鏡である。ペンジケントの第 1 神殿で発見されたものと完全に類似しており[149]、これもまた、その当時のスイヤブとソグドの緊密な関係を証明している。そこ［広間］ではガラス製の小瓶の破片も見つかった。個人的な宝飾品としては、研磨された石のペンダント（図 92, 2）、丸くて平たい青色の練り物製のボタン（図 92, 1, 3）、練り物とガラスのビーズ、つまり、青色の表面をした縦溝をともなうもの（図 92, 16-19）[150]や白色の球状のもの（図 92, 13-15）、目玉がついたもの（図 92, 4-9）、管状のもの（図 92, 10, 12）が発見された。それらのうちの 8 点（図 92, 4-10）は、上述のテュルゲシュ式コイン、そして鈴の半分の形をした青銅製のペンダント（図 92, 11）とともに、部屋 III のパフサ・ブロックのなかで見つかった 。

寺院では、真正の中国の製品やコインは発見されなかった。

そのほかの出土品には、ゴミ穴で見つかったナイフの破片と石製で焼き物製の擦石[訳註58]に加え、小麦の種、石炭、カボチャの種、動物の骨、また財布の青銅製の留め具（部屋 V、図 81, 4）、そしてさまざまな場所で見つかった卵の殻がある。第 1 号遺構の土器については、別の論文で取り上げるべきであろう。

寺院の存続と再建の諸段階は、十分に識別可能な

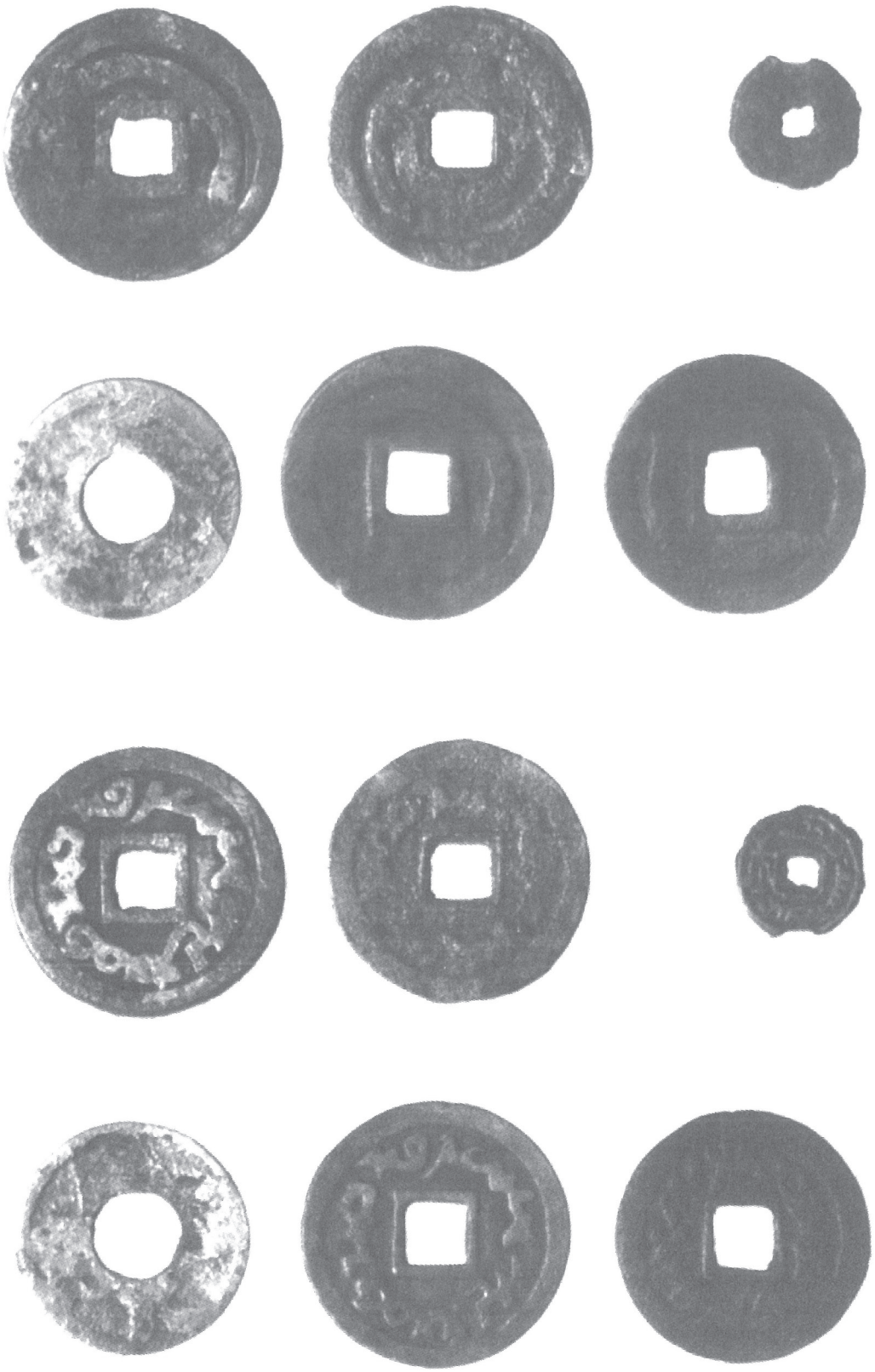
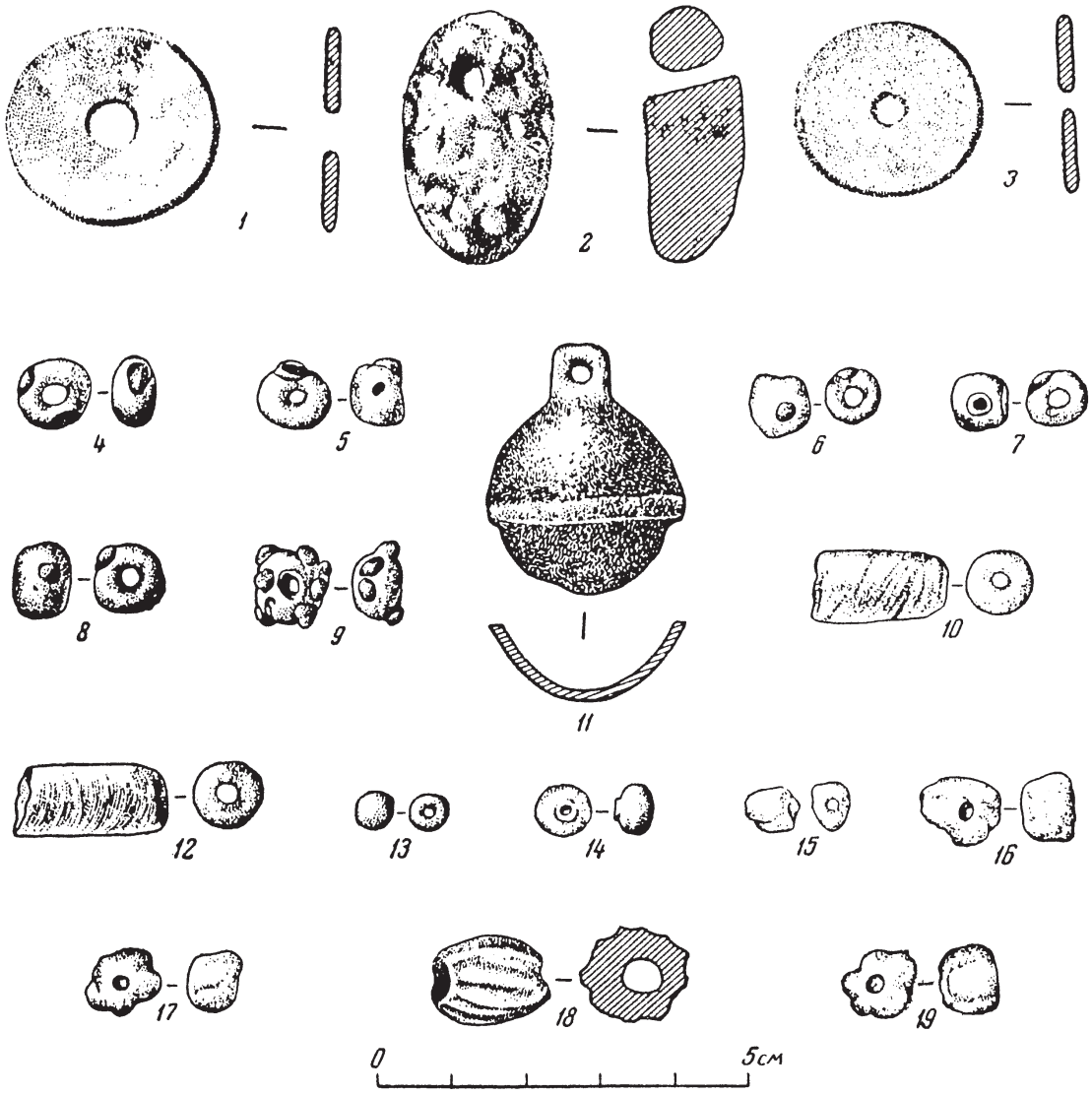


図91
仏教寺院で発見された青銅製のテュルゲシ・コイン：表面（左）および裏面（右）



【図 92】
装飾品：1, 3. ガラス製の青色ボタン（部屋 I 出土）
2. 多色斑の石製のペンダント（部屋 I 出土）　ビーズ：4. 赤色の目が付いた黒色
5. 赤色の目付いた白色　6, 7. 赤色の目が付いた緑色　8. 赤色の目が付いた黄色
9. 赤色の目が付いた灰茶色　10, 12. 緑色の練り物製　13–15. 白色
16-19. 青色の溝が付いた［ビーズ］
11. 青銅製品　4～11. 壊れた練り土・パフサブロック出土（部屋 III の北壁）
12～17. 部屋 III 出土　18～19. 中庭出土.

いくつかの土器の組成に現われている（図 93）。ここでは、寺院の下層のいくつかの例についてのみ述べる。［これらのなかには］小型の碗状のランプ（図 89, 8, 9［図 89, 6, 7 の誤植か］；94, 3, 4）、小型のランプ（図 89, 7）、注口付きの細い頸部と撚りがかけられた把手付きの白色スリップが施された水差し、加えて、偶然の発見で知られているテュルク製の銀カップを模したコップがある（図 94, 1, 2）。[151] これらすべては、おもに丁寧に水篩された胎土で作られた土器であり、非常に熟練した轆轤引きと手びねりによるものである。ソグドとシャシ［タシュケント］にいくらか類例があるが、東トルキスタンや中国そのものには［類例がなく］、土器は完全に異なっている。

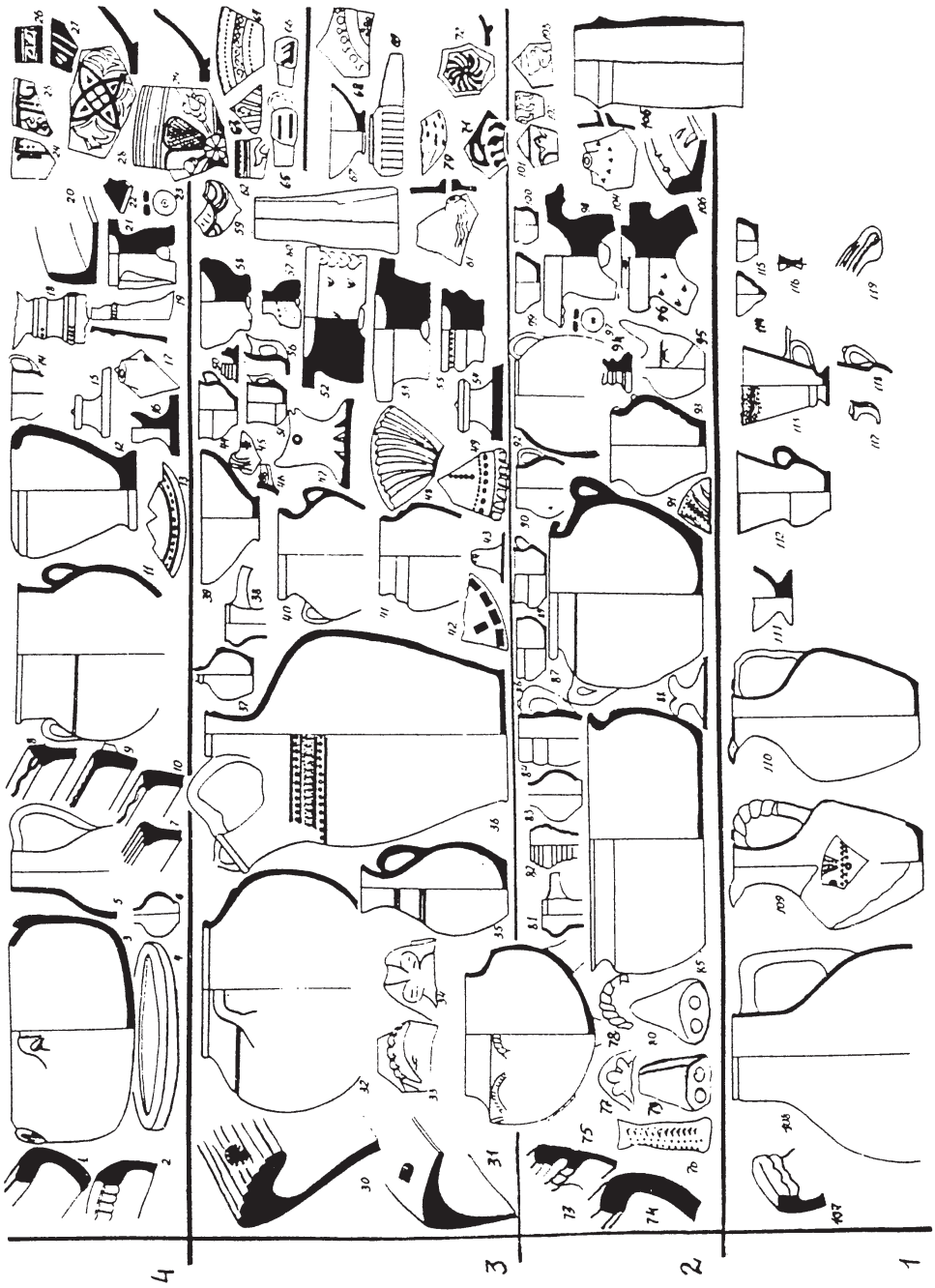


図93
第１号遺構［第１仏教寺院］の基本的な土器の型式：
1. 寺院の存在期間［寺院として機能していた期間］（第１層），８世紀前半
2. 建物の廃墟を利用していた期間，８世紀後半～９世紀初め
3. 第Ⅱ建築層の居住［の時期］，９世紀中頃～10世紀
4. 住居となる構築物をともなわない層，10～11世紀.

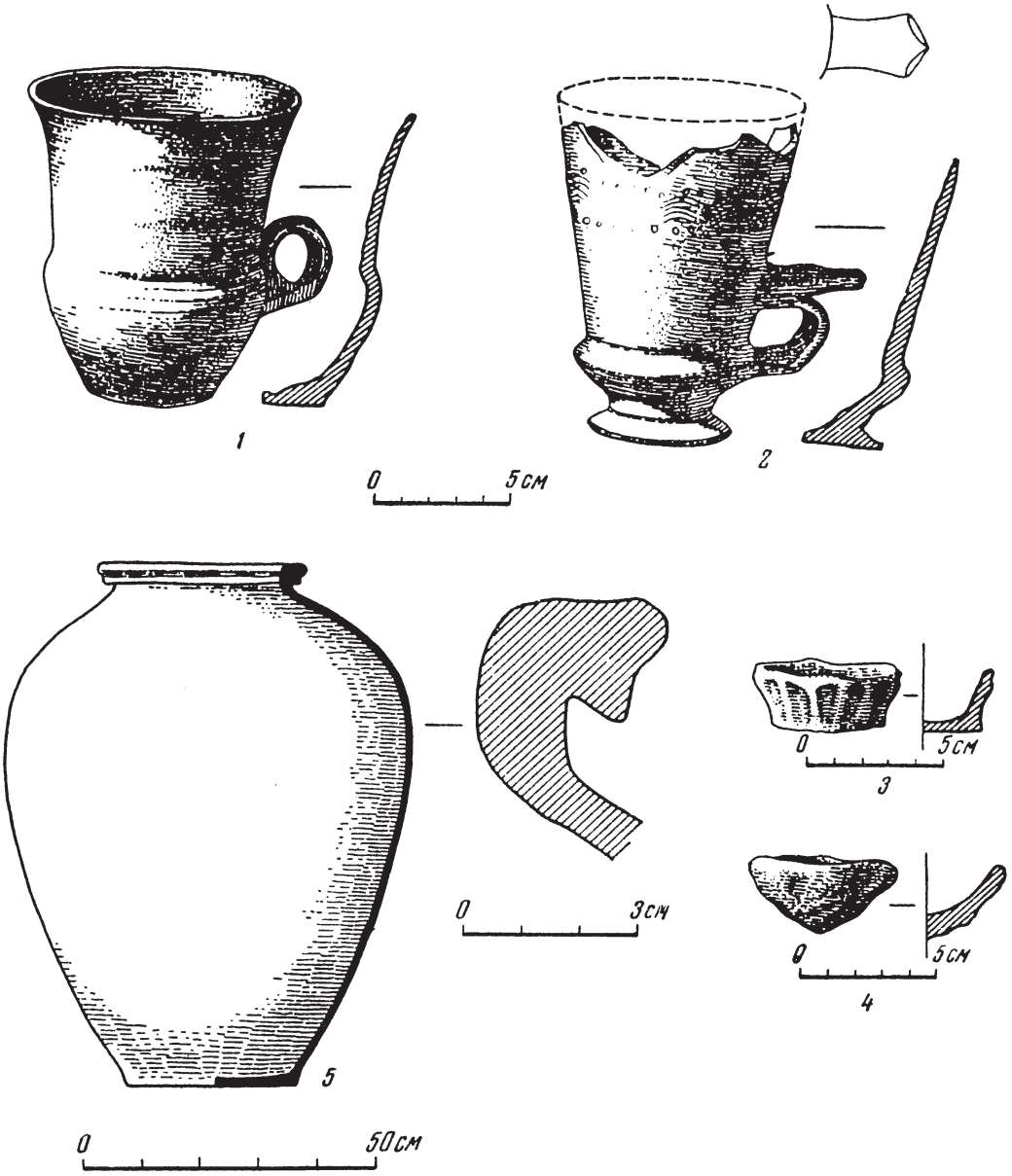


図94
寺院の下層出土の土器：1, 2. コップ　3, 4. 小型のカップ［碗］（第１層）
5. 大甕，中庭出土（第２層）.

3-10. 大雲寺

都市遺跡アク・ベシムを都市スイヤブの廃墟に比定したクローソンは、発掘された僧院の考古学的に得られた建設年代を考慮し、1960年にはじめて、これ［第1仏教寺院］は、748年に交河公主が住んでいた場所に［北庭節度使］王成見将軍が建設した大雲寺であると述べた。[152] この比定の正確さに自信があったジェラルド卿（クローソン）は、私たちが提案した第1号遺構の初期層［古い層］の年代を8世紀に変更するようにすら求めた。[153]

明らかに、この仮説は考古学的な年代推定と完全に一致するものではない。調査隊によって得られた資料に基けば、寺院の建設を8世紀半ばよりも早い時期、つまり7世紀末から8世紀初めに帰することができる。[154] この問題は、私たちの発掘調査に基づき、1979年に北京の歴史学者の張広達が行い、そののちフォルテが補足し、発展させた中国史料との新たな比較研究によって解決された。

7～8世紀の中国における官立の僧院を研究したイタリア人の研究者［フォルテ A. Forte］は、1992年に日本で研究成果を発表し、1994年にヨーロッパで、とくにアク・ベシム僧院に関する論文を発表した。彼は、750年頃にスイヤブを訪れた8世紀の著者、杜環の報告の一部となる中国語テキストとその英訳を提示した。「また、壁で囲まれた砕葉城がある。天寶7年、北庭（ビシュバリク）の軍司令官である王正見は、それを攻撃し、［それゆえ］都市の壁は破壊され、諸村の住居は廃墟となった。交河公主がかつて住んでいた場所に、大雲寺が建設され、まだ存在している」。[155]・[訳註59] この断片［的な資料］の分析は、それは明白であるにもかかわらず、研究者［の結論］は、僧院［第1仏教寺院］の建設年代を748年とすることを拒否するというものであった。

「大雲寺建設の命令は、690年12月5日に発布され、周王朝時代のみ、つまり690年から705年の間にのみ効力を持っていた」ことが明らかにされた。スイヤブは、692年12月8日の中国軍の勝利の後に回復された、いわゆる四鎮［クチャ、カシュガル、ホータン、スイヤブ］に含まれた。したがって、スイヤブにおいて大雲寺は692（693）年から705年の間にしか建立できなかった。この事実はまた、750年頃に杜環が、この僧院［大雲寺］について用いた「まだ存在している」という文言を説明するものとなるものの、その建設が748年とすると矛盾が生じる。[156]［周］帝国の首都や州にあるすべての大雲寺は、7世紀末、もしくは8世紀初めに建設された。研究に基いて、フォルテは史料の最後の文言の意味を明確にし、以下のようにそれ［その文］を分割した。「ここは、かつて交河公主が住んでいた場所である。（中国人によって砕葉に）建てられた大雲寺はまだ存在している」。[157]

私たちに知られている文献から判断する限り、アク・ベシムで発掘された仏教僧院は、上述の690年の命令によって建設されるべきであった一連の寺院群のなかでも、ほぼ唯一発見され、調査された僧院であることが明らかとなった。弥勒菩薩の化身と自らをみなした武則天［武曌］は、大雲経に導かれ、未来の世界秩序［をもたらす］この菩薩にすべての大雲寺を捧げた。これまで見てきたように、アク・ベシムの第1号遺構［第1仏教寺院］で発見された弥勒菩薩や釈迦の巨大な塑像の破片もまた、発見された寺院と大雲寺を関連付けるものとなっている（図71）。

科学者による探究の上述した物語は、考古科学が20世紀半ばまでには十分に精密な科学となり、独立した科学であることを明確に示すものである。考古学という特別な手法によって得られた成果は、歴史学者の考えを揺り動かし、杜環の報告のような、一見すると明確な記述から得られた立ち位置にも再考を迫るものである。私たちの事例はリトヴィンスキーによる完璧で、整然とした結論の基となった。つまり「考古学的な［研究の］対象の年代決定は、まずは、それに含まれる（おもに考古学的および古銭学的）資料、精緻な層序、建築的な観察および型式学に基づき行われるべきである。特定の建造物の年代決定についての外的な資料、とくに文献の取扱いに関しては、それらの批判的な研究を経たうえで、まれにしかないが、その建造物に関する確実な情報が含まれている場合のみにおもに参照することが可能である」というものである。[158]

私たちの事例では、考古学は、歴史家が単純に中国によって建設されたとみなしている僧院の建設の過程に関する具体的なデータを提供している。これまで見てきたように、建築材料と技術、全体的な設計の特徴と部分の配置、加えて建物の建築的な全体的な外観は、明確に東トルキスタンの宗教的な建築と建築の伝統と密接な関係を示しており、それゆえ、その建築にはソグドの熟練職人と建築家が直接的に

関わっていたことは疑う余地がない[159]（図 78）。仏教信仰におけるソグド的な特徴は、僧院の発掘中に発見された特定の物にも現われており、日常用品の遺物はソグド人の存在を確証している。

しかしながら、最初期において大雲寺に何人かの中国人の僧侶が居住していた可能性は否定できないものの、建物の発掘ではその状況を示す明確な物的証拠は発見されていない。これについては、20 世紀末に大雲寺の廃墟に隣接した場所で発見された記念碑的な中国の記念物［遺物］が雄弁に語っている。［つまり］碑文が刻まれた墓石の破片や杜懐宝の奉献碑文をともなう仏像の台座（682 ～ 709 年の間に制作された）、そして仏陀や菩薩、獅子や供養者が描かれた石碑である[160]・[訳註60]。

3-11．寺院の破壊および遊牧民の居住の痕跡

数多くの考古学的な事実が証明するところによれば、8 世紀の後半、あるテュルク系部族、おそらくカルルク族によって寺院は焼かれ、半壊状態となった。［この部族は］都市を攻撃し、8 世紀の後半から 9 世紀の初めには、この寺院の部屋と壁を住居として利用した。

広間や寺院のそのほかの部屋には火事の明確な痕跡がある。つまり、床に崩れ落ちた炭化した葦製の天井、回廊と祠堂の床の上の灰や炭、炭化した梁の残骸であり、また壁の支柱さえも燃えている。遊牧民は仏教徒が崇拝していた塑像を完全に破壊し、壁画を叩き落とし、寺院の道具を略奪した。しばらくの間、彼らは壁と残っていたヴォールト天井を退避用の住居として使用していた。

彼らが寺院に居住していたという事実は、以下の点から確認できる。比較的薄い最初の堆積層（壁や壁画、塑像の意図的な破壊、および火災による）の上にある、回廊における焚火の痕跡（厚さ 10cm もの炭と灰のレンズ状堆積）、祠堂における日干しレンガの破片で造られた竈、広間の床面における焚火の跡と竈、さらには、かつての壮麗な中央広間の壁に掘り込まれた鍋用の粗末な造りの竈などである（図 74）[訳註61]。とくに興味深いのは、北側のベンチに掘り込まれた、直径約 75cm、大きな円形の大鍋[訳註62]用の竈である[161]（図 67, 1）。瓦礫に掘り込まれた穴が階段を破壊している[162]（図 67, 1）。

回廊と広間の粘土造りの床は円形の樽形の穴だらけになっており、そのなかに遊牧民はおもに肉を保管していた[163]（図 66, 2, 3）。穴のなかでは、家畜の骨と遊牧民の日用品が見つかっている。回廊の西側部分の 7 つの穴（そのうちの 3 つはかつてのベンチに掘り込まれていた）のなかには、いくつかの家畜の骨と土器の胴部破片から作られたボタンしかなかった（図 95, 26）[訳註63]。広間で発見されたいくつかの穴（そのうちのもっとも新しいものである 1 つの穴は祠堂へと導く階段を破壊していた）のなかから見つかったものは以下のとおりである。1 つ目の穴では、ウシとウマの骨［複数］、ヒツジの頭蓋骨、土器の破片、孔が 2 つ穿たれたヒツジの距骨、鉄製のベルトのバックル 2 点（図 95, 1, 7）、装飾ベルトの正方形の青銅製飾り板（図 95, 5）、鉄製の板状製品、砥石の破片。2 つ目の穴では、いくつかの骨、片面が磨かれたゲーム用のヒツジの距骨、土器の破片と鉄製の小釘。そのほかの穴は空か、もしくはわずかな骨しか入っていなかった。

中庭のいくつかの地点では、遊牧民に関係する層から石と古い石臼の破片、焼成レンガ（大きさ 29 × 16 × 4、26 × 15 × 3、30 × 15 × 4.5cm）で構築されたいくつかの竈と焚火の跡が発見された。1 つの石造りの竈の付近では、片面にヤギを追いかける犬を表わすテュルクの岩絵の典型的な様式の場面が刻まれた大きくて平らな石が発見された。[164]（図 96, 5）。

テュルク系の牧畜・遊牧民が寺院に侵入し、破壊し、その後に彼らが寺院に住み着いたという事実は、この岩絵に加え、（建物における彼らの居住に関係する層から）出土したテュルク族に典型的な数多くの遊牧民の日用品によって裏付けられる。数多くのさまざまベルトのバックル（図 95, 1, 3, 6, 7, 13, 16, 17, 25, 29）、金属板付き装飾ベルトの飾り板（孔をともなう正方形や楕円形のもの、ハート形のもの、図 95, 2, 5, 10-12）、ベルトの先金［先端の金具］（図 95, 14, 18, 19）およびハート形の切り込みをもつテュルク族の典型的なベルトの吊り下げ飾り（図 95, 8, 15）、おもがい［面懸］の飾り板、革ひもを固定するための交差する 2 つの孔を持つ十字形の馬具の留金（図 95, 4, 9；96, 2-4）、腹帯の骨製締め金の破片（図 95, 25）、三翼形の鏃（図 96, 8, 9）、鉄製の鎧札、ゲーム用のヒツジの距骨（孔が穿たれ、側面が磨かれたもの）、ナイフ、砥石、孔が開けられた占い用のヒツジの肩甲骨、8 世紀の遊牧民の典型的な耳飾り（図 95, 24）、そして土器の胴部破片から作られたボタン

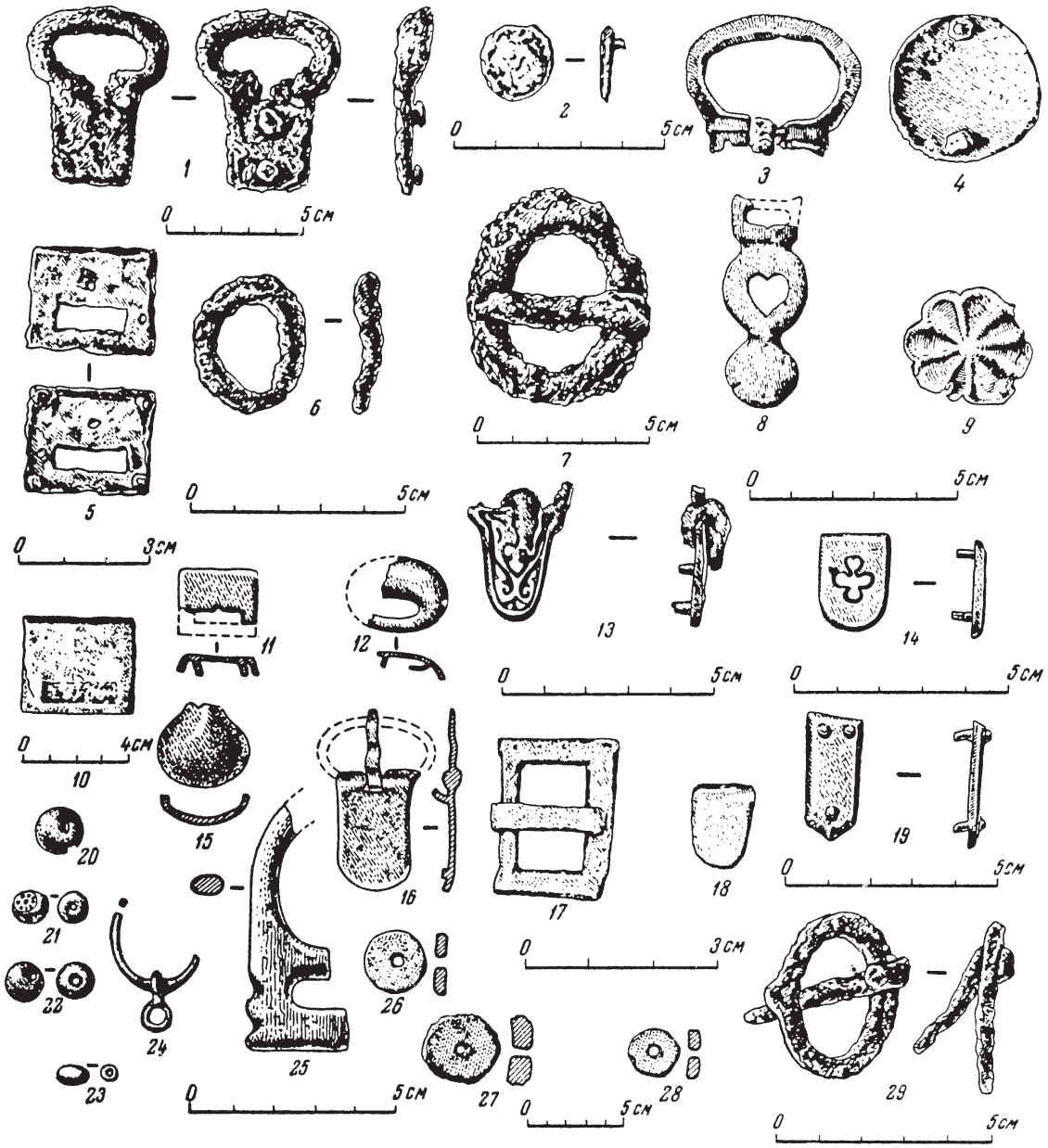


図95
第Ⅰ号遺構［第１仏教寺院］．遊牧民の遺物（８～９世紀）：
1, 3, 6, 7, 13, 16, 17, 25, 29. ベルトのバックル　10-12. 装飾ベルトの飾り板
14, 18, 19. ベルトの先金　4, 9. 馬具の飾り板［プラーク］　8, 15. ベルトの吊り下げ飾り
24. 耳飾りの破片　26-28. ボタンとビーズ　20. 白色　21. 白い目と黒い「まつ毛」をともなう緑色
22. オレンジ色　23. 青色（1, 6, 7, 29. 鉄，2-5, 8-12, 14–19, 24. 青銅，13. 青銅と鉄，25. 骨，
26–28. 土，20–23. ガラス）

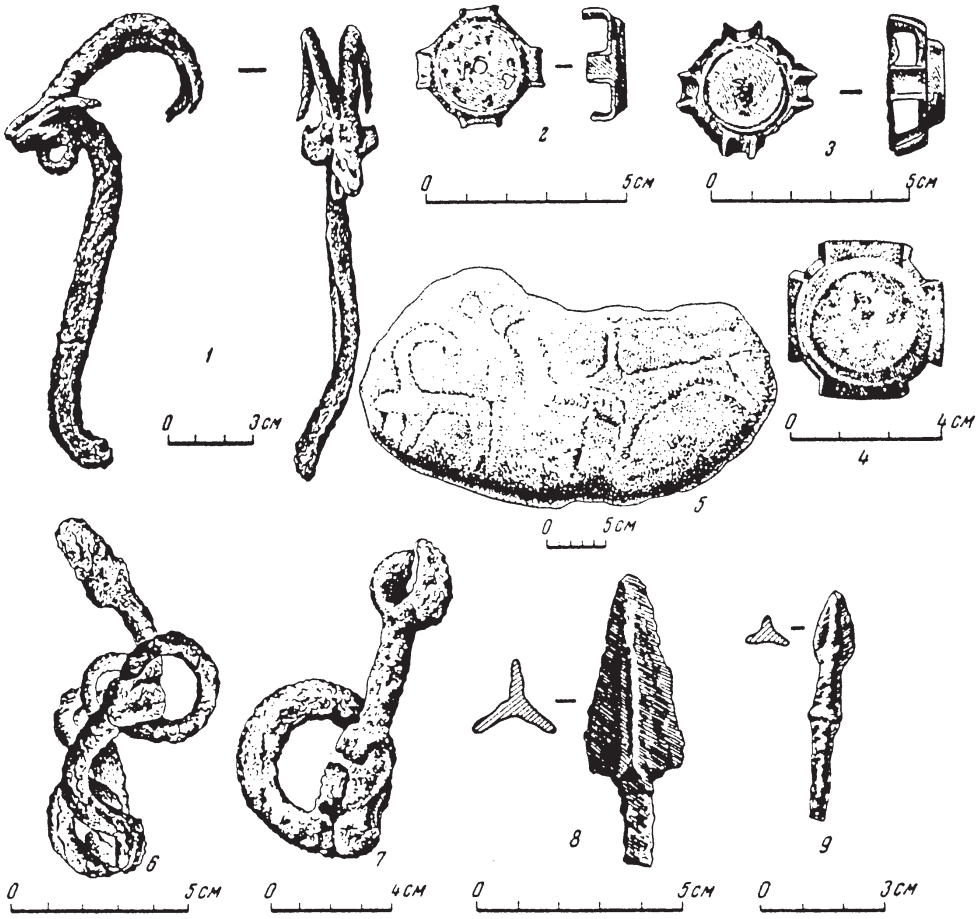


図96
遊牧民の遺物（8～9世紀）：1. 野生ヤギ［アイベックス］の頭部の形をした松明の頂部の一部
2–4. 頭絡ベルトの交差用の飾り板［プラーク］　5. 絵が描かれた礫（野生ヤギを追いかける犬の図像）
6. S字型の鏡板付きの銜　7. 銜の半分　8, 9. 鏃（1, 6–9. 鉄，2–4. 青銅，5. 石）

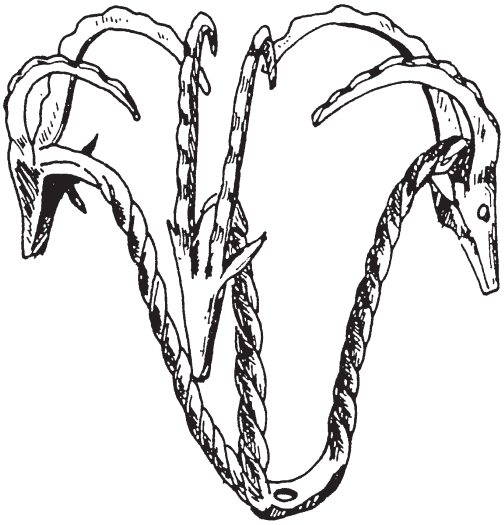


図97
タジキスタン，クーヒ・スルフ洞窟出土の松明の鉄製頂部

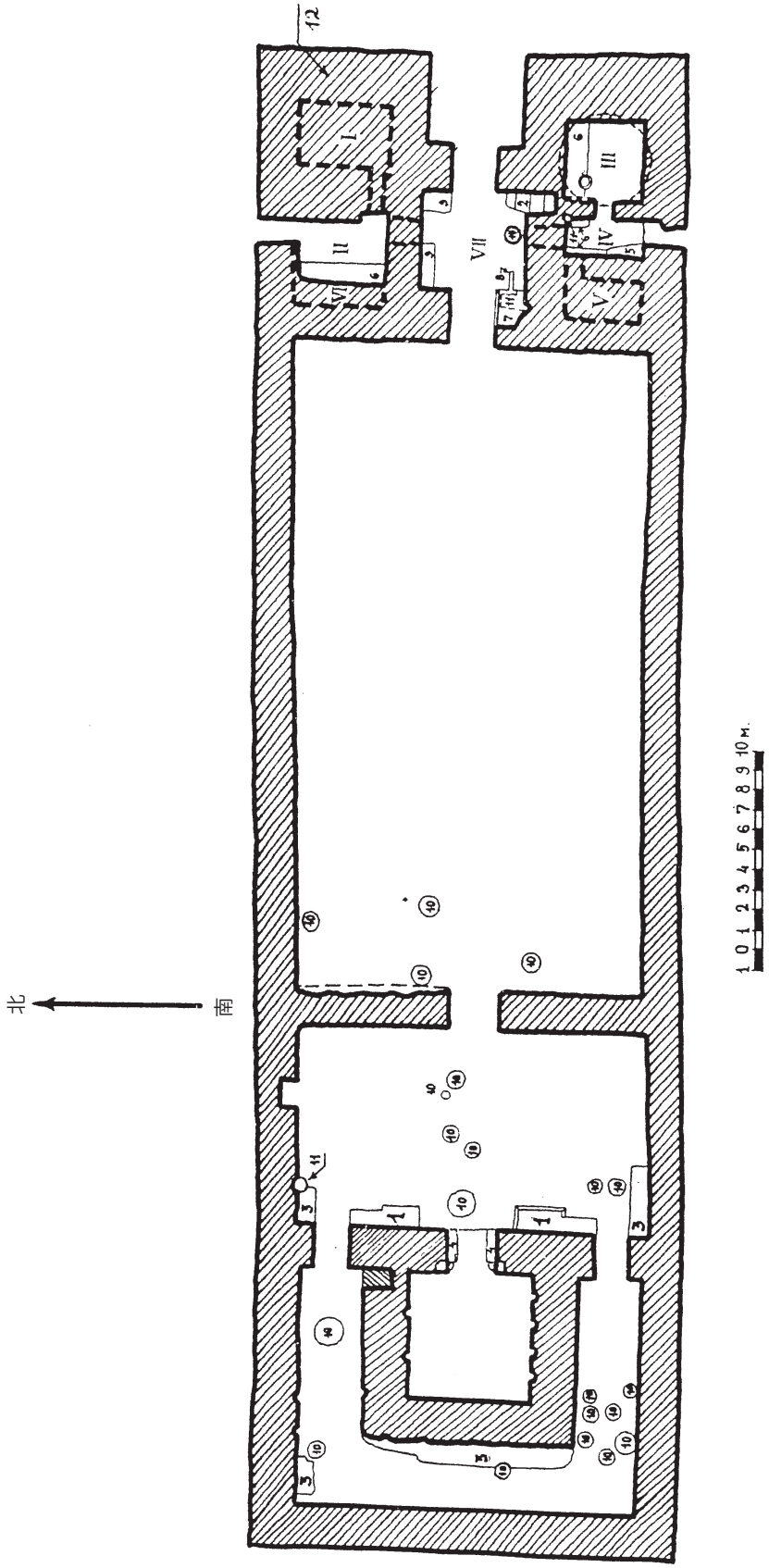


図98
遊牧民の居住時期に対応する仏教寺院址（第I号遺構）の平面図：
1. 仏像の台座　2. 階段　3. 仏像安置用のベンチ［台座］　4. 祠堂への出入りの段　5. 控え壁　6. 居住部屋のベンチ
7. ベッド［寝台］　8. 竈［火室］の仕切り壁　9.「出入り口ホール」のベンチ，竈［火室］の仕切り壁［誤植か］
10. 食料用の［貯蔵］穴［ゴミ穴］　11. 竈［火室］　12. 轡・銜の一括出土地点　I–VII. 出入り口付近の部屋

やビース（図 95, 20-23, 26-28）である。

これらのすべての遺物は8～9世紀のものである。同じ層からは、テュルゲシュ式コインや弓状タムガをともなうテュルゲシュ・コインそのものが発見された。知られているように、このコインは8世紀に発行され、9世紀になっても流通していた。年代決定に重要な出土品は、遊牧民のくつわの「蓄蔵」である。この蓄蔵は、すでに破壊されていた寺院の東壁（「門番の部屋」の壁）に上から掘り込まれた穴の中で発見された。そのなかには、9世紀の前半に年代付けられる中空になった鉄製の鋤の金具、2つのねじれた固定式のリングと3つ目の可動式のリングの2つの部品からなる銜が数点あった（図 96, 6, 7）。端部が「小型の長靴」とヘラの形をしたそれらのS字型の鏡板もこの年代を裏付けている（図 95, 6）［図 96, 6 の誤植か］。このような銜と鏡板は、キルギズスタンで初めて発見された。

端部がテケ・ヤギの頭部の形をなすS字型の棒状製品はとりわけ独創的であり、精巧な鉄製鍛造品である（図 96, 1）[165]。当初は、これを鏡板の破片とみなした[166]。しかしながら、1985年、同じく端部がヤギの頭部の形をした完品の遺物がタジキスタンのクーヒ・スルフ Кухи Сурх の洞窟で偶然に発見され、発表されて以降、この遺物の違う用途が明らかになった。発表者によって「棒の頭部」と記されているこの遺物は[167]、平らな基部、つまり中央に固定用の孔が開けられた三角形の板があり、そこから滑らかに湾曲した3本の棒が上に伸びている。アク・ベシムの出土品とは異なり、棒には撚りがかけられ、ヤギの頭のあごの下には環がないが、リブのある角が付いている（図 97）。研究者によってこの遺物の幅広い年代（5～8世紀）が示唆されているが、アク・ベシムの出土品によって［年代を］明らかにすることが可能である。とはいえ、おそらくこのような製品は非常に長く存在していたのであろう。いずれにせよ、1414～1415年の明の使節によるヘラートに関する記述におおよその共通点が見出せることから、この用途を理解することができる。「彼らはまた、動物の油を取り、〔それを〕綿花と混ぜ、塊を作り、〔それを〕鉄製の棒に付けられた鉄製の籠に入れ、歩くときには手に持ち、止まるときには地面に突き刺す。〔このようなたいまつは〕風や雨で消えない」[168]・[訳註64]。私の考えでは、クーヒ・スルフの遺物はこの「鉄製の籠」であり、アク・ベシムの出土品はこのたいまつ［鉄製の籠］の頭部の部品である。

広間で見つかった寺院の破壊後に形成された層には「遊牧民の穀物」、つまりキビも含まれている。回廊や祠堂の天井とヴォールト［天井］や壁の表面が崩落したことで、塑像や壁画、そのほかの物を覆う堆積層が部屋の床の上に形成された時期には、出入口付近の部屋でも大きな変化が生じた。

部屋Iは東壁が破壊されて塞がれた。そののち、部屋IIの北壁に新しい出入口が掘り込まれ、「出入り口ホール」への出入口が塞がれた。このようにして、完全に独立した住居ができた。同じようにして、部屋IIIと部屋IVが独立した部屋となった。出入り口ホールから部屋IVへ通じるアーチ天井の出入り口は、崩壊した寺院の壁のレンガによって塞がれた[169]（図 60, 3；98）。部屋IVへの新しい出入り口が寺院の南壁に開けられ（図 98）、その北東隅には細い煙突付きの竈が掘り込まれたことで（図 60, 4）、この部屋のヴォールト天井がひどく煤けていた。ドーム天井がまだ残っていた祠堂（部屋III）は住居に変えられた。［部屋IIIの］北壁沿いにはベンチが設置され、炉[訳註65]、そして扁平なパンを焼くための縦型のパン焼き竈が登場した。この部屋は、依然として通路であった部屋IVと繋がっていた（図 98）。最後になるが、出入り口ホールでは、中庭への出入り口の南側の門塔が壊され、そこには四角形の寝台、つまり「カン」が掘り込まれた[訳註66]。ベッドは東側に開いており、［その東側から］寝台の下には火室が掘り込まれ、壁のなかに煙突があった（図 63, 3；98）。塞がれたアーチ天井［の通路］の前には保存用の樽形の穴が掘られた。

3-12. 最後の定住居住者の痕跡

9～10世紀までには、寺院の東端、平らに整地された第I建築層の出入り口付近の部屋のうえ、そして部分的に埋もれた中庭の一部のうえに第II建築層、つまり居住区が建設された（図 53；54）。第I建築層とは異なり、壁は、崩壊した寺院の壁から取られた長形レンガを用いてきわめて雑に、かつ粗く積まれた。それと同時に、いくらか高くまで残っていた寺院の壁の一部が利用されることも多く、また、第II建築層の一部の壁と通路は、たんに堆積を掘り込んで造られることもあった。それゆえ、壁がかなり前に溶け落ちてしまっていたため、中庭の発掘調査では、このようないくつかの部屋は確認できな

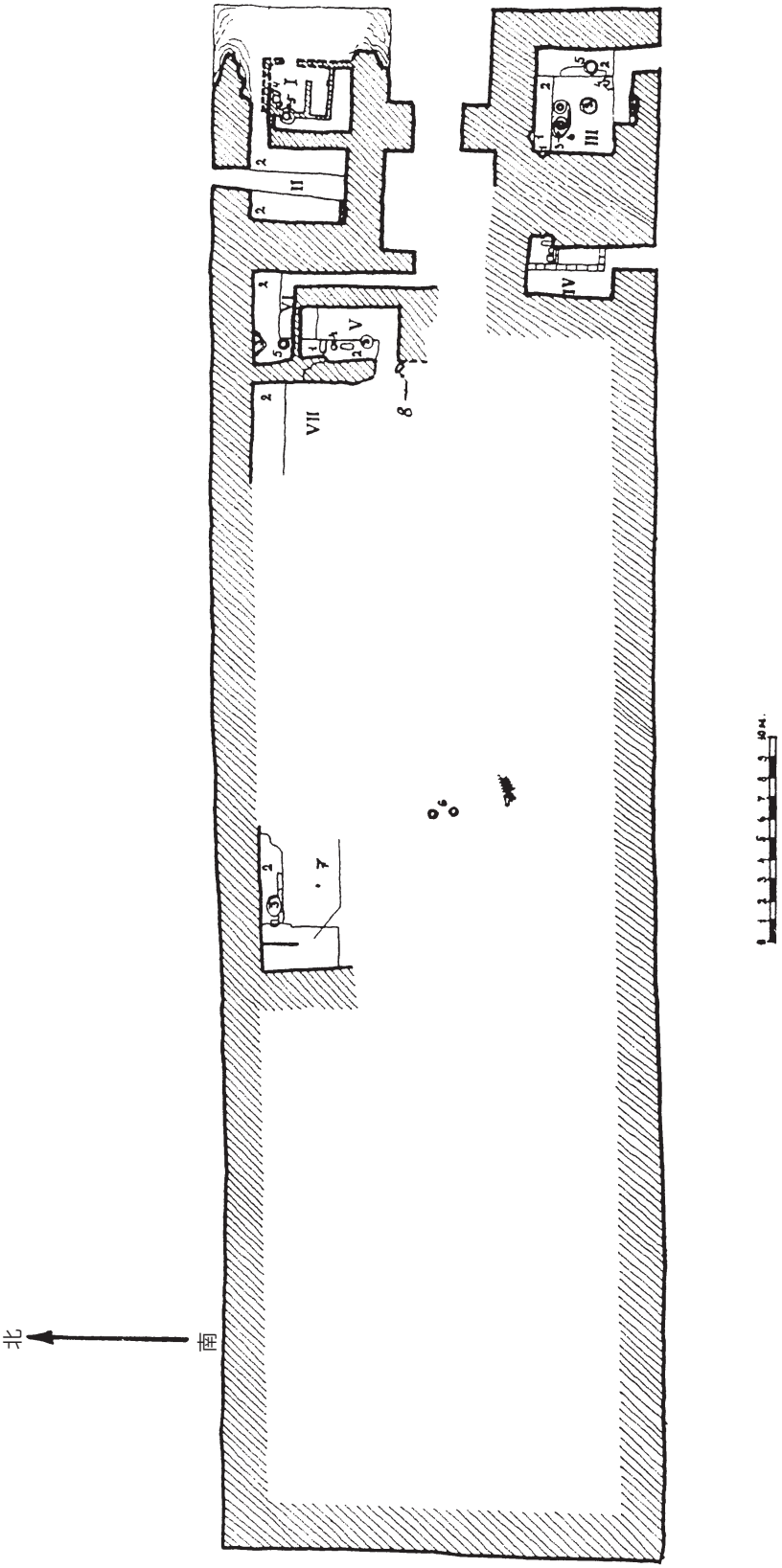


図99
廃墟の上に位置する第II期居住層に対応する仏教寺院址（第I号遺構）の平面図：
1. 竈　2. ベンチ　3. 穴　4. 暖炉　5. パン焼き竈　6. 大甕　7. 粘土プラスターが塗布された穴　8. 石臼の破片　I-VII. 出入り口付近の部屋

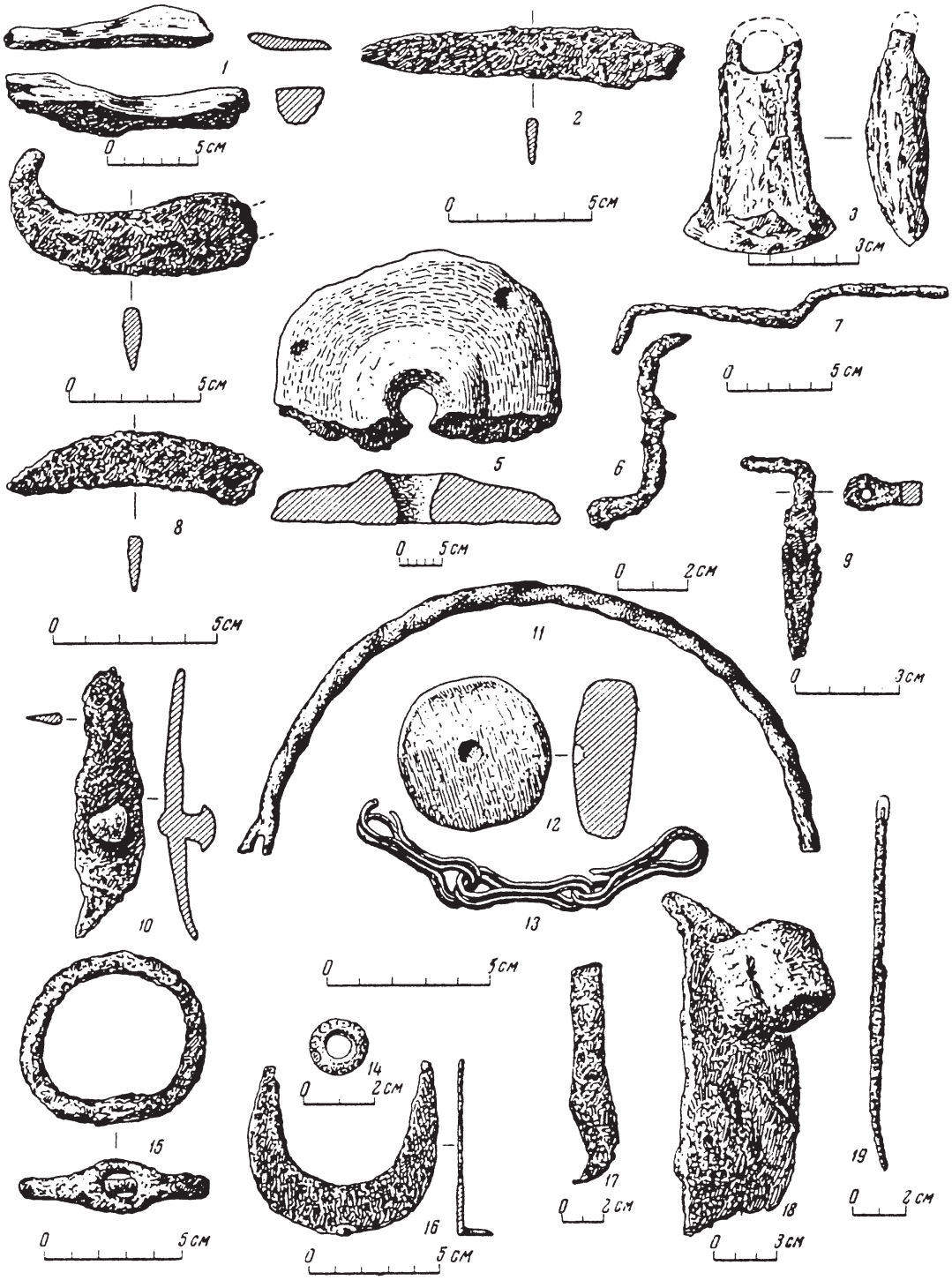


図100
第Ⅱ期居住層（9～10世紀）の遺物：1. 棒状砥石　2. ナイフ　3. 小形鍬　4. 皮革用ナイフ　5. 手動碾臼の上臼　6. 小形の鏡板（？）　7. 鍵　8, 10. 鎌の破片　9. 錠　11. バケツの把手　12. 未加工の紡錘車　13. 鎖　14. ボタン　15. 回転環・回し継ぎ手　16. 蹄鉄　17. 切削具　18. 鍋の破片　19. 馬具［製造］用の針（1, 5, 12. 石 , 2–4, 6–11, 13, 15–19. 鉄 , 14. 骨）

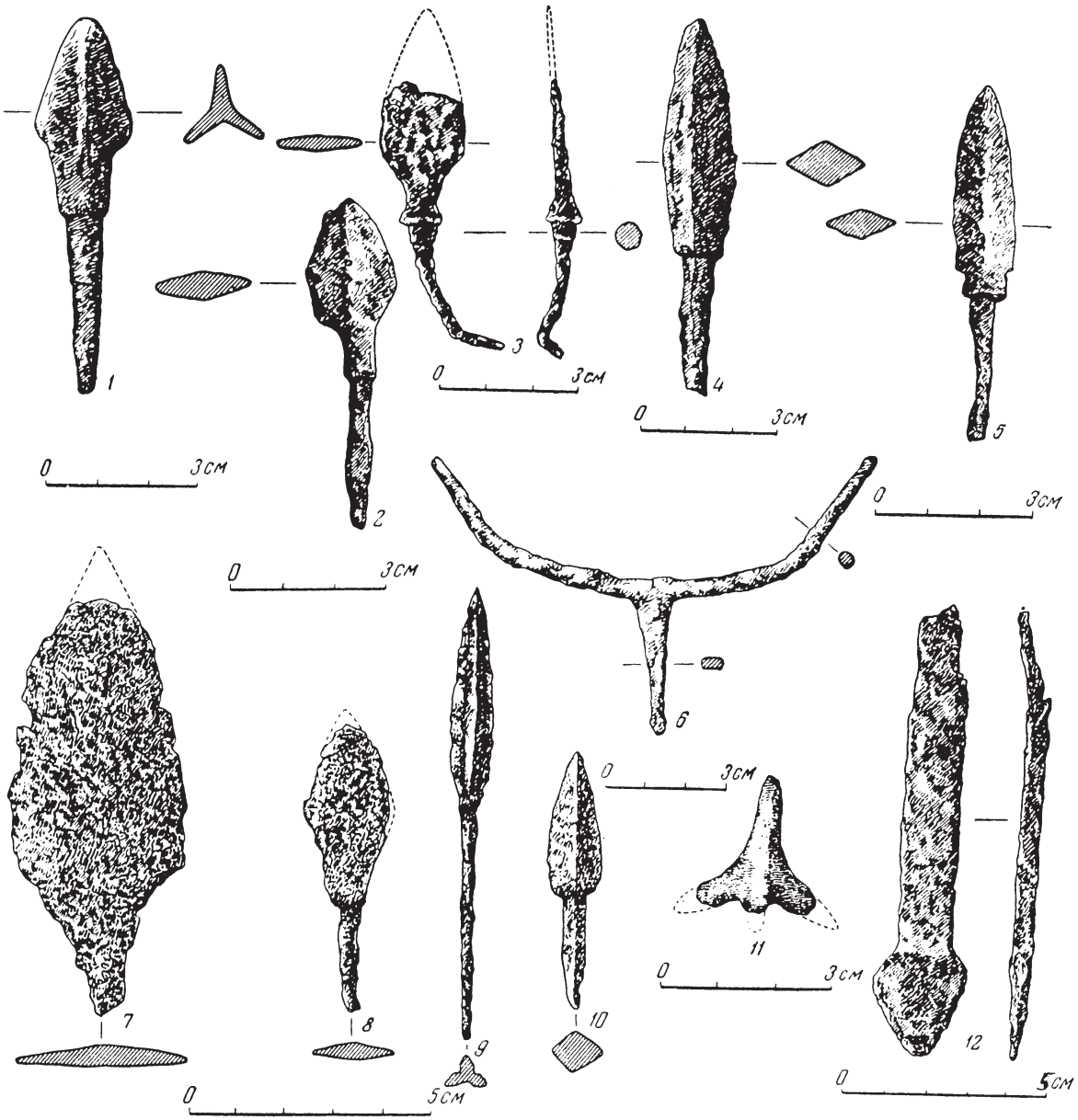
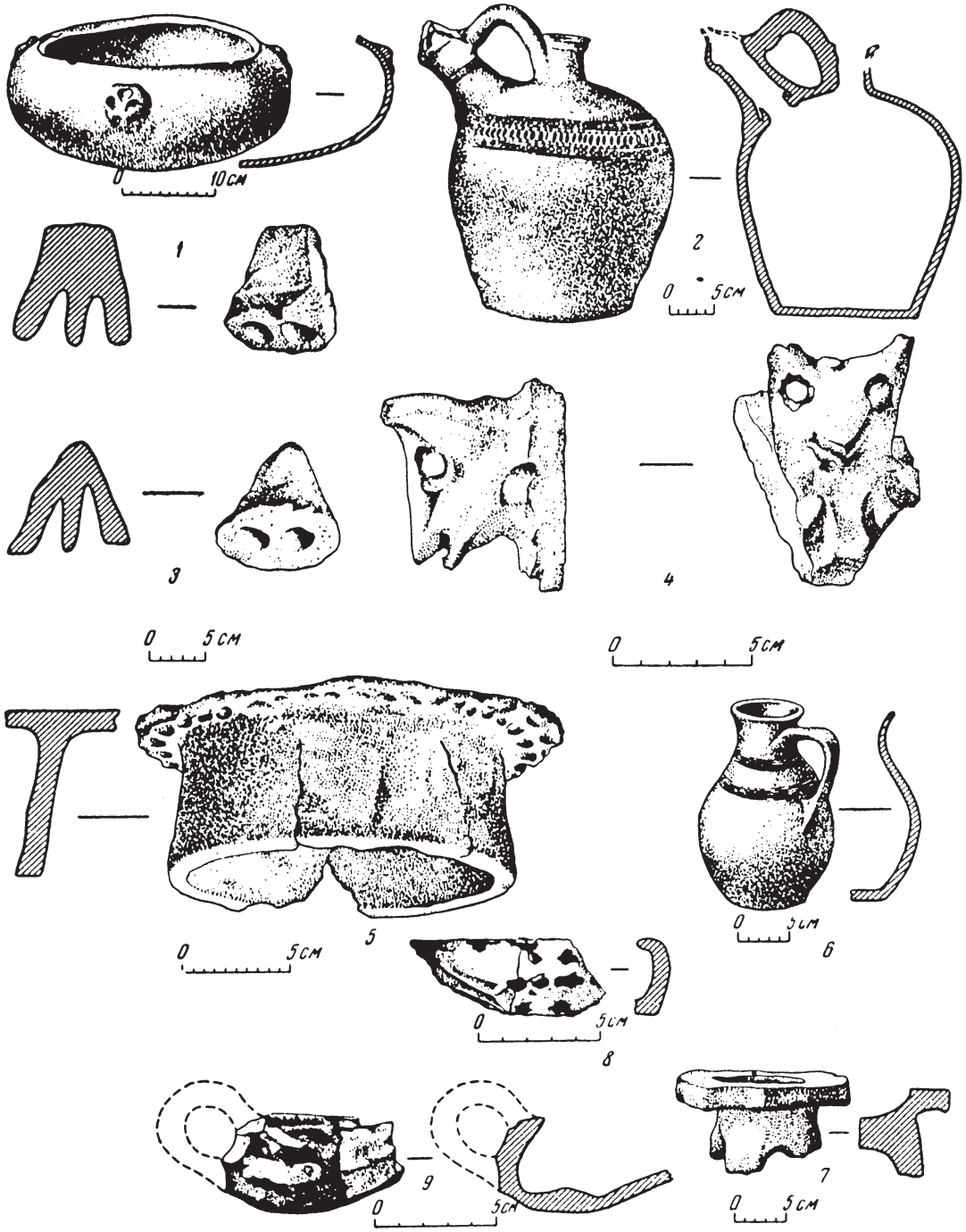


図101
第 II 期居住層における居住の破壊の時期に対応するカラハン朝のテュルク人の遺物（10〜11世紀）：
1-5, 7-10. 鏃　6. 拍車　11.「カルトロップ［撒菱］」 12. 兜の鼻当て（11. 青銅，ほかは鉄）



【図 102】
第Ⅱ期居住層の土器（9～10世紀）：1. 鍋　2. ワイン用の赤色磨研壺　3. 鍋用の支脚
4. 3つの目をもつ神話上の動物の頭部の形をした蓋の把手　5. 食台の脚　6. 水差し
7. 三脚ランプ　8–9. 施釉ランプ

かった（図 99）。

第 II 建築層に対応する回廊部分の上層では、踏み固められた粘土と焚き火の痕跡、土器、動物の骨が重なり合った層が発見された。祠堂では、同じように炭や灰溜まりをともなう「床」が見つかった。焚き火の痕跡や土器、動物の骨などによって証明されるように、おそらく、もともと広間には人が住んでいた。しかしながら、広間のほぼ全体で、おそらく［動物の］糞に由来する厚い、黄色の有機物の層が見つかっていることから、ときを経ずして、ここは厩または家畜小屋として利用されたのであろう。この層には、ワラの痕跡と動物の骨（ウマの蹄やウシの歯、ヒツジの顎骨など）が含まれていた。ここでは、小さな鉄製の蹄鉄[170]（図 100, 16）、鏃（図 101, 4）、釘とビーズが発見された。

中庭の第 II 建築層（発掘区 7 a、8 a）の表面では、土の中に埋められた 2 つの大甕（図 95, 5；99, 6）、そしてその近くでロバの骨格全体が発見された（図 99）。中庭の北西の隅では、堆積土のなかに掘り込まれた用途不明の長方形の穴（2.3 × 3.8m）（図 55, a；99, 3）が見つかっているが、これも同時期のものである。［その穴の］側面は、焼けたプラスター層で覆われていた。穴の底には、炭溜まりをともなう灰層があり、覆土には大きさ 29 × 14 × 4.5cm の半焼けのレンガと焼成レンガ、焼き物のスラグが含まれていた。プラスター層を取り除いたところ、穴の西側と東側の側面では、堆積土のなかに細長い穴が切り込まれており、ある種の日干しレンガ積みが設置されていることが明らかとなった[171]（図 55, a）。これらの穴は向かい合って配置されていたことから、穴を横切るように日干しレンガ造りのアーチが架けられていた可能性がある。多分、レンガ焼用の窯であろう。

中庭の北壁沿いの発掘区 7 と 8 では、おそらくいくつかの上層の部屋が配置されていたが、壁は溶けて崩れていた。そこでは、炭で満たされたいくつかの穴が見つかっている。［これらは］竈の痕跡で、手動の碾臼の石臼の破片（図 55, 6［b］）、動物の骨、土器の破片、焼き物製の食台の脚（図 102, 5）が見つかっている。

もっとも残りが良かったのは、かつての寺院の東端に位置していた第 II 建築層の 7 つの部屋である（図 99）。北壁沿いには 5 つの部屋（I、II、V、VI、VII）があり、第 I 建築層の古い部屋のうえ（部屋 I、II、VI）、中庭の北東隅のうえ［部屋 V、VII］、そして南側［古い部屋］のうえに 2 つの部屋（III、IV）があった。後者のうち、南側からの出入り口をともなう部屋は、かつての部屋 V の上に位置しており、北側、東側と南側の壁はかつてのままであったが（図 99）、西壁だけはかつての壁の上から大きく西側に移されたため、部屋はかなり広くなっている。

最終的には、部屋 III のドーム［天井］はその当時にすでに崩落していたものの、人はそこに住み続けており、おそらく平屋根に代えていた。ヴォールトが崩落したかつての部屋 IV はすでに埋もれていたので、南壁に部屋 III への出入り口を掘り込み、さらにそこに 2 つの壁龕を造り、壁龕の底部に焼成レンガ（大きさ 30 × 26 × 4，29 × 15 × 4，26 × 14 × 3.5cm）を敷いた[172]（図 55, в［v］；99）。床には穴が掘られており、そこに立っていた 2 つの大甕の痕跡が残っていた（図 99）。ここで、四角形の焼成レンガ（32 × 10 × 4、20 × 13 × 4 ～ 6cm）が第 II 建築層のほかの部屋でも見つかっている点について言及しておくべきであろう。たとえば、暖炉はそれ［焼成レンガ］を用いて造られている（図 54，в［v］）。かつての「出入り口付近の部屋」の上に位置する部屋 I は、鍋用の竈（直径 33cm、高さ 31cm、側壁の厚さ 13cm）とパン焼き竈（直径 84cm、高さ 73cm、側壁の厚さ 14cm）をともなう台所[173]（図 99, 4, 5）と倉庫とに分けられた。これらの部屋は、居住用の部屋 II と特別な出入口で繋がっており、［部屋 II は］2 つのベンチをともない、狭い通路（幅 1.1m）で仕切られていた（図 54, 6［b］；99）。

これらの部屋には、ベンチや大きな縦型のパン焼き竈（部屋 IV のパン焼き竈は、底を壊した大甕で造られている）[174]（図 99）、暖炉や数多くの小さな鍋用の壁暖炉風の竈[訳註67]があった[175]（図 63）。民族誌から見て［これらの部屋の］住居としての性格は明らかであり、定住するテュルク系の一般的な住民の冬の住居といえる。

これらの居住者の生業が農耕的な性格［側面］を持っていたことは、一対の石臼からなる手動の碾臼（図 73, 4, 5；100, 5）、鉄製鎌の破片[176]（図 100, 8, 10）（部屋 III）、チョト型式の鉄製鍬[訳註68]（図 100, 3）、アンズやウリ、さらには部屋 III の後代の粗いプラスター（第 II 建築層）のなかに含まれるムギの種といった出土品によって明らかである。数多くの家畜の骨（ツァ

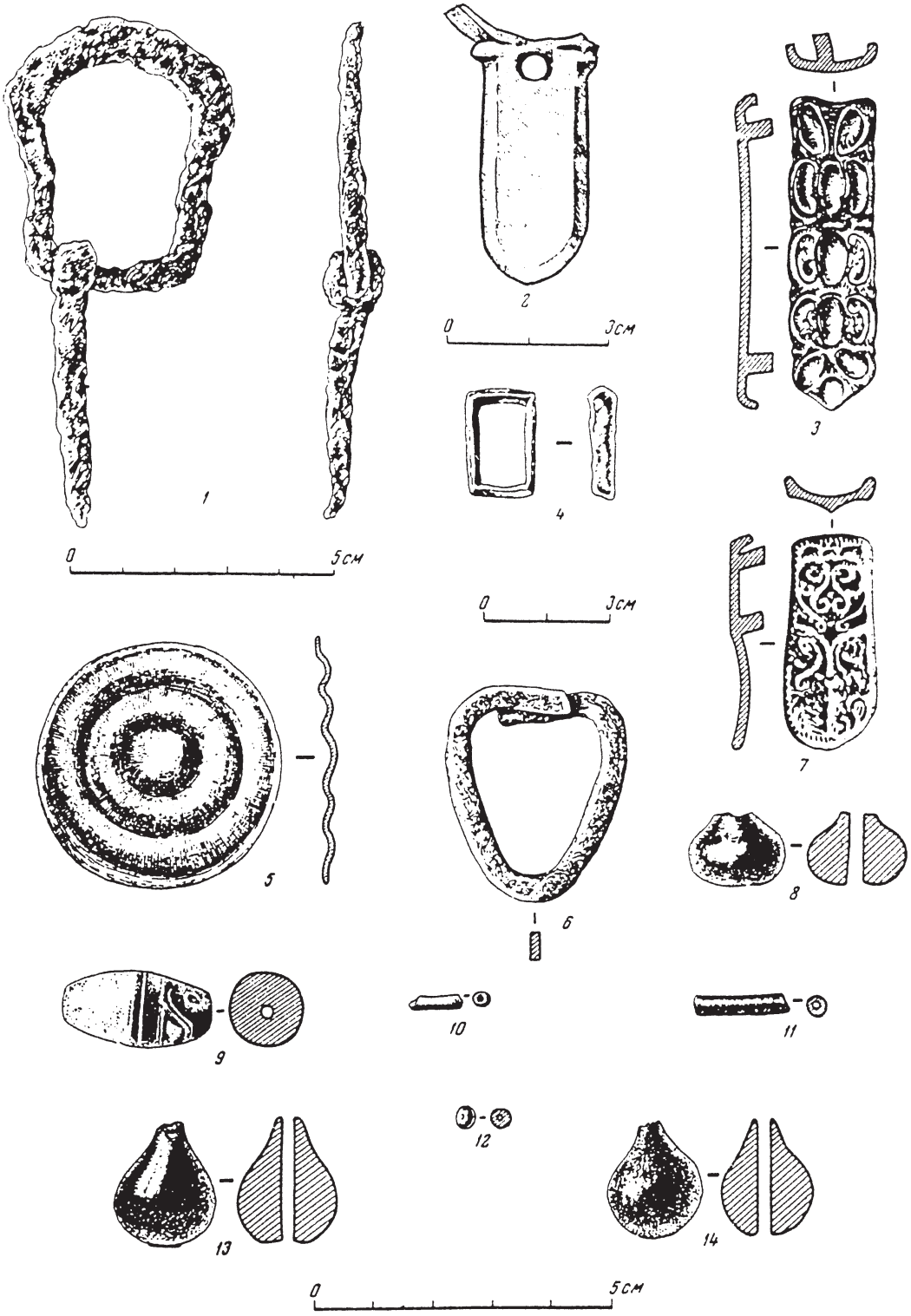


図103
第Ⅱ期居住層の遺物（9〜10世紀）：
1, 2, 6. ベルトのバックル　3, 7. ベルトの先金　4. ベルトの遊革・定革　5. 彫刻が施された飾り板
8–14. ビーズとトンボ玉（1–6. 鉄，2–4, 7. 青銅，5. 角，8, 13, 14. 黒色練り物，9. メノウ，
10–19. 青色ガラス）

ルキン В.И. Цалкин の同定によれば、大型と小型の家畜[訳註69]、ラクダ、ウマ、ロバ、イヌの骨が見つかっている）だけでなく、広間に設けられた家畜囲い（上層）は、寺院址の後代の住居の居住者が家畜を飼っていたことを証明している（図 99）。それに加えて、ここではアジアノロバ кулан、サイガ сайга、シカ、キツネ、さらには鳥や魚の骨が発見されており[177]、よく知られているように、補助的な生業として狩猟と漁労が重要であったことを示している。上述の道具に加えて、皮革を切るための湾曲した鉄製ナイフ（図 100, 4）[訳註70]、馬具職人用の鉄製針（図 100, 19）、動物の第二・四中手・足骨[訳註71]から作られた骨製錐、さらには薪割り用の鉄製斧[訳註72]の破片、木材彫刻（おそらく食器）用の切削具（図 100, 17）、通常の柄付き鉄製ナイフ（図 100, 2）と粘板岩製の砥石（100, 1）があった。

そのほかの日用品としては、とくに、中世時代には一般的であった型式の錠のシリンダというめずらしい遺物（図 100, 9）、鉄製鍵（図 100, 7）、大型の鉄製環の鎖の一部（図 100, 13）、未加工の石製紡錘車（図 100, 12）、数多くの鉄製釘や鋲、犬釘を取り挙げておく。銀アマルガムを含むガラス製鏡の破片、そしてガラス容器の破片も見つかっている。数多くの土器も発見された。土製鍋用の円錐形の支脚（図 102, 1, 3）、ランプ（図 102, 8, 9）、手びねりやろくろ成型のさまざまな器（とりわけ丸底の鍋が多い）、蓋、9 ～ 10 世紀の施釉ランプ（図 102, 1, 9）。そのほかにも、鉄製の鍋の破片が発見されており、そのうちの 1 点には竈の上に掛けるための大型の鉤が付いており（図 100, 18）、またおそらく鍋かバケツ用の捻じった鉄製の把手も見つかっている（図 100, 11）。

個人の装身具としては、9 ～ 10 世紀に典型的な鉄製と青銅製のベルトのバックル（図 103, 1, 2, 6）、鉄製と青銅製のベルトの先金（後者は、豊かな植物文で装飾が施されている、図 103, 3, 7）、鞘の青銅製鯉口[訳註73]（図 103, 4）、彫刻が施された骨製ボタンと土［焼き物］製ボタン（図 100, 14）、そのほかには、さまざまなガラス製やペースト製、メノウ製のビーズとトンボ玉（図 103, 11, 11, 12）[訳註74]が発見された。なかでも、黒色の洋ナシ形のペースト製の吊り下げビーズ（図 103, 8, 9, 13, 14）は注目に価する。また、巧妙に彫刻された角の飾り板も興味深い（図 103, 5）。

馬具としては、小型の S 字形鏡板、回転式環[訳註75]と小さな鉄製環のみである（図 100, 6, 15）。

上述の遺物の型式分析と層序のデータ（8 世紀と 8 ～ 9 世紀に年代付けられる層のうえの住居が建設されていること）に基づいて推定される年代に加え、前述したように、第 II 建築層では 9 世紀にも流通していたテュルゲシュ・コインが出土したことを指摘することができる。

鉄製の鏃（図 101, 1–5, 7–10）、鉄製の鎧札、兜の鼻当て（図 101, 12）、鉄製の拍車（図 101, 6）[178]、細い受け口をもつ槍の穂先、そして騎兵と戦うことを目的にしたもの、つまり 4 つの尖った端部をもつ青銅製カルトロップ［まきびし］（図 101, 12）などの多数の遺物は 10 世紀（おもに第 II 建築層の住居の崩壊の始まりに関連する層）に関係付けられる。鉄製の鏃については、すべて典型的な 9 ～ 11 世紀の型式である。のかつぎ［箆被］（鏃身となかご［茎］を分ける出っ張り）をもつ有茎式鏃、細くて長い四角錐（断面が菱形）の鏃、三角錐（断面が三角形）の鏃、シンプル化された平根の鏃とほぼ菱形の鏃、翼が鏃身の上部に付いている三翼式鏃 1 点である（図 101, 1–5, 7–10）。

上述の武器の出土品によって証明されているように、軍事攻撃によって第 II 建築層の建物が破壊されて以後、11 世紀には丘の上における住居やその他の建物はなかった。溶けて崩壊した中庭の 1 か所だけ、盥状の窪みにゴミが捨てられていた。灰とカラハン朝時代の施釉土器の破片があり、さらに誰かが 11 世紀第 2 四半世紀および中頃の銅製のカラハン朝のコイン 76 枚が入った革製の巾着を穴のなかに隠した[179]・[訳註76]。この蓄蔵コイン［一括出土コイン］は、第 10 発掘区（かつての中庭の北壁の付近）で、発掘調査中に丘の薄い表土層の下で発見された。その頃までには、丘の外観は、発掘調査を始める前に私たちが見たものとほぼ同じになっていた（図 51）。もちろん、それ以降も、同じように表土層の下で見つかった現代の鋤の破片も含め、定期的に土器や単発で偶発的なものが丘に落とされることとなった。

註

1）名称［アク・ベシム］は、現代キルギズ語の発音および調査当時の公式な典拠に基づいてつけられてものである。これまでの研究者は「アク・ピシン Ак-Пишин」と記していた。

2）調査のおもな成果は発表され、本章の基となっている。以下を参照のこと：Кызласов Л.Р. Работы Чуйского археологического отряда в 1953-1954 гг. // КСИЭ, 1957, XXVI. С. 88-96［L.R. クズラソフ「1953～1954 年度のチュイ考古学隊の調査活動」『KSIE（Краткие сообщения Института этнографии АН СССР ソ連科学アカデミー・民族誌学研究所概報）』1957, 26 号 , pp.88-96］；同上 Остатки замка VI-VII вв. на городище Ак-Бешим // СА, 1958, №. 3. С. 152-161「都市遺跡アク・ベシムの 6 ～ 7 世紀の城の遺構」『SA（Советская археология ソヴィエト考古学）』1958, 3 号 , pp.152-161］；同上 Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-1954 гг. // ТККАЭ. 1959, т. 11. С. 155-241（о составе отряда см. с. 157, примеч. 6）［「1953 ～ 1954 年度の都市遺跡アク・ベシム遺跡の考古学調査」『TKKAE（Труды Киргизской комплексной археолого-этнографической экспедиции キルギズ考古学・民族誌学総合調査団報告）』1959, 11 巻 , pp.155-241］（調査隊の構成については , p.157 の註 6 を参照）。

1953 年の発掘調査の概報についてはすでに出版されている：Кызласов Л.Р. Раскопки древнего Баласагуна // ВМУ, 1953, №. 11. С. 159-160（заметка）［L.R. クズラソフ「古代バラサグンの発掘調査」『VMU（Вестник Московского университета モスクワ大学紀要）』, 1953, 11 号 , pp.159-160（エッセイ）］；СЭ, 1954, №. 3. С. 90（хроника о докладе Л.Р. Кызласова）［『SE（Советская этнография ソヴィエト民族誌学）』, 1954, 3 号 , p.90（L.R. クズラソフの発表について雑報）］；Окладников А.П. Археологические исследования в Киргизии// Вестник АН СССР, 1954, №. 9. С. 50-55［A.P. オクラドニコフ「キルギズの考古学調査」『ソ連科学アカデミー通報』, 1954, 9 号 , pp.50-55］；同上 Работы Киргизской комплексной археолого-этнографичсской экспедиции в 1953 г. // СЭ. 1954, №. 2. С. 153-155［「1953 年のキルギズ考古学・民族誌学総合調査団の活動」『SE（ソヴィエト民族誌学）』, 1954, 2 号 , pp.153-155］。

3）Бартольд В.В. Отчет о поездке в Среднюю Азию с научной целью в 1893-1894 гг. // Записки АН. Серия VIII, т. 1, №. 4. СПб., 1897. С. 39-40［V.V. バルトルド「学術的な目的に基づく 1893 ～ 1894 年の中央アジアへの旅行報告」『科学アカデミー紀要』第 8 シリーズ , 1 巻 , 4 号 , サンクトペテルブルグ , 1897, pp.39-40］；同上、К вопросу об языках согдийском и тохарском// Иран. Т. 1. 1926. С. 36［「ソグド語およびトハラ語の問題について」『イラン』1 巻 , 1926, p.36］と比較。

4）Известия Средазкомстариса. Таш., 1928, вып. III. С. 271［『中央アジア芸術・古代遺産保護委員会通報』, タシュケント , 1928, 3 号 , p.271］。

5）Тереножкин А.И. Археологические разведки по реке Чу в 1929 г. // ПИДО. 1935, №. 5-6. С. 148, 149. Рис. 20.［A.I. テレノーシュキン「1929 年のチュー川沿いの考古学探査」『PIDO（Проблемы истории докапиталистических обществ 資本主義以前の社会の歴史の諸問題）』, 1935, 5-6 号 , pp.148, 149, 図 20.］。

6）調査隊の活動の成果については以下を参照：ТСАЭ «Чуйская долина»// МИА. №. 14. М.-Л., 1950; предварительная публикация［TSAE（Труды семиреченской археологической экспедиции セミレーチエ考古学調査隊報告集）『チュー川流域』MIA（Материалы и исследования по археологии СССР ソ連考古学の資料と研究）, 14 号 , モスクワ－レニングラード , 1950 年）］；概報は Бернштам А.Н. Археологический очерк Северной Киргизии. Фрунзе, 1941［A.N. ベルンシュタム「キルギズ北部の考古学概論」フルンゼ , 1941］。

7）Кызласов Л.Р. Раскопки древнего Баласагуна［L.R. クズラソフ「古代バラサグンの発掘調査」］。

8）コインのリストおよび基本的な情報は以下の補遺に記されている。遺物は国立エルミタージュの古銭部門に保管されている。コインの同定はスミルノヴァ О.И. Смирнова、パンクラトヴ Б.И. Панкратов、ダヴィドヴィチ Е.А. Давидович によって行われた。都市遺跡において新たに発見されたコイン資料について以下を参照のこと：Камышев А.М. Подъемный нумизматический материал с Ак-Бешимского городища // Суяб, Ак-Бешим. СПб., 2002. С. 157-166［A.M. カミシェフ「都市遺跡アク・ベシムで採集されたコイン資料」『スイヤブ , アク・ベシム』サンクトペテルブルグ , 2002, pp.157-166］（著者は、不当にも、初期［より古い時代］に発行されたコインが後世にも流通していたことを考慮に入れていない）；Лившиц В.А. Надписи на монетах с городища Ак-Бешим // Там же. С. 167-169［V.A. リフシツ「都市遺跡アク・ベシム出土のコインの銘」同上書 , pp.167-169］。

9）Бернштам А.Н. Тюргешские монеты// ТОВЭ. Т. II. 1940［A.N. ベルンシュタム「テュルゲシュのコイン」『TOVE（Труды отдела Востока Государственного Эрмитажа 国立エルミタージュ東洋部門論文集）2 巻 , 1940］：Новый тип тюргешских монет// Тюркологический сборник. Вып. 1. М.-Л., 1951［「テュルゲシュ・コインの新タイプ」『テュルク学論文集』1 号 , モスクワ－レニングラード , 1951］。

10）Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. Монеты из раскопок городища Ак-Бешим（Киргизская ССР）в 1953-54 гг. // Ученые записки Института востоковедения АН СССР. М.-Л., 1958. Т. XVI. С. 514-561［L.R. クズラソフ , O.I. スミルノヴァ , A.M. シェルバク「1953～1954

年のアク・ベシム遺跡の発掘調査中に発見されたコイン（キルギズ・ソヴィエト社会主義共和国）」『ソ連科学アカデミー東洋学研究所の学術紀要）』モスクワ－レニングラード , 1958, 16 巻 , pp.514-561］；Смирнова О.И. К вопросу о языке легенд на тюргешских монетах// Тюркологические исследования. М.-Л., 163［O.I. スミルノヴァ「テュルゲシュ・コインの銘の言語の問題に関して」『テュルク学研究』モスクワ－レニングラード , p.163］；同上 Сводный каталог согдийских монет. Бронза. М., 1981. С. 398-405［『ソグドコインの総合カタログ. ブロンズ〔コイン〕』モスクワ , 1981, pp.398-405］。詳しい研究は［以下を］参照：Кызласов Л.Р. Культурные взаимосвязи тюрков и иранцев в VI-XIII вв.（язык, письменность, религия）// ЭО. 2004, №.6［L.R. クズラソフ「6 ～ 8 世紀のテュルク人とイラン人の文化交流（言語 , 文字体系 , 宗教）」『EO（Этнографическое обозрение 民族誌学評論）』2004, 6 号〔pp.3-13〕］。

11）ベルンシュタムによる仏教小礼拝堂［第 0 仏教寺院］および僧院の発掘調査の際に発見され , その当時は 12 世紀に年代付けられた資料を再検討することによって、これらの建物は、ほかのアク・ベシム遺跡の遺構と同じように 10 世紀より新しくないものであるが明らかとなった。カラハン朝のコインや土器の遺物は、遺構の壁が後世に用いられたことを証明しているだけであり、主たる年代資料は、そこで発見されたテュルゲシュ・コインに基づいている。中国式の瓦に関しては、［これらの瓦は］唐代のものであり、私たちは、第 I、II、IV 号遺構の 8 世紀、8 ～ 9 世紀、そして 10 世紀の層のなかでその破片を発見した。モンゴリアの突厥可汗と高官たちの記念碑的な寺院から出土した 8 世紀の類似した瓦を参照（Северная Монголия. Вып. 2. Л., 1927. С. 39-41, 78. Рис. 10［『北モンゴリア』2 号 , レニングラード , 1927, pp.39-41, 78, 図 10］）。なお、最後の論文では、ベルンシュタムは仏教小礼拝堂［寺院］を 9 ～ 10 世紀に属するものとした（По следам древних культур. От Волги до Тихого океана. М., 1954. С. 295［『古代文化の痕跡を追う. ヴォルガ川から太平洋まで』モスクワ , 1954, p.295］を参照）。

12）Волин С. Сведения арабских источников IX-XVI вв. // Новые материалы по древней и средневековой истории Казахстана. А.-А., 1960［S. ヴォリン「9 ～ 16 世紀のアラブ史書の情報」『カザフスタンの古代および中世の歴史の最新資料』アルマトイ , 1960〔pp.72-92〕］。

13）Мухлисов Ю. Некоторые данные к биографии Юсупа Хас Хаджипа Баласагуни // Известия АН Казахской ССР. Серия общественных наук. Вып. 3. А.-А., 1971. С. 72［U. ムフリソフ「ユースフ・ハーッス・ハージブ・バラーサーグーンの伝記に関するいくつかのデータ」『カザフ・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー通報』社会科学シリーズ 3 号 , アルマトイ , 1971, p.72］。

14）カラハン朝に関する A.U. ヤクボフスキーの意見との比較：「9 ～ 10 世紀の変わり目の彼らの初期の征服は、いくつかの都市、とくに小さな町にとっては大きな災難であった。おそらく、サマルカンドとブハラは大きな衝撃を受けた」（Якубовский А.Ю. Среднеазиатские собрания Эрмитажа и их значение для изучения истории культуры и искусства Средней Азии до XVI в.// ТОВЭ. Т. 11. С. 17［A.U. ヤクボフスキー「エルミタージュの中央アジアコレクションおよび 16 世紀までの中央アジアの文化と美術の歴史研究におけるそれらの意義」『TOVE（Труды отдела Востока Государственного Эрмитажа 国立エルミタージュ東洋部門報告集）』11 巻 , p.17］（斜体［下線］は著者［クズラソフ］による）。

15）Бартольд В.В. Очерк истории Семиречья. 2-е изд. Фрунзе, 1943. С. 38［V.V. バルトリド『セミレーチエの歴史の概観』第 2 版 , フルンゼ , 1943, p.38］。

16）この結論は、依然としてキルギズスタンの考古学者や歴史学者によって議論されているものの、彼らは過去の 50 年間にわたり、いかなる真剣な論拠も示していない。私が反論している［にも関わらず］、金石文研究者のナスティチ В.Н. Настича の断定的な発言は、コチネフ Б.Д. Кочнев のコイン資料とともに、アガジャーノフ С.Г. Агаджанов がその同定を受け入れる根拠となっており（彼［アガジャーノヴ］の Государство Сельджукидов и Средняя Азия в XI-XII вв. М., 1991. С. 243, примеч. 80［『セルジューク国と11～12世紀の中央アジア』モスクワ , 1991, p.243, 註 80］を参照）、ブラナ［遺跡］の一連のカイラク кайрак［墓石］に基づいて示される求められる都市の位置ではなく、16 世紀の史書で出ている、1311 ～1312年に死亡したシャイフ・ムハンマド・ファキーフ шейха Мухаммада Факиха の墓碑銘のみに基づいたものである。

しかし、彼［ムハンマド・ファキーフ］のニスバ［出身や帰属を示す名称］（バラサクニ）は、彼の出身地だけを示し、埋葬地と無関係である。また、（イブン・ワリー Ибн Вали によれば、住民はかつてのバラサグン［バラーサーグーン］と関連付けられる）17 世紀において、「砂のなかから見える」「高い建物：ミナレット、宮殿、マドラサのアーチ」が「ある地点」も、明確にブラナと関係付けることはできない。

コチネフによって研究されたカラハン朝のコインは、11 世紀にバラサグン（もしくはクズ・オルド Куз Орду とも呼ばれた）で製造されたが、アク・ベシムとブラナの都市遺跡での［コインの］発見は、そこに製造所［造幣所］が存在したことを必ずしも意味しない（Настич В.Н. К эпиграфической истории Баласагуна // Красная Речка и Бурана. Материалы и исследования Киргизской археологической экспедиции. Фрунзе, 1989. С. 159, 167, 168, 175, 176［V.N. ナスティチ「バラサグンの碑文の歴史について」『クラスナヤ・レーチカとブラナ』キルギズ考古学隊の資料および研究 , フルンゼ , 1989, pp.159,

167, 168, 175, 176］；Кочнев Б.Д. Монетный чекан Куз Орду - Баласагуна（XI в.）//Там же. С. 144-158［B.D. コチネフ「クズ・オルド－バラサグンのコイン製造所（9世紀）」同上書 , pp.144-158］を参照）。

17）玄奘（7世紀に天山山脈を訪れた中国人の旅行者）は、チュー川流域には「数十の都市があり、それぞれに独立した君主がいたが、それらの君主はテュルク族に従属していた」と記している（Бартольд В.В. Очерк истории Семиречья. С. 17［V.V. バルトリド『セミレーチエの歴史の概観』p.17］）。

18）Кызласов Л.Р. Культурные взаимосвязи тюрков и иранцев［L.R. クズラソフ「テュルク人とイラン人の文化交流」］。

19）Clauson G. Ak Beshim - Suyab // JRAS. 1961, April. p.4。

20）Кызласов Л.Р. Сакская коллекция с Иссык-Куля// Новое в археологии. М., 1972. С. 102-107［L.R. クズラソフ「イッシク・クルのサカ族コレクション」『考古学の新発見』モスクワ , 1972, pp.102-107］。

21）Зуев Ю.А. Ранние тюрки: Очерки истории и идеологии. Алматы, 2002. С. 262-277［Yu. A. ズエフ『初期のテュルク人：歴史と思想の概説』アルマトイ , 2002, pp.262-277］。

22）Кызласов Л.Р. Культурные взаимосвязи тюрков и иранцев. С. 6.［L.R. クズラソフ「テュルク人とイラン人の文化交流」p.6］。

23）630年頃にイッシク・クル湖からチュー川流域に沿ってシルクロードを抜けた仏教の巡礼僧玄奘は、ほぼ初めて、その当時建設中であったスイヤブにいた西突厥の可汗の本拠地について記述した［人物である］（Тугушева Л.Ю. Уйгурская версия биографии Сюань-цзана. М., 1991. С. 3-7［L.Yu. ツグシェヴァ『ウイグル語版玄奘の伝記』［ウイグル語版『大慈恩寺三蔵法師伝』］モスクワ , 1991年 , pp.3-7］）。

24）Окладников А.П. Археологические исследования. С. 50-52［A.P. オクラドニコフ「考古学調査」pp.50-52］。

25）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С. 155-241［L.R. クズラソフ「考古学調査」pp.155-241］。

26）第25国際東洋学会議［XXV Международном конгрессе востоковедов］のG. クローソン Дж. Клосон の発表を参照（Проблемы востоковедения. 1960, №5. С.212［『東洋学の問題』1960年 , 5号。212頁］）；Clauson G. Ak Beshim- Suyab; Ｈ ambis L. Ak-Besim et ses sanctuaires // Comptes rendus de l'Academie des inscriptions et belles-lettres. Ｐ ., 1962；Gabain Ａ . von. Das Leben im uigurische Konigreich von Qoco（850-1250）. Wiesbaden, 1973. S. 241, 242；同上 Einflihrung in die Zentralasienkunde. Darmstadt, 1979. S. 48, 84, 149；Forte A. An Ancient Chinese Monastery Excavated in Ｋ irgiziya // Central Asiatic Joumal. 1994, №38, fasc. 1；Akebieximu Chengzhi（City at Ak-Beshim）// Чжунго дабайкэ цюаньшу［中国大百科全书］. Каогусюэ［考古苏］（Энциклопедия Китая［中国大百科全書］. Археология［考古学］）. Пекин-Шанхай［北京－上海］, 1984. С. 3, 4［p.3, 4］。

27）いまだに、アク・ベシムの発掘調査の革新的な意義が人に知らされないままになっている。たとえば、Байпаков К.М., Горячева В.Д. Семиречье // Археология СССР. Средняя Азия и Дальний Восток в эпоху средневековья. Средняя Азия в раннем средневековье. М., 1999［K.M. バイパコフ , V.D. ガリャーチェヴァ「セミレーチエ」『ソ連考古学 . 中世時代の中央アジアおよび極東 . 中世初期の中央アジア』モスクワ , 1999〔pp.152-162〕］を参照。私にとっては、著者［クズラソフ］による1954年の報告に関する リトヴィンスキーの感想はとくに大切である（Бактрийские шкатулки // Древности Востока. М., 2004. С. 23［「バクトリアの小箱」『古代東洋』モスクワ , 2004, p.23］：「その当時、若いクズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘調査に関する報告を覚えている。中央アジア考古学、仏教遺跡や仏教美術の研究の新たな1ページが開かれた。とても感動した」。この評価は周年記念日の外交辞令ではなかった：「L.R. クズラソフは1953～1954年にアク・ベシム遺跡で最初の仏教僧院を発掘した。最高水準の考古学発掘を実施し、L.R. クズラソフは特有の分析の深さですべての資料を調査し、寺院がまさに7世紀末～8世紀に遡るという結論に達した」（Литвинский Б.А. Еще о буддийских памятниках Семиречья（Киргизия）// ВДИ. 1996, №2. С. 192［B.A. リトヴィンスキー「セミレーチエ地域の仏教遺跡再考」『VDI（Вестник древней истории 古代史通報）』1996, 2号 , p.192）と比較。

28）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С. 213-227［L.R. クズラソフ「考古学調査」pp.213-227］。

29）Беленицкий А.М., Бентович И.Б., Большаков О.Г. Средневековый город Средней Азии. Л., 1973. с. 12, 120, 123, 209［A.M. ベレニツキー , I.B. ベントビッチ , O.G. ボールシャコフ『中央アジアの中世都市』レニングラード , 1973, pp.12, 120, 123, 209］。

30）Труды Таджикской экспедиции, т. I. 1950（МИА, №15）; т. II. 1953（МИА, №37）［『タジキスタン調査団報告』第1巻 , 1950, MIA（ソ連考古学の資料と研究）, 5号；第2巻 , 1953, MIA（ソ連考古学の資料と研究）, 37号］を参照；ほかにも Живопись древнего Пянджикента. М., 1954［『古代ピャンジケントの壁画』モスクワ , 1954］を参照。

31）この出版物には、［かつて］出版された報告書に添付されている建物についての記載や図面、建物の細部、そして遺物の図面といった数多くの写真は再録されていない。Кызласов Л.Р. Археологические исследования［L.R. クズラソフ「考古学調査」］を参照。

32）このテキスト［部分］には、発掘された寺院の設計、機能、そして建物と構造の外観に関する、筆者による歴史的、文化的な性格［付け］についてのおもな情報が含まれている。それに基づき、この寺院が中世初期の仏教建築に

属すること、そしてその歴史上の位置付けを確定することができた。宗教的な建物群の建築材料と構造の特徴に関する技術的な記述は、私たちの指導の下、調査隊の建築専攻学生（フメルニツキー С.Г. Хмельницким とクラスノフ Н.П. Красновым）によって行われ、それが寺院の外観の復元に繋がった。アク・ベシムをわざわざ訪れたヴォロニナ Вероники Леонидовны Ворониной 建築学博士課程候補生からは貴重な相談を受けた。彼女［ヴォロニナ］は、発掘調査の報告書と同時に提出されたこの研究の成果の再検討と編集も行った（Хмельницкий С.Г. Опыт реконструкции буддийского храма городища Ак-Бешим // ТККАЭ（Труды киргизской комплексной археолого-этнографической экспедиции）. Т. II. 1959. С. 243-265［S.G. フメルニツキー「アク・ベシム遺跡の仏教寺院の復元の経験について」『TKKAE（キルギズ考古学・民族誌学総合調査隊報告集）』第 2 巻 , 1959 年 , p.243-265］を参照）。

33）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 16［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 16］。

34）そののち（後述参照）この部屋は長い間、居住［の場］として使用されていたので、床は数回に渡ってプラスター層が塗られた。図 64, 3 に、もっとも高い［上層の］レベルの床を示した。

35）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 20, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 20, 6］。

36）深さ 2.33m、坑上端の直径は 55cm。

37）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 22［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 22］。

38）それが「主」と解読される可能性については、後述の「遺物」の部を参照。

39）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 23, 2［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 23, 2］。

40）前掲書、図 24, 3, 8。

41）前掲書、図 24, 8。

42）前掲書、図 36。

43）この天窓の存在に関しては、第 1 に窓がまったくなかったこと、そして第 2 に広間の中央部では床が雨で侵食されていたことによって結論付けられる。

44）Минаев И.П. Материалы и заметки по буддизму // ЗВОРАО. 1896, т . IX. С. 215［I.P. ミナエフ「仏教に関する資料および覚書」『ZVORAO（Записки Восточного отделения Российского археологического общества ロシア考古学協会東洋支部紀要）』1896, 第 9 巻 , p.215］。

45）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 24, 5, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 24, 5, 6］。

46）Wegner M. Ikonographie des chinesischen Maitreya // Ostasiatische Zeitschrift. B.-Lpz., 1929, Heft 6. S. 252［p.252］以下を参照。

47）6 世紀以降、弥勒菩薩だけは両脚を下ろして座っている姿で描かれた（たとえば、Stein A. Serindia. Vol.II. Oxf., 1921. Pl. 208 を参照）。私たちの塑像に近いのは、ホータンの石製の弥勒菩薩像で、下ろした両脚が蓮の花をかたどった 2 つの台に置かれている（Ольденбург С. Ф. Два хотанских изображения Майтреи // ЗВОРАО. 1900, т. XII С. 0106-0107［S.F. オルデンブルグ「ホータンの 2 つの弥勒菩薩像」『ZVORAO（ロシア考古学協会東洋支部紀要）』1900, 第 12 巻 , pp.0106-0107］）。

48）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 24, 1, 2, 7［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 24, 1, 2, 7］。

49）前掲書、図 24, 2, 5, 7。

50）前掲書、図 24, 6。

51）前掲書、図 27, 5, 6。

52）前掲書、図 28, 2, 3。

53）前掲書、図 28, 6, 8, 9。

54）前掲書、図 29, 1。

55）Ольденбург С. Ф. Русская туркестанская экспедиция 1909-1910 года. Краткий предварительный отчет. СПб., 1914. С. 19. Рис. 8-9［S.F. オルデンブルグ『1909～1910 年のロシアのトルキスタン探検．概報』サンクトペテルブルグ, 1914, p.19, 図 8-9］。とはいえ、同じような巻毛で髪を表現することもある。たとえば、9 ～ 12 世紀のベンガルのヒンズー教の像（Baktay Ｅ . Indian Stone Sculpture in the Budapest Museum of Eastern Asiatic Arts // Acta Orientalia. Budapest, 1953, t. III, pt. 1-2. p.158. Pl. IX）、また国立エルミタージュにあるホータン出土のテラコッタを参照（東洋部 , ГА［GA］-683）。

56）Кызласов ЛР. Археологические исследования. Рис. 29, 5; 38, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 29, 5；38, 6］を参照。

57）Толстов С.П. Древний Хорезм. М., 1948. С. 97. Рис. 33［S.P. トルストフ『古代ホレズム』モスクワ, 1948, p.97, 図 33］。

58）Ghirshman R. Les fouilles de Chapour（lran）// Revue des arts asiatiques. P., 1938, t. XII, №. 1。

59）Ольденбург С.Ф. Русская туркестанская экспедиция. С. 37-38［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』pp.37-38］。

60）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 28, 1, 4, 5［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 28, 1, 4, 5］。

61）Вэнь'у цанькао цзыляо. Пекин, 1954, №. 11（51）. С. 55. Рис. 14（на кит. языке）［Ven'u can'kao czilyao［文物参考資料］, 北京 , 1954, 11（51）号 , p.55, 図 14（中国語）］；ср. дом Ли Лина（1 в. до н.э.）в Хакасии ハカス（共和国）の李陵（紀元前 1 世紀）の宮殿と比較；Евтюхова Л.А. Древнекитайское здание на Среднем Енисее// ВДИ. 1946, №. 1. С. 107［L.A. エヴチュホワ「エニセイ川中流域の古代中国の建物」『VDI〔Вестник древней истории 古代史通報〕』1946年, 1 号 , p.107］；Кызласов Л.Р. Гуннский дворец на Енисее. М., 2001. Рис. 1, 31, 2, 33, 1［L.R. クズラソフ『エニセイ川沿岸のフン族の宮殿』モスクワ ,

2001年, 図 1, 31, 2, 33, 1]。

62）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 27, 1, 3, 9［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 27, 1, 3, 9]。

63）前掲書、図 27, 1-3。

64）前掲書、図 27, 7。

65）前掲書、図 35, 36。

66）前掲書、図 20, 2。

67）前掲書、図 20, 4。

68）前掲書、図 16, 3。

69）Ольденбург С.Ф. Русская туркестанская экспедиция（план Мин-уя между с. 4 и 5）［S.F オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』（p.4 と p.5 の間のミンオイの平面図)］；Дудин С.М. Архитектурные памятники Китайского Туркестана. Пг., 1916. С. 7, 11［S.M. ドゥディン『中国のトルキスタンの建築遺跡』ペトログラード , 1916, p.7, 11］と比較；Stein A. Serindia. Vol. III. Oxf., 1921. Pl. 52, 53。

70）Stein A. Ancient Khotan. Vol. II. Oxf., 1907. Pl. XXV-XXVI。

71）Ольденбург С.Ф. Русская туркестанская экспедиция. С.45［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』p.45］；Le CoqA. Chotscho. B., 1913. s. 14, 15［pp. 14, 15］と比較。

72）Ольденбург С.Ф. Русская туркестанская экспедиция［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』]。p.4 と p.5 の間に貼付［された平面図]。

73）ドゥディン（Архитектурные памятники［『建築遺跡』] p.8）は、シクシン遺跡では大きさ 35 × 18 × 7.5cm の日干しレンガで造られた建物の方がより多いと指摘している。

74）Труды Таджикской археологической экспедиции. Т. II // МИА. 1953, №. 37. Табл. 1［「タジキスタン考古学調査隊報告」第 2 巻 , MIA（ソ連考古学の資料と研究）, 1953, 37 号 , 図版 1].

75）イギリス積みはシクシン遺跡でも使用された（Дудин С.М. Архитектурные памятники. С. 9［S.M. ドゥディン『建築遺跡』p.9]）。

76）シクシン遺跡と同様（Дудин С.М. Архитектурные памятники. С. 13 и 26［S.M. ドゥディン『建築遺跡』p.13, 26]）。

77）Беленицкий А.М. Раскопки согдийских храмов в 1948-1950 гг. // МИА. 1953, №. 37. С. 28［A.M. ベレニツキー「1948～1950 年のソグド神殿の発掘調査」MIA（ソ連考古学の資料と研究）, 1953, 37 号 , p.28］；Воронина В.Л. Архитектурные памятники древнего Пянджикента // Там же. С. 125［V.L ヴォロニナ「古代ピャンジケントの建築遺跡」前掲書 , p.125]。

78）Воронина В.Л. Древняя строительная техника Средней Азии// Архитектурное наследство. Вып. 3. М., 1953. С. 3-35［V.L ヴォロニナ「中央アジアの古代建設技法」『建築遺産』3 号 , モスクワ , 1953, p.3-35]。著者は、いまだに、都市遺跡アク・ベシムやフィールドワーク終了後に示唆を与えてくれた優れた建築史家ヴォロニナについて感謝の思い出を持っている（ヴォロニナについては、Милибанд С.Д. Биобиблиографический словарь отечественных востоковедов. Кн. I. М., 1995. С. 254［S.D. ミリバンド『祖国東洋学者の伝記・書誌辞典』第 1 巻 , モスクワ , 1995, p.254］を参照)。

79）ペレグドヴァによって提案された、私たちが発掘したアク・ベシムの仏教寺院の復元案（Горячева ВД., Перегудова С.Я Будцийские памятники Киргизии// ВДИ. 1996, №. 2. Рис. 2, a［V.D. ガリャチェヴァ , S.Ya. ペレグドヴァ「キルギズの仏教遺跡」『VDI（古代史通報)』1996, 2 号 , 図 2, a]）は、遺構の建築学的特徴と一致していない。少なくとも、東側のドームが中央部屋の上ではなく、隅に位置する部屋 III 上に誤って配置されている点に留意されたい（図 56、78)。

80）Stein A . Serindia. Vol. II. PI. 201, 207, 208。

81）Бартольд В.В. К вопросу о языках согдийском и тохарском// Иран. Т. 1. 1926［V.V. バルトリド「ソグド語とトハラ語の問題について」『イラン』第 1 巻 , 1926]；同上 Отчет о командировке в Туркестан// Изв. РАИМК. Т. II. Пг., 1922［「トルケスタンへの派遣について報告」『Izv. RAIMK（Известия Российской академии истории материальной культуры. ロシア物質文化史アカデミー通報)』第 2 巻 , ペテルブルグ , 1922]；Дьяконов М.М. Росписи Пянджикента и живопись Средней Азии// Живопись древнего Пянджикента. М., 1954［M.M. ディヤコノフ「古代ピャンジケントの壁画と中央アジアの壁画」『古代ピャンジケントの壁画』モスクワ , 1954 年]。

82）Бартольд В.В. История турецко-монгольских народов. Таш., 1928. С. 9［V.V. バルトリド『トルコ－モンゴル民族の歴史』タシュケント , 1928 年 , p.9]；Кызласов Л.Р. Культурные взаимосвязи тюрков и иранцев. С. 3-13［L.R. クズラソフ「テュルク人とイラン人の文化交流」pp.3-13]。

83）Бартольд В.В. Очерк истории Семиречья［V.V. バルトリド『セミレーチエ地域の歴史の概要』]。

84）Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. Монеты из городища Ак-Бешим［L.R. クズラソフ , O.I. スミルノヴァ , A.M. シェルバク「都市遺跡アク・ベシム出土のコイン」]。

85）Бернштам А.Н. Тюргешские монеты; он же. Новый тип тюргешских монет［A.N. ベルンシュタム「テュルゲシュのコイン」;同著者「テュルゲシュ・コインの新タイプ」]。

86）Якубовский А.Ю. Итоги работ Таджикской археологической экспедиции за 1948-1950 гг. // МИА. 1953, №. 37. С. 12［A.Yu. ヤクボフスキー「1948～1950 年のタジク考古学調査隊の活動報告」『MIA（ソ連考古学の資料と研究)』1953 年 , 37 号 , p.12]；Беленицкий А.М. Раскопки согдийских храмов. С. 58［A.M. ベレニツキー「ソグド神殿の発掘」p.58]。

87）Беленицкий А.М. Раскопки согдийских храмов. С. 57-58

［A.M. ベレニツキー「ソグド神殿の発掘」pp.57-58］。

88）Monneret de Villard Ugo. The fire temples // Bulletin of the American Institute for Persian Art and Archaeology. Vol. IV. 1936, №. 4. P. 179. Fig. 4。

89）前掲書、p. 178. Fig. 2。

90）Ghirshman R. Les fouilles de Chapour（Iran）. Tab. X. p. 13。

91）Monneret de Villard Ugo. The fire temples. P. 178. Fig. 3。

92）Дьяконова Н.В. Шикшин. М., 1995. Табл. 6, А 2; 22, С 4; 23, С 5 в; 30; 33, г ; 43, К10, К 13［N.V. ディヤコノヴァ『シクシン』モスクワ , 1995, 図 6, A2；22, C4；23, C5v[в]；30；33, g[г]；43, K10, K13］。

93）Monneret de Villard Ugo. The fire temples. P. 179; Erdmann K. Das Iranische Feuerheiligtum. Lpz., 1941 と比較。

94）Schlumberger D. Le Temple de Surkh Kotal en Bactriane // JA. 1952, T. CCXL, №. 4. P. 433-453; 同上 A late Hellenistic Temple in Bactria // Archaeology. N. У., 1953, vol. 6, №. 4。

95）しかしながら、最終的には同じ型式の初期の［古い］寺院が中央アジア地域でも発見される可能性がある。

96）Вэнь'у цанькао цзыляо. С. 54-55 и план 14［Ven'u can'kao czilyao［文物参考資料］. pp. 54-55 および図 14］。

97）Schlumberger D. Le Temple de Surkh Kotal。

98）Schlumberger D. A late Hellenistic Temple in Bactria. Fig.7, 8。

99）Засыпкин Б.Н. Архитектурные памятники Средней Азии // Вопросы реставрации. М., 1928, вып. 2. С. 277-278［B.N. ザスィプキン「中央アジアの建築遺跡」『修復の諸問題』モスクワ , 1928, 2 号 , pp.277-278］。残念ながら図面は出版されていない。

100）前掲書。

101）前掲書、p.282。

102）塑像の破片は、広間と回廊のみで発見された。さらに 1954年に、寺院の正面入口のスロープをクリーニングした際、もともと入り口の柱を飾っていた土製のレリーフ文様の破片が見つかった。たとえば［紐で］結ばれた束など、植物のみを描いたレリーフであることに注意すべきである。

103）Hackin J. et Bruhl Ｏ. Derniers Travaux de la Delegation archeologique francaise en Afganistan // Revue des arts asiatiques. T. VIII, №. 2. P., 1934. pp.116-119. Tab. XXXVll。

104）アフガニスタンの、上述のテペ・マランジャンには類例（型作りの「ベルト」、蓮弁文様など）がある。

105）Ольденбург С.Ф. Русская туркестанская экспедиция. Табл. VII［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』図 VII］；Stein A. Serindia. Vol. IV. Pl. CXXIX, CXXXIII, CXXXIV；Дьяконова Н.В. Шикшин. Табл. Б, 1, 2, 4, 5, 7; В, 7; XLV, XLVI; Гос. Эрмитаж, Отдел Востока, Ш-478, Ш-297, КУ-263, 264［N.V. ディヤコノヴァ『シクシン』図 b, 1, 2, 4, 5, 7；V, 7；XLV, XLVI；国立エルミタージュ , 東洋部 , Sh-478, Sh-297, KU-263, 264］。

106）Stein A. Serindia. Vol. IV. Tabl. IV; Гос. Эрмитаж, Отдел Востока, ГА-51（3036-28）и др［国立エルミタージュ , 東洋部 , GA-51（3036-28）ほか］。

107）Le Coq A. Chotscho. Abb. 57。

108）Гос. Эрмитаж, Отдел Востока, ГА-2104［国立エルミタージュ , 東洋部 , GA -2104］。

109）同上、КУ［KU］-145；Stein A. Serindia. Vol. IV. Pl. XLVI と比較。

110）Stein A. Serindia. Vol. II. Pl. XVI。

111）Ольденбург С. Ф. Русская туркестанская экспедиция. Табл. XIV［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』図 14］。

112）Гос. Эрмитаж, Отдел Востока: СА-6681, СА-6651, СА-7526［国立エルミタージュ , 東洋部：SA-6681, SA-6651, SA-7526］。

113）同上、СА［SA］-6256。

114）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 35, 7［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 35, 7］。

115）前掲書、図 36。

116）Ольденбург С. Ф. Русская туркестанская экспедиция. Табл. XXXVIII-XL［S.F. オルデンブルグ『ロシアのトルケスタン探検』図 XXXVIII-XL］。

117）モンゴル西北部のモンゴル族（Потанин Г.Н. Очерки Северо-Западной Монголии. Вып. 2. СПб., 1881. С. 111［G.N. ポタニン『モンゴル北西部概論』2 号 , サンクトペテルブルグ , 1881, p.111］）、トゥヴァのトゥヴァ族（まさに同じ木製の犂がクズル市のトゥヴァ地方博物館に保管されている）が同じような犂を使用していた。

118）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 28, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 28, 6］。

119）前掲書、図 28, 5。

120）同じような石臼は、アルタイ（バシカウス川 Башкаус）での偶然の発見で知られている（Древности// Труды Московского археологического об-ва. М., 1886, т. XI, вып. 2. Табл. V. Рис. 16-17［『古代』モスクワ考古学協会報告〔Московского археологического общества〕, モスクワ , 1886, XI 巻 , 2 号 , 図版 V, 図 16-17］を参照）。

121）Тереножкин А.И. Согд и Чач// КСИИМК. 1950, вып. XXXIII. С. 168［A.I. テレノーシュキン「ソグドとチャーチ」KSIIMK（ソ連科学アカデミー物質文化史研究所概報）, 1950, XXXIII 号 , p.168］。

122）［以下の］書の「飾り板」を参照：Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 38, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 38, 6］。

123）Le Coq A. Chotscho. Taf. 58。

124）Stein A. Serindia. Vol. II. Pl. 209, 211。

125）Кизерицкий Г. Хотанские древности из коллекции Н.Ф. Петровского// ЗВОРАО. 1886, т. IX. С. 185. Рис. 25［G. キゼリツキー「N.F. ペトロフスキー・コレクションのホータンの古代物」『ZVORAO（Записки Восточного

отделения Российского археологического общества ロシア考古学協会東洋支部紀要』1886［1896の誤植］, IX巻 , p.185, 図25］。

126）写真参照：Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 29, 5［L.R. クズラソフ「考古学調査」図29, 5］。

127）前掲書、図38, 6。

128）前掲書の写真参照、図29, 2, 3。

129）Le Coq A. Chotscho. Taf. 59。

130）Stein A. Serindia. Vol. IV. Pl. CXXXII；Гос. Эрмитаж, Отдел Востока, Ш-462-465, ГА-654, 666, 667［国立エルミタージュ , 東洋部：Sh-462-465, GA-654, 666, 667］。

131）Foucher A. L'art greco-bouddhique du Gandhara. T. 1. P., MDCCCV. Fig. 145, 242, 247。

132）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 38, 6［L.R. クズラソフ「考古学調査」図38, 6］。

133）Foucher A. L'art. Fig. 83。

134）Материалы по доисторической археологии России // ЗРАО, н.с. Т. VIII, вып. 1-2. С. 167, 168. Рис. 44, 45［「ロシア先史時代の考古学資料」『ZRAO（Записки русского археологического общества ロシア考古学協会紀要』, n.c.（新シリーズ）8巻 , 1-2号 , pp.167, 168, 図44, 45］。

135）Бернштам А.Н. Изображение согдийца в коропластике Чуйской долины// КСИИМК. 1948, вып. XIX. С. 61-65［A.N. ベルンシュタム「チュイ川流域のテラコッタにおけるソグド人の図像」『KSIIMK（ソ連科学アカデミー物質文化史研究所概報）』1948, 19号 , pp.61-65］。

136）Гос. Эрмитаж, Отдел Востока, СА-105［国立エルミタージュ , 東洋部 , SA-105］。

137）同上、CA［SA］-570。

138）現在では、ときにはラクダの図像をともなう神々の夫婦の図像がペンジケントの住居と宮殿の聖所の壁画に見つかっている。それらの研究においては、つねにアク・ベシム寺院の飾り板が関連付けられ、仏教－イランの図像における早期の類似性を示している（Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С. 208, 209［L.R. クズラソフ「考古学調査」pp.208, 209］）。例えば、Belenickij A . Zentralasien（Archaeologia Mundi）. Munchen-Genf-Paris, 1968. Abb. 66. S. 140；Шкода В.Г. К вопросу о культовых сценах в согдийской живописи// СГЭ. 1980, XLV. Рис. 1, 1, 4, 5［V.G. シュコダ「ソグド絵画の宗教的場面の問題について」『SGE〔Сообщения Государственного Эрмитажа 国立エルミタージュ通信〕』1980, XLV, 図1, 1, 4, 5］；Маршак Б.И. Согд V-VIII вв. Идеология по памятникам искусства// Археология. Средняя Азия и Дальний Восток в эпоху средневековья. Средняя Азия в раннем средневековье. М., 1999. С. 182［B.I. マルシャーク「5～8世紀のソグド . 記念物芸術のイデオロギー」『考古学 . 中世の中央アジアおよび極東 . 中世初期の中央アジア』モスクワ , 1999, p.182］。

139）Grunwedel A . Mythologie des Buddhismus in Tibet und in der Mongolei. Lpz., 1900. S. 158, 178。

140）Маршак Б.И. Согд V-VIII вв. С. 182［B.I. マルシャク「5～8世紀のソグド」p.182］。

141）Смирнова О.И. Сводный каталог согдийских монет. Бронза. М., 1981. С. 53-56, 359-370, №. 1482-1497, Табл. XL, LIV, LV, 1-4, 6, LVI, 1, 2, LXXXI［O.I. スミルノヴァ『ソグドコインの総合カタログ．ブロンズ［コイン］』モスクワ , 1981, pp.53-56, 359-370, nos.1482-1497, 図版40, 54, 55, 1-4, 6, 56, 1, 2, 81（XL, LIV, LV, 1-4, 6, LVI, 1, 2, LXXXI）］；Зеймаль Е.В. Монеты раннесредневековой Средней Азии // Археология. Средняя Азия и Дальний Восток в эпоху средневековья. Средняя Азия в раннем средневековье. М., 1999. Табл. 121, 6, 7; 123, 9, 12, 15, 18, 21, 23［E.V. ゼイマリ「中世初期の中央アジアのコイン」『考古学．中世時代の中央アジアおよび極東．中世初期時代の中央アジア』モスクワ , 1999, 図版121, 6, 7；123, 9, 12, 15, 18, 21, 23］。

142）Кызласов И.Л. Изображения Тенгри и Умай на Сулекской писанице// ЭО. 1998, №. 4［I.L. クズラソフ「スレク岩絵のテングリとウマイ画像」『EO（Этнографическое обозрение 民族誌学評論）』1998, 4号］。

143）東トルキスタンの遺物のなかでは、ラクダやそのほかの動物の形をした同じような青銅製の吊り下げ形の護符および水差しが知られている（Кизерицкий Г. Хотанские древности. С. 189. Рис. 32-34［G. キゼリツキー「ホータンの古代物」p.189, 図32-34］を参照）。

144）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 37, 5, 6［L.R. クズラソフ『考古学調査』図37, 5, 6］。

145）Фрейман А.А. Опись рукописных документов, извлеченных из развалин здания на горе Муг, в Захматабадском районе Таджикской ССР около селения Хайрабад и собранных Таджикистанской базой Академии наук СССР// Согдийский сборник. Л., 1933［A.A. フレイマン「タジク・ソビエト社会主義共和国ザフマターバード地区ハイラーバード村近郊のムグ山上の建物の廃墟で見つかり、ソ連科学アカデミーのタジク支部により収集された手書き文書の目録」『ソグドコレクション』レニングラード , 1933］。

146）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 22［L.R. クズラソフ「考古学調査」図22］。

147）しかしながら、もう一方では、「prn」、つまり「恵み благодать」と読むという提案もある（Лившиц В.А. Согдийцы в Семиречье: лингвистические и эпиграфические свидетельства// Красная Речка и Бурана. Фрунзе, 1989. с. 80［V.A. リフシツ「セミレーチエ地域のソグド人：言語学的および碑文的な証拠」『クラスナヤ・レーチカとブラナ』フルンゼ , 1989, p.80］）。

148）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С. 210［L.R. クズラソフ「考古学調査」p.210］。

149）Беленицкий А.М. Раскопки согдийских храмов［A.M. ベレニツキー「ソグド諸神殿の発掘調査」］。

150）同じようなビーズがペンジケント（Беленицкий А.М. Археологические работы в Пенджикенте // КСИИМК. 1954, вып. 55. С. 39. Рис. 5-11［A.M. ベレニツキー「ペンジケントにおける考古学調査」『KSIIMK（ソ連科学アカデミー物質文化史研究所概報）』1954, 55 号 , p.39, 図 5-11］）およびカフィル・カラ都市遺跡（7 ～ 8 世紀）で発見された（国立エルミタージュ東洋部で保管、CA［SA］-7491）。

151）国立エルミタージュ東洋部で保管。

152）Clauson G. Ak Beshim-Suyab. p.8。現在、Y.A. ズエフも原文のこの部分を同じように解読している。

153）Clauson G. Ak Beshim-Suyab. p.11。

154）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С.210［L.R. クズラソフ「考古学調査」p.210］。

155）Forte A. An Ancient Chinese Monastery Excavated in Kirgiziya. P. 42 ff. 英語版からのロシア語訳の出版（前者の場合、フォルテ A. Forte の説明補足を除く）：Литвинский Б.А. Еще о буддийских памятниках Семиречья. С. 190［B.A. リトヴィンスキー「セミレーチエ地域の仏教遺跡再考」p.190］；Лубо-Лесниченко Е.И. Сведения китайских письменных источников о Суябе（городище Ак-Бешим）// Суяб, Ак-Бешим. СПб., 2002. С. 118［E.I. ルボ＝レスニチェンコ「スイヤブ（都市遺跡アク・ベシム）に関する中国文献からの情報」『スイヤブ．アク・ベシム』サンクトペテルブルグ , 2002, p.118］。スイヤブに関する中国史料の概要をまとめるために、ズエフによって独自に行われた原文のこの部分の翻訳と比較：「また、スイヤブという街がある。天寶 7 年（748 年）に北庭（ビシュバリク）の支配者、王正見 Ван Чжэнь-сянь は〔西方に対して〕懲罰的な遠征を開始し、街の城壁が〔彼（？）によって〕破壊され、集落が衰退した。かつて交河公主 Цзяохэ-кунчуй が住んでいた場所に、彼はいまも存在している仏教寺院の大雲寺 Да-юнь-сы を建てた」（Зуев Ю.А. Ранние тюрки. С. 271, 272［Y.A. ズエフ『早期のトルコ族』271，p.272］）。

156）Forte A. An Ancient Chinese Monastery Excavated. p.42, 43, 50。

157）同上、p. 53。

158）Литвинский Б.А. Еще о буддийских памятника. С. 191, 192［B.A. リトヴィンスキー「セミレーチエ地域の仏教遺跡再考」pp.191, 192］。たいへん残念なことに、アク・ベシムの発掘調査において 50 年以上前に私たちによって達成された具体的な歴史的、文化的な発見のみならず、一般的な方法論的な考古学の発見についても、ロシア語の科学文献のなかでは沈黙が続いているという状況について改めて述べなければならない。

159）上述に加え、この点と特定の観察については［以下を］参照：Хмельницкий С.Г. Опыт реконструкции буддийского храма［S.G. フメルニツキー「仏教寺院の復元の試み」］。

160）Лубо-Лесниченко Е.И. Сведения китайских письменных источников. С. 119-127. Рис. 1-5［E.I. ルボ＝レスニチェンコ「中国文献からの情報」pp.119-127, 図 1-5］。

161）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 27, 6; 43, 1［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 27, 6；43, 1］。

162）前掲書、図 24, 1, 3。

163）前掲書、図 27, 1, 3；43。

164）Брыкина Г.А. Кайрак（галька）с тюркской писаницей из Ак-Бешима// КСИИМК. 1959, вып. 76. С. 112-114［G.A. ブリキナ「アク・ベシム遺跡出土のテュルク人の岩絵をともなうカイラク（礫）」『KSIIMK（ソ連科学アカデミー物質文化史研究所概報）』1959 年 , 76 号 , pp.112-114］。

165）長方形のループが折れているが、その痕跡は残っている。棒［の断面］は四角形である。

166）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. С. 217［L.R. クズラソフ『考古学調査』p.217］。

167）Древности Таджикистана. Каталог выставки. Душ., 1989. С. 248,249（№ 587）［『古代タジキスタン。展示品カタログ』ドゥシャンベ , 1989 年 , pp.248, 249（No.587）］。加えて、Материальная культура Таджикистана. Вып. 4. Душ., 1987［『タジキスタンの物質文化』4 号 , ドゥシャンベ , 1987 年］を参照。

168）Описание иностранных государств на Западе. Герат. Пер. с кит. Б.И. Панкратова// Страны и народы Востока. Вып. XXVI. М., 1989. С. 111［「西域諸国の記述。ヘラート。中国語からの翻訳」、B.I. パンクラトワ『東洋の国家と民族』26 号 , モスクワ , 1989 年 , p.111］。

169）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 16, 2, 4［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 16, 2, 4］。

170）完全に類似した（長靴の？）蹄鉄はムンチャク・テペ Мунчак-тепе（9 ～ 11 世紀の層）で発見され、国立エルミタージュで保管されている。

171）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 55, 1, 2［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 55, 1, 2］。

172）前掲書、図 50, 3。

173）前掲書、図 43, 4, 5。タンディル Тандыр は小石が混じった粘土で造られており、焼く前の［平たい］パンがより良くくっつくように、内側のプラスター層には密に刻み目がつけられていた。火室（直径 16cm）は東側の底部にあった。

174）Кызласов Л.Р. Археологические исследования. Рис. 50, 5［L.R. クズラソフ「考古学調査」図 50, 5］。

175）前掲書、図 43, 4, 5；50, 4。

176）9 ～ 10 世紀のエニセイの鎌と比較（Евтюхова Л.А. Археологические памятники кыргызов（хакасов）. Абакан, 1948. С. 83. Рис. 167［L.A. エヴチュホワ『キルギズ人（ハカス人）の考古学遺跡』アバカン , 1948 年 , p.83, 図 167］）。

177）V.I. ツァルキン В.И. Цалкина による同定に対して、私たちは感謝の気持ちを記憶している。

178）10 世紀の複合体［建築群］出土の拍車と比較（Гуревич Ф.Д. Древние поселения Калининградской области// КСИИМК. 1951, вып. XXXVIII. Рис. 42［F.D. グレヴィチ「カリーニングラード州古代集落」『KSIIMK（ソ連科学アカデミー物質文化史研究所概報）』1951 年 , 38 号 , 図 42］）。

179）一括出土［コイン］の年代の確定は（当時スターリナバードに住んでいた）貨幣学者 E.A. ダヴィドヴィチ Е．А．Давидович によって行われた。丘のほかの場所でもカラハン朝のコインがいくつか見つかっている（Кызласов Л.Р. Археологические исследования на городище Ак-Бешим. Приложение 1; Давидович Е.А. Ак-бешимский клад караханидских монет XI вв. // Там же. С. 242［L.R. クズラソフ「アク・ベシム遺跡考古学調査」附録 1；E.A. ダヴィドヴィチ「11世紀のアク・ベシム遺跡出土のカラハン朝コインの一括出土コイン」前掲書 , p. 242］を参照）。

訳註

訳註１）原文では「Чуйская долина 」で、「チュー盆地、チュー渓谷」とも訳されるが、本翻訳では「チュー川流域」と訳した。また、国名については、日本語では一般的には「キルギス共和国」と表記されるが、本翻訳では原文にあわせて「キルギズ」とした場合もある。また、川や地域の名称としては「チュー」を用いたが、「チュイ調査隊」のように「チュイ」と表記した場合もある。

訳註２）「トルトクル」または「トルトクリ」は、壁で囲まれた方形の区画のこと。ここでいう「トルトクル」は、「シャフリスタン 1」を指しているものと思われる。

訳註３）ベルンシュタムによる調査については、川崎・山内「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン 2 の発掘調査― 1939 年 , 1940 年―」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集, 2020, pp.215-245 を参照のこと。

訳註４）原文では「тюргешского круга」であるが、本稿では「テュルゲシュ式」と訳した。一般的に「トゥフス・コイン」と呼ばれてきたものがこれにあたる。

訳註５）確かに、都市の中核部分をなすブラナ遺跡の規模は決して大きくない。しかしながら、1937～38年に作成された地図によれば、現在のブラナ遺跡の北東側には長さ約 8.6km に及ぶ長い壁、そしてさらにはその東側には長さ約 3km の壁が存在していたことが記録されている（キルギス共和国国立科学アカデミー・帝京大学シルクロード総合学術研究センター『チュー川流域東部の地形図』2017, p.14.）。遊牧民族の国家であったカラハン朝は、この長い壁に囲まれた区域のなかにテントを建てて居住していたものと推測できる。それゆえ、ブラナ遺跡そのものの規模が小さいからといって、ここがバラサグンではないという証明にはならないものと考えられる。また、都市の立地を見ると、ソグド人はチュー川沿いの地点を都市建設の場所として選んでいるのとは大きく異なり、キルギズ・アラトー山脈の北側の山麓を選んでいる。農耕よりも遊牧（移牧）生活の拠点（おそらく冬営地）として場所を選んでいる点を考慮に入れれば、ブラナ遺跡がバラサグンであった可能性は高いものと考えられる。

訳註６）クローソンの発表と論考については、山内・吉田「アク・ベシム遺跡－スイヤブ」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, pp.85-102 を参照。

訳註７）原文では「совхозных управлений учета и контроля районного города Токмака」。

訳註８）現代ペルシア語では、「カーリーズ Kāriīz」、「カナート qanāt」と呼ばれる地下水路のこと。

訳註９）現在では、その地下水路の存在は確認できない。また、この地域が地下水路、カナートによって水が供給されていたことを示す痕跡は存在しない。

訳註10）異論はあるものの、「スイヤブ」という名称は、「ス su」と「アーブ ab」（ヤブ yab ではなく）からなるものとされている。「ス」は現在のチュー川を指すものと考えられる。「スイヤブ」という水路が存在したとすれば、チュー川から引かれた水路であり、アク・ベシム遺跡周辺に水を供給している、現在「オスモン・アリク」と呼ばれる水路を指していた可能性もある。その場合、スイヤブは、「ス（チュー）」川の「アーブ」（水路、川）という意味になり、この水路の名称に因んで都市がスイヤブと呼ばれたとも考えられる。

訳註11）現在ではシャフリスタン 2 として知られている地区であり、中国の唐王朝の砕葉鎮城が存在していただけでなく、それ以降、11 世紀に至るまでの人の居住の痕跡が確認されている。

訳註12）シャフリスタン 2 の西部、シャフリスタン 1 の東壁の東側に位置する貯水池のこと。この貯水池は、中国の唐軍によって建設された可能性が高い。

訳註13）原文では「городская округа」で、「市街地、街区」の意味である。本稿では郊外区と訳した。

訳註14）原文では「овраг」で、一般的には「渓谷」、「谷」、「ガリ」に訳される。実際に現地で確認できるのは、深く、幅がやや広い水路、もしくは溝であることから、本稿では「水路」や「濠」と訳した。

訳註15）原文では「систему экранов」。直訳すれば「スクリーンシステム」となるが、後述等を参照し、本翻訳では「断面観察方式」と訳した。また、「スクリーン」については、「断面」という訳語をあてた。おそらく、上層から平面的に掘り下げるだけではなく、日本考古学で一般的に用いられている「セクション」、つまり「断面」の観察をきちんとした方式として導入することによって、科学的な調査を目指したことを意味しているものと思われる。

訳註16）原文では「на пяти объектах」。訳文では、基本的にはこの「オブジェクト」を「遺構」と訳したが、適宜「調

査対象」と訳出した部分もある。

訳註17）原文では「стратиграфический раскоп」。

訳註18）原文では「глинобитные」（捏ねた粘土造りの、スサなど混ぜて緊密に捏ねた粘土造りの）。おそらく、練り土のブロック、つまり「パフサ」を指しているものと考えられる。

訳註19）この記述によれば、遺跡の長軸、つまり東西方向の軸に沿って南北に分け、その軸と直交するように、幅6mからなる13の発掘区を設定し、北側の発掘区を1～13番、南側の発掘区を1a～13a番としたということになる。それゆえ、発掘区の南北方向の長さは、それぞれの発掘区が位置する丘の幅に応じて異なることとなる。また、後述によれば、西から東に向かって、1から13番、1aから13a番までの番号を付したことになる。

訳註20）原文では「スクリーン・ベルト」となっているが、これはいわゆる「セクション」観察のための「ベルト」、「畔」を指しているものと思われる。本翻訳では「ベルト」と訳した。

訳註21）原文では「6、6a、8、10、11区のみの設定を行った」という記述がある一方で、「1953年に1～6、1a～6a区を完了」と記されており、記述に齟齬が見られるが、誤植と思われる。

訳註22）原文では「глинобитных（пахсовых）нарезанных блоков」（カットされた、整形された練り土［パフサ］ブロック）。本稿では「整形された［方形］ブロック」と訳したが、必要に応じて「パフサ・ブロック」という用語も用いた。

訳註23）おそらく、外側は斜面に沿って低くなっていたため、この部分には少し大きめのパフサ・ブロックを用いたものと思われる。

訳註24）原文では「суфа（スーファ）」で造り付けのベンチ状遺構のこと。本稿では「ベンチ」と訳した。

訳註25）原文では「лепной глиняный барельеф」。

訳註26）ここでいう壁の幅は、むしろ奥行きを指していると考えられ、壁の間全体に日干しレンガを敷き、敷居としていたものと思われる。

訳註27）原文では「вестибюль」で、「玄関、玄関ホール、ロビー」の意味。本稿では「出入り口ホール」と訳した。

訳註28）原文では「привратное помещение」。

訳註29）原文では「алебастр（アラバスター）」であるが、本稿では「石灰」と訳した。

訳註30）原文では「ползучая арка」。これが意味するものは明確ではないが、「支柱の一方の側が他方より高くなっているアーチ」、「異なった高さの基部を持つアーチ」を指すものと考えられる。

訳註31）原文では「барабан」。（建築）ドームの基礎として機能する建物の円筒形または多面体の部分を指す。

訳註32）原文では「тромп」。「ラッパ」を意味するフランス語（trompe）からの借用語で、ラッパ状の形にスキンチ（入隅迫持）を架ける方法、またその部分を指す。

訳註33）原文では「бляха」で、一般的には「バッチ」の意味。本稿では「飾り板」と訳した。

訳註34）原文では「часовня」。本稿では、仏教寺院に関する施設の場合には原則として「祠堂」と訳したが、ほかの宗教に関する施設の場合は、それにあわせて「聖所」あるいは「神殿」と訳した。

訳註35）原文では「льячка」で、「取鍋〔とりべ〕、溶融した金属を流し込むためのひしゃく型の容器」。

訳註36）原文では「айваны-навесы」。一方には壁がなく、開けている、いわゆるベランダのような構造物。

訳註37）原文では「батрап」。図中（図66, 77）では「выгребная яма」がこの「батрап」に対応する用語として用いられていることから、本稿では「排水・汚水用（トイレ用）の穴」と訳した。

訳註38）原文では「розетка」。本稿では「蓮弁」と訳した。

訳註39）原文では「спираль」、つまり「螺旋形のもの」であるが、本稿では「螺髪」と訳した。

訳註40）原文では「глиняные статуи Будды（土造りの仏陀の像）」。本稿では「仏陀の塑像」と訳した。

訳註41）原文では「Будда Майтрея」。

訳註42）原文では「атавизм」。

訳註43）原文では「гумбез」。

訳註44）「西側通路でのみ、ベンチは高さ1.18mに達し、異なった建築上の設計となっており、巨大な基壇をなしている」ことはとくに注目される点である。アク・ベシム遺跡の第1仏教寺院、第2仏教寺院、そしてクラスナヤ・レーチカ遺跡の第1仏教寺院、第2仏教寺院の祠堂の中心部分の構造はすべてきわめて類似している。その一方で、クラスナヤ・レーチカ遺跡の第2仏教寺院の西側回廊の東側の壁沿いでは、全長約8mの涅槃仏が見つかっている。クズラソフの記述および図面に基づけば、アク・ベシム遺跡の西側回廊の東側の壁の長さは約10mあり、その壁に沿って「高さ1.18mのベンチ」が設置されているとある。おそらく基壇のように見えた「高さ1.18mのベンチ」はかつて存在して涅槃仏の痕跡であろう。さらに述べれば、同じように構造を持つアク・ベシム遺跡の第2仏教寺院（AKB-18）、あるいはクラスナヤ・レーチカの第1仏教寺院でも西側回廊に涅槃仏があった可能性も考えられる。

訳註45）立像等の塑像の支柱であった可能性も考えられるが、その用途と機能は不明である。

訳註46）現在、この地点を南から北に流れている水路は、かつて造られたこの水路の流路に沿っているものと考えられる。

訳註47）原文では「трамбовка」で、字義は「突き固めるための道具」。

訳註48）この石製品の用途は不明であるが、開け損ねた孔などの痕跡を見ると、砥石かもしれない。

訳註49）原文では「цепная кладка」。長手積み1段と小口積みの1段の繰り返しによるレンガの積み方。

訳註50）原文では「стилобат」。本稿では「土台」と訳した。

訳註51）原文では「построение арок кладкой плашмя, когда кирпич облегает кривую арки не ребром, а постелью」。図62によれば、レンガを立てて積むのではなく、寝かして積み、そのためにレンガの「平」面が見えるようになっている構造や工法のアーチを意味しているものと思われる。

訳註52）原文には寺院の名称が記されていないことから、不確かであるが、鎮国寺のことか。

訳註53）原文では「арча（アルチャ）」。キルギズのブウルスン種（типа киргизского буурсуна）。

訳註54）原文では「иконостас」、つまり「イコノスタシス」。聖所（内陣）と至聖所を区切るイコンで覆われた壁のことを指し、本稿では「聖障」と訳した。

訳註55）原文では「ожерелье типа бармы」。

訳註56）原文では「бурхан」。ブルカンは、「仏陀」が（古代）ウイグル語などのテュルク語化したものが、さらにモンゴル語化した形であり、「仏」や「神」を意味する。

訳註57）本翻訳で繰り返し登場する「テュルゲシュ式コイン（монеты тюргешского круга）」は、いわゆるトゥフス・コインと呼ばれているものである。現在では、このコインは「ワナントマーフ・コイン」であると認識されるようになっているものの、依然として「トゥフス・コイン」の名称が用いられることも多い。このテュルゲシュ・コインとトゥフス・コイン、つまりワナントマーフ・コインについては、吉田「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大學文學部研究紀要』57, 2018, pp.155-182 およびクローソン著 , 吉田・山内訳「アク・ベシム遺跡－スイヤブ」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, pp.83-102 の補説（吉田）を参照されたい。

いずれにしても、このテュルゲシュ式コインの出土状況は、クズラソフが述べているように、第１仏教寺院の建設とそれが機能していた年代を考える上で重要な資料となる。いわゆるテュルゲシュ・コインは蘇禄が発行したものと考えられるならば、テュルゲシュ・コインは715年頃から738年頃までの間に発行されたとみなすことが可能である。クズラソフは、テュルゲシュ・コインとテュルゲシュ式コインの出土状況を比較検討し、テュルゲシュ式コインがテュルゲシュ・コインに時代的に先行するものと結論付けている。その一方で、それとは逆に、テュルゲシュ・コインがテュルゲシュ式コインに先行するという議論もある（前掲の吉田 2018、カミシェフ著 , 山内・吉田訳「アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, 2021, pp.103-126、カミシェフ著 , 山内・吉田訳「チュー川流域における中世初期コインの新発見」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, 2021, pp.127-136 を参照）。

テュルゲシュ式コインがテュルゲシュ・コインに先行するのであれば、第１仏教寺院は、クズラソフが言うように７世紀末に建設されたこととなり、テュルゲシュ・コインがテュルゲシュ式コインに先行し、そののちテュルゲシュ・コインとテュルゲシュ式コインが同時に流通していたとするのであれば、第１仏教寺院は８世紀の中頃以降に建設されたことなる。

訳註58）原文では「каменное керамическое лощило」。「石製」と「焼き物製」は矛盾しているが、本翻訳ではそのまま訳出した。「石状の焼き物製の」という意味なのかもしれないが、いずれにしても明らかでない。

訳註59）杜環の記録については、以下の柿沼による翻訳を参照のこと（柿沼「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, 2019, p.52）。「また砕葉城がある。天宝７年（748年）に、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁は砕き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主（阿史那懐道の娘。722年12月に玄宗が封じ、突騎施の蘇禄可汗に嫁ぐ）が「居止」されたところで、大雲寺が建てられており、まだ残存していた」。

訳註60）この部分の記述には曖昧な点が多い。何について「雄弁に語っている」のかは明記されていないが、文脈からすれば「中国人僧侶の存在の可能性を」とも考えられる。「墓石」は、1997年に第２仏教寺院のそばで見つかったとされるもう１つの石碑を指しているものと思われる。また、「大雲寺の廃墟に隣接した場所」とあるが、クズラソフが考える「大雲寺」はどの仏教寺院址であり、「隣接した場所」も明記されていない。いずれにしても、クローソンが第１仏教寺院を大雲寺に比定した一方で、クズラソフは、フォルテの議論を参照しながら、第１仏教寺院は大雲寺ではないと考えたようである。

実際には、出土した遺物などからみて、大雲寺の可能性がもっとも高いのは、シャフリスタン２に位置するベルンシュタムによって発掘された仏教寺院、つまり AKB-0 といえる（川崎・山内「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン２の発掘調査」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, 2020, pp.215-245 を参照のこと）。現時点では結論は出ないものの、いずれ AKB-0 の再調査が行われれば、明確な答えを得ることができよう。

訳註61）この部分では、煮炊きのために火を用いる場所や施設の用語として、「очаг」と「кострище」という２つの語が用いられている。本翻訳では、「очаг」は「竈」、「кострище」については、「焚火」もしくは「焚火の痕跡」と訳した。

訳註62）原文では「казан」。

訳註63）原文では「пуговица」。ここでは「ボタン」と訳したが、紡錘車の可能性もある。

訳註64）陳誠が記した『西域番国志』。陳誠は、1414年、1416年、1420年に明の使節としてティムール朝の都サマルカンドを訪れ、この際の見聞を『西域番国志』および『西域行程記』に記した。

訳註65）原文では「камин（暖炉）」。ここでは「炉」と訳した。

訳註66）原文では「лежанка-кан」。寝台の下に火室が掘り込まれていることから、「カン」は一種の床暖房システムをともなう施設と考えられる（詳しくは前掲の川崎・山内 2020, p.232 を参照のこと）。

訳註67）原文では「камины и многочисленные каминообразные очаги」。この部分では「камин」を「暖炉」、「тандыр」を「パン焼き竈」と訳した。

訳註68）原文では「железная мотыжка типа чота」。

訳註69）原文では「кости крупного и мелкого рогатого скота（大型と小型の角を持つ家畜の骨）」。このあとに挙げられている家畜の名称を考慮すれば、ここではウシとヒツジ、ヤギを指しているものと思われる。

訳註70）図 100 では「4」の番号が付された遺物はないが、形状や図の配置からすれば、「1」と「8」に挟まれた遺物がそれにあたるものと推測される。

訳註71）原文では「грифельная кость」。退化した第二・四指の中骨。

訳註72）原文では「железных колунообразный топор」。

訳註73）原文では「обоймица」。帯に掛けるためのリング付きの鞘の金属製鯉口、あるいはベルトの定革もしくは遊革か。

訳註74）「図103, 11, 11, 12」は、「図103, 10, 11, 12」の誤植と思われる。

訳註75）原文では「кольцо-вертлюг」。自由に回転する金属製の環、回し継ぎ手のこと。

訳註76）原文では「илекские монеты」、つまりイレク朝（カラハン朝）のコイン。